
それゆけ！ 僕らの勇者様！

--

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それゆけ！ 僕らの勇者様！

【Nコード】

N8085S

【作者名】

—
—

【あらすじ】

これはよくあるファンタジー。勇者がいて、魔王がいて、人がいて、魔物がいて。そんな世界の勇者の一人、カイル青年の物語。お供は物言いがキツイシエラ、堅物のガディ、不気味系のリーウエ。個性的なメンバーをまとめ（られず）、魔王を倒す（こともなく、静かに博打が打てる生活の）ために旅をする、人間失格気味な勇者活劇。

ブログ 僕は勇者だ！ ……多分 (前書き)

初投稿です。

更新不定期です。

評価が入るとうれしいです。

暇つぶしにどうぞ。

2011年5月16日、編集しました。

2011年9月24日、編集しました。

プロローグ 僕は勇者だ！ …… 多分。

勇者という職業があります。勇者は特定の役割があるというわけではなく、彼らが成した功績、あるいは一般人では実行できないほどの勇気を示した者に、敬意と賞賛を込めて捧げられた称号のようなものです。

大多数の人々は彼らを称え、親愛の情を向けます。人に大きな利益をもたらす彼らは、必然的に人々に愛されるはずです。

しかし、今から紹介する彼は勇者という肩書きを持ちながら、世界の誰からも認知されず、世界の誰からも愛されず、人々に人類の敵とさえそしられた時があるほどの問題児です。

ですが同時に、彼は世界の誰よりも強大な力を持ち、世界に実在する神に勇者と認められた唯一の人物でした。

これは、そんな勇者の定義に外れかかった青年と、彼らの仲間が織りなすゆる〜い物語です。

~~~~~

とある世界のあるところ、見渡す限り草原しかない風景のただ中に、とある四人の勇者パーティーが歩いておりました。

魔物や魔族と呼ばれる、人間に害をなす存在が跋扈するこの世界で、護衛もなしに町の外へ駆り出すものなどごくわずかです。勇者パーティーと特定できたのは、パーティーのリーダーらしい青年がまさしく『勇者』といった格好をしていたからでした。

年の頃は十代後半でしょう。

髪や目の色は漆黒。短めの乱雑にはねた髪型から、外見の頓着が薄いことが見受けられます。

肌は白っぽい者が多いこの世界ではめずらしく、小麦色をしています。

顔立ち是不細工ではありませんが、取り立てて目立つほどの美形でもありません。あえて言うならば、目立たないことが目立った百人並の容姿といったものです。

背丈は百七十七センチ（センチと同義）程度で、同年代の平均かやや低めといったところ。

そして、彼の装備ですが、何というか、手作り感が満載のものでした。材料はどこにでも手に入る木材や布や金属で、鎧、剣、布袋に至るまで全身が自作の品で固められています。

彼の安っぽい外見は、言うなれば『勇者ごっこ』、『ハリボテ勇者』という二つ名が似合いそうでした。

「あゝ、暇だあ！ 誰だ！ こんな何も無い草原を通ろうなんて言い出したの！」

「いや、他の誰でもなくアンタでしょ」

勇者風の青年へ表面上冷静に指摘したのは、彼と同年くらいの少女でした。

髪は青みがかかった銀色で、腰の辺りまで伸びたロング。瞳は寶石のような翡翠色をしています。

肌の色は深窓の令嬢のように瑞々しい白。屋外にすることが場違いなほど澄んだ、貴族の子のような肌の持ち主です。

容姿は目の覚めるような美人、と称しても過言ではないでしょう。キュッと引き締まった女性らしい肉体、ややつり目で意志の強さが窺える目、高く整った鼻筋、ほんのりと淡いピンク色をした唇。彼女の構成するすべてが芸術品のようで、ただでなくパーツすべてが見事に調和のとれた、まさに麗人と呼ぶに相応しい女性でした。

身長は百六十七センチ程度で、青年よりは頭一つ小さいようです。

身に着けている装備もまた豪華なものでした。金やミスリル銀といった希少金属がふんだんにあしらわれたサークレッドに、清楚さが際立つ素朴なデザインで、純白のドレスじみたローブ。手首には不思議な力の宿ったブレスレットをしていて、身の丈に届くか届かないかというほど長大な杖を持っています。その杖も先端に水晶玉

に近い無色透明の金属の球体がついており、一目で細かな意匠が施された逸品だと分かるものです。

装備品の類から魔法使いに属する職なのは一目瞭然ですが、勇者パーティーの一員というより、貴族や王族の子女をしている方が違和感のない女性でした。

「一応このパーティーのリーダーはアンタだから、私たちはアンタに従っただけよ。あとで愚痴を言い出すと思ったから私たちは出発の時止めてやったのに……、アンタはつくづく腹立つわね！」

徐々に言葉に怒気を込めた彼女。相当ご立腹なのでしょう。元々強気そうな目が更に厳しくなり、眉間には深いシワが刻まれ、手のひらには膨大な量の魔力の塊が現れていました。

「そんな言い訳は聞きたくないぞ、シエラ。僕たち四人は幼なじみで……」

「黙れ、自己中！」

直後、シエラと呼ばれた女性の手に込められた、魔法ならば中級程度の、さらにその中でも上位に入る威力を持つだろう魔力塊を、躊躇無く青年に叩きつけました。

青年は為す術もないまま着弾し、草原一帯に轟音が響き渡ります。「……僕の性格やらは十分把握してるはずだ。だったらみんなには僕を諭す義務がある！ 能力にはそれ相応に見合った責任が伴うもんだ。そうだろ？」

あわや青年の爆死体と対面か、と思われましたが、白煙が晴れた先には、魔力塊をぶつけられる前の立ち姿そのまま、青年は悠々と弁舌を続けました。

普通は彼の両側後方数百メロ（メートルと同義）に伸びた、抉れた草原と同じ末路をたどるはずですが、そこを気にする人間も指摘する人間もここには居ませんでした。

「無傷なのはいつも通りだからいいけど、せめて驚いたりアクションくらいとりなさいよ！ 虚しさが余計にこみ上げて来るじゃない！」

「何それ、理不尽！」

「アンタがその言葉を使うな！」

「カイルもシエラも落ち着け。無益な争いは避けた方がいい。時間と体力の無駄だ」

一触即発、あわや喧嘩に発展か、と思われましたが、彼らのうしろで成り行きを見守っていた二人の内の一人が仲裁に入りました。年は彼らよりも少し上のようで、落ち着いた雰囲気をしている男性でした。

髪の毛は怒れる獅子を彷彿とさせる攻撃的なスタイルで、色も血のように黒く濁った紅色。瞳は黒にも見えるほど濃い紺色をしています。

肌はシエラとは対照的な褐色。筋肉質な肉体と相まって、彼にはとても似合っているように見えます。

あまり動かない表情筋と人を威圧するしかめ面のため、常に不機嫌そうに見えてしまうのは玉に瑕ですが、容姿はとても整っています。大陸中の男の子に人気のある騎士然とした、それも英雄譚に出てくるような男らしさがある彼の容姿は、異性を引きつけ、同性を憧れさせる魅力を有していました。

体軀も百九十七口程度と大柄でした。

そんな彼の身にまとう武具は、一見すると重戦士のように見えます。無骨で分厚い全身鎧は彼の象徴とも言えますが、一方で携帯する武器は異様でした。なんと、腰に差すそれは鍛錬時に使用する類の木剣。それ以外の装備と言えば高級そうな皮袋くらいしかありません。

武器以外は歴戦の騎士長と呼ぶに相応しい外見の彼。おそらく、このパーティーを初めて見れば、誰もが彼こそリーダーだと判断を下すでしょう。

「止めないで、ガディ！ 女には引いちゃいけないときがあるのよ！」

「そうなのか？ 初耳だが？」

「…………わたし…………きく…………はじめて…………。…………ガデイ…………わたし…………おなじ…………」

無駄に熱いセリフを口にするシエラと、声音だけは困惑の色が見える無表情なガデイのやり取りに、突如として妙にたどたどしい口振りの合いの手が入りました。

彼女はパーティーメンバー最後の一人で、年は十代前半に見えます。他の三人と比べ、だいぶ幼く見えます。

フードをかぶっているため見にくくはありますが、フードからはみ出して腰まで伸びた髪は明るめの黄色で、シエラよりもポリウムがありそうです。瞳は原色に近い鮮やかな赤色で、やや覇気が足りないようにくすんで見えます。

肌はシエラ同様白いのですが、所々にある生傷の痕が野性味を帯び、健康的なシエラとは対照的に、彼女の肌は病人に似た白さでした。

容姿はシエラにも負けない整った顔立ちをしています。虚ろな瞳や無気力な空気を醸し出していることから、生物的というより人形のような物質的な美しさに見えます。彼女の魅力が半減、とまではいかないまでも、多少損なわれている様子ではあります。

装備は端が擦り切れた真っ黒なローブと、同じく真っ黒な指輪に腕輪、手には三匹の蛇が巻きついて互いを食べ合っている禍々しいデザインの杖が握られています。それら一つ一つから黒い霧のようなものが湧き出しており、いずれも触れることすら躊躇われるものでした。

魔法使い職ではありそうですが、マトモな魔法使いとは言い難い出で立ちでした。

「そういうものなのよ！ リーウエも覚えておきなさい！ 女だからって、引けない一線を一度でも譲歩すれば負けなのよ！」

「…………そう…………？」

まるで理解していなさそうなリーウエと呼ばれた最年少の少女は、小首を傾げてシエラに疑問符を浮かべます。動作は年相応でかわい



らしいのですが、彼女の足下の影が不自然に蠢く様子はすごく不気味でした。

……おや？ そんな彼らに近づいてくる影がありますね。

『ちよつと待ちな！ そのバカっぽい人間どもよ！』

『人間どもよ！』

『よー！』

草原を刈り取る勢いで現れたのは、何とも大きなトンボの魔物でした。

全長は百五十センチはあるでしょうか。人間の肉眼では視認不可能な速度で飛ばたく四対の羽は金属のような光沢を持っていて、触れれば体ごと切られてしまいそうです。

人間の間では『ソードドラフ』と呼称されている魔物でした。

『キサマら、ここは我らの縄張りを知ってデカイ顔をしているわけではあるまいな？』

『あるまいな？』

『な？』

とても面倒臭いしゃべり方をするトンボたちは力量の強い方から発言しているようでした。上から体の大きさが大、中、小が発言していることから、間違いないでしょう。

とある勇者と魔法使いとは違い、仲がよろしいのはいいことです。「大体、シエラは僕の言うことを聞かなさすぎるんだよ！ 僕は勇者で、リーダーなんだぞ！ 強くて偉いんだぞ！」

「この世界のドコにギャンブルで身を滅ぼしかけてる勇者がいるのよ！ さつさと私たちから借りたお金返しなさいよね！」

「ふん、今は運を貯めているだけで、当てはあるんだよ！ あんなはした金、次の街で一発大穴狙えばすぐに返せるさ！」

「一般的にそれは返済の当てって言わないの！ 今でも信じらんないけど、アンタ勇者なんだから少しはガディを見習って真面目に働きなさいよー！」

「何だとー！」

「何よ！」

……本当に、仲良きことは素晴らしきかな、ですよ？

『っコラ！ 俺たちを無視してんじゃねえぞ！』

『ねえぞ！』

『ぞ！』

おっと危ない。私も一瞬忘れかけてました。

トンボたちは随分お怒りのようですね。特にトンボ大は実力もある分無視は辛かったのかもしれない。

『もう許さん！ キサマら全員血祭りにあげべ？』

『あゲエ？』

『……』

頭に血が上ってしまっていたトンボたちは、自身の懐に素早く潜り込んだ鎧の塊に気づきませんでした。

そして、大と中は発言の途中で、小は声を出すことすらできずに、木剣で真っ二つになりました。どのトンボも、人間で例えるなら正中線で、二分割されており、討伐証明部位と換金部位を兼ねた羽には傷一つありません。

「少し待ってる、リーウエ」

木剣についた血を払い、ガディは言葉少なく羽を丁寧にはぎ取り、皮袋の中へと放り込みます。

「……ガディ……、……ありがとう……。……ふたり……。……よろこぶ

……」

「気にするな」

不思議なやり取りのあと、リーウエの影が伸びてトンボたちの骸を囲むと、一瞬にして三頭分の死骸が消えてなくなりました。足の下から咀嚼音が聞こえてきます。空耳であって欲しい生々しさがあります。キモイです。

「ガール！」

「フシャー！」

最後までトンボたちに気づかなかったカイルとシエラはまだ言い

争いを続けています。これだけ喧嘩してたら仲がよく見えてくるから不思議です。

「いい加減止める。二人とも置いていくぞ」

「ガデイまで！ リーダーは僕だぞ！」

「……わかった。ガデイが言うなら」

「え？ 引いちゃうの？ あれ？ 僕の扱いおかしくない？」

「……いんがおくほ……」

三人は自称リーダーを放置し、歩みを再会しました。

哀れ、カイルは独りぼっちになってしまいました。

「つて、待て〜！ 僕を置いていくな〜！」

これは、彼らの旅路をたどる物語。とぼけた勇者の冒険譚。長くなりますが、どうかお付き合いくださいね？

一話 セラート村 その一 仕事をしたら負けかな、と思っている。マジで。

しばらくはキャラクターの紹介を兼ねて、一人ずつ焦点を絞った話になる予定です。

最初は彼に単独行動をしてもらいましょう。

2011年5月10日、編集しました。

2011年9月24日、編集しました。

一話 セラート村 その一 仕事をしたら負けかな、と思っている。マジで。

はてさて、喧嘩をしながらも草原を歩くこと、約三日が経ちました。

見渡す限り同じ景色の草原帯から脱出できたカイルたちは、眼前にしつらえられた木の柵を眺めておりました。正確には柵が囲む村を、ですけれど。

「やっと着いたな。まったく、食料も尽きかけて死ぬかと思ったぞ」  
発言とは裏腹に疲労感のあまり見られないカイルと、

「私はアンタへの突っ込みで何度も魔力切れを起こして、別の意味で死ぬかと思っただわ……」

対照的に脱力気味なオーラを放つシエラと、

「ふむ、当たり前外れの激しい魔物の肉を食わなくて済むな」

サバイバル精神旺盛なつぶやきをこぼしたガディと、

「……そら……きれ……」

何を考えているかさっぱり分からないリーウエがそれぞれ村に着いた感想をもらしました。

さて、カイルたちがたどり着いた村はセラート村です。

簡潔に村の特徴を説明するならば、

「なんだ、ここ？ 超ド田舎じゃん」

ええ、まあ、そういうことです。しかし、カイルさん？ 村人の真ん前で言うセリフではありませんよ？ 実際にセラートの住人は、カイルを見て明らかに顔をしかめてますから。

「アンタねえ！ 村に着いて早々に問題を起こそうとするな！」  
シエラから正論が飛びます。当然です。

「いや、じゃあド田舎ってことを除けばこの村にどんな特徴があるんだよ？」

「そ、……それは……」

ああ、シエラが言葉に詰まっています。無理ありません。かく

いう私も、カイルと同じことしか思い浮かびませんでしたし。

「と、とにかく！ いきなり人様の土地に喧嘩売るのはやめてよ！ 私たちみんなアンタと同じだと思われるじゃない！」

「ごまかせてないぞ」

「シエラ、遠まわしに肯定していないか？ それも少し失礼では？」  
「……ごほん……まだ……？」

カイル、ガディ、リーウエの順に言葉を返されたじろくシエラ。  
カイルやリーウエはともかく、唯一の常識人たるガディにまで指摘されてしまえば反論などできません。

「こんだけ小さな村なら、カジノとかもないよな」

「ないだろうな。物資の補給で少し滞在したら、次の町に向かった方がいいだろう。幸い、ここ一帯の魔物は質も低く、被害も少なそうな村だ。俺たち勇者一行が居なくても、自警団で何とかなるレベルだろう」

自分の欲望に忠実なカイルのつぶやきを、至極まじめに返すガディ。

ガディの提案に反対意見も出なかったため、カイルたちは宿の確保を行うものと、食料等の調達を行うもの、資金稼ぎを行うものに別れた。順に、シエラとリーウエ、ガディ、カイルが担当するという話になったのですが、

「納得できるか！ この役割分担は作為を感じるぞ！ 僕は断固拒否すると同時に仕事環境の改善を要求する！」

やはりダダをこねたのは勇者でした。

「じゃあアンタは何したいわけ？」

大げさなため息を吐いたあとでシエラは一応カイルの意見を聞きます。短気ではありますが、妙なところで律儀です。

「確保した宿でベッドを温める仕事。いつも通りの小遣い稼ぎがでないから、僕にはこれくらいで丁度いいと思うんだ」

「昼寝してサボりたいだけじゃないの！ それに、アンタがカジノに行っても小遣い稼ぎどころか全額すつてくるだけでしょうが！」

第一カジノがある町だったとしても、今の私たちに自由に使っていいお金なんて、一銭たりともないわよ！　うちのパーティーのお財布事情考えて言いなさいよね！」

「はあ？　誰だ？　そんな旅費を圧迫するほどバカスカ金を浪費するやつは？」

「アンタしかいないでしょうが！」

叫びが村全体をこだまし、沸点を越えたシエラの怒りが魔法となつて現世に具現化しました。

無属性重力系統魔法『コンバージ・グラビティ』。

空間の一点に強力な重力場を発生させ、半径一メートルにいる物体を容赦なく引きずり潰す攻撃系の魔法です。威力を考えると上級魔法に分類されますが、シエラは主にカイルへの突っ込みに使用する魔法です。

「過ぎたことを、あまり、気にすると、早く、老けるぞ？　……シエラ？　息苦しいんだが？」

しかし、カイルは息が少し早くなつたくらいで、さほど苦しそうに見えません。精々嫌がらせ程度の効果しかなさそうです。

「わかつてたけどさ、なんで心臓に重力場を出現させたのにその程度のダメージなのよ……。ダメ。そろそろ私、心折れそう」

「落ち込むな、シエラ。カイルに常識を求める方が非常識だ」

「ひどい言いぐさだな、ガディ？　本当にお前ら僕をなんだと思つてやがるんだ？」

落胆するシエラを慰めつつ、さらりとひどいことを言つてのけるガディ。カイルの扱いはいつでも誰からでも酷なものばかりです。

「もう無理かも。リーウエ、今日から私の代わりにカイルに突っ込んでくれない？」

「……つつこみ……？」

「待て！　シエラ、僕が悪かった！　だから早まらないでくれ！」  
自分より年下の少女に本気で脅える勇者カイル。

無理ありません。リーウエは最上位のえぐさを誇る魔法の使い

手であり、たとえカイルであろうと冗談にできない威力をはらんでいるのですから。

「そ、そうだ！ だったらギルドにはリーウエを行かせりやよくないか。アイツらの腹も膨れて一石二鳥だろ？」

慌てて話題を変えたカイルに、シエラは呆れた声を上げました。

「アンタ、何年リーウエと付き合ってるの？ リーウエに魔物狩りなんて一人でさせたら、こちら辺の生態系がひっくり返るわよ？」

カイルとシエラは焦点の合わない目で虚空を眺めているリーウエへ視線をやります。

「……………」

ほどなく二人の視線に気づいたリーウエは、精気のない瞳を彼らに向け、小首をかしげました。

「……………すまん。さすがに軽率だった」

「分かればいいのよ」

リーウエの危険度はさておいて、カイルたちは口論の末、最初に割り振られた役割で行動することになりました。

最後までごねていたカイルの背中を押したのはリーウエの魔法詠唱でした。カイルにまともに通じるお仕置きを使えるのは、今のところ彼女だけだったりします。

ただ、戦闘行為以外でリーウエに魔法を頼むとき、詠唱途中で止める係を用意しないと、彼女は躊躇なく魔法を行使してしまいます。単なる脅しが再起不能になるほどのお仕置きになっては目も当てられません。

今回はシエラがリーウエに魔法を頼んで、ガデイが詠唱を止めました。

「ちっ、アイツら、僕のことをなんだと思ってるんだ？ 勇者だぞ？ こんなんでも一応勇者なんだぞ？」

自分で『こんなん』と言ってる辺り、カイルも自分のことはよく理解しているようです。

「あ、あ？ なんか言ったか？」



失敬。つい口が滑りまして。

この世界にはギルドという、荒事が主体の仕事幹旋組織が存在します。始めは勇者用ギルドやら傭兵ギルドやらと、種類がいくつもあったようですが、現在はひとまとまりになって『ギルド』に統一されています。

実力が足りないものは危険度の高い仕事を受けられません、それ以外はかなり自由な組織です。仕事の提供はしますが、個人的問題はまったく関知しません。そういうところです。

さて、ここはセラート村のギルドの前です。ブツブツ文句を言いながらも、逃げずにギルドへ足を運んだカイルは早速建物へと入ります。

中は掃除もされていたようですが、荒くれ者たちが集まるギルドは基本的に汚いです。田舎ならなおさら、実力も低くてマナーの悪い連中が多くなりがちです。

そのため、カイルのような年の青年はギルドでよく絡まれます。

「ああ〜？　なんでこんなところにガキがいるんだ？」

「勇ましいのは結構だがな坊や、悪いことは言わん。怪我しないうちに帰った方がいいぜ」

「うるさい。雑魚臭がするセリフを吐くな」

からかい混じりの傭兵たちの野次を、カイルはばっさり切り捨てます。

人間不審なところがあるカイルは人の対応もかなり厳しいです。

仲間内でも呆れられるわがままな性格は、とても勇者には見えません。この世界の勇者の基準はどうなっているのでしょうか？

「なんだと、クソガキ！　テメエ何様のつもりだ！」

「見ての通り、勇者様だ」

案の定、やられ役にありがちな絡み方をした男がカイルになおも突っかかります。カイルはというと、普段前髪で隠している額の紋章をギルド中にさらしました。

鳥が翼を広げた姿を抽象的にした薄緑色の紋様で、魔力を込めれば緑に発光する優れたものです。光ることのどこが優れているのかは誰にも分かりませんけれど。

「はん！ 勇者つつつても、どうせ紋章があるだけのハツタリ野郎だろうが！」

昨今、勇者はあまり珍しい存在ではありません。村より大きい規模の集落に身を寄せる人間ならば、確実に一人は勇者を目撃することが可能です。

数百年前は勇者も世界に一人しかいない稀少な人材でしたが、現在は小規模の村でも一人、大規模な都では二人くらいが常に輩出されています。選抜方式は前代の勇者が死亡すると、出身地の誰かに紋章が浮かび上がって、『勇者』が継承される形になっています。血筋は関係なく完全なランダムです。

そのため、最近は盲目的に勇者を称える者は大分少なくなりました。本当の意味で称えられる『勇者』は、大衆や国に実力が認められた一握りだけです。

特に活躍もしていないカイル率いる勇者パーティーは、英雄譚に憧れた若者たちの初心者パーティーと思われるのも初めてではありません。

装備がおもちゃのようなもので固められたカイルなら、なおさら嘲りは多くなります。

「勇者ごっこは他でやりな！」

「ギルドは遊びじゃねえんだよ！」

「ガキはさつさとお家に帰ってママの乳でも吸ってるんだな！」

罵詈雑言が飛び交いますが、カイルはいつものことと割り切り、前髪をおろすと受付カウンターに向かいました。

「勇者に限定されている依頼はあるか？」

「……少々お待ちください」

懐疑的な視線をカイルに投げかけた受付嬢は、それでも業務に忠実に従い受付の奥に引っ込んでいきます。

ぞんざいな対応もいつも通りのことなのでしょう。カイルは気にした風ありません。

「ったく、こうなるの分かってたからギルドに来る気なかったのに、対応がマシなガデイが行けよ。かといって、僕は買い出しなんて地味なことしないけどな」

……訂正します。少しは気にしているようです。

小さく愚痴をこぼしながら時間を潰していると、受付嬢は一つの紙束を持ってカウンターに戻ってきました。

「こちらが現在勇者に限定された依頼のリストになります」

差し出されたリストを手に取り、カイルはパラパラとページをめくっていきます。五秒も経たずにリストの最後までページをはじき終わったところ、カイルは放り投げるように依頼リストを返却しました。

「十二枚目、右の依頼群、上から九つ目、『ゴブリン殲滅』だ。どうせ僕のナリじゃその程度の依頼しか受けられないんだろ？」

「……へ？ あっ、少々お待ちください！」

一瞬言葉の意味を理解しかねた受付嬢でしたが、すぐに気を取り直して依頼の確認作業に入りました。

カイルが指定した用紙には、確かにセラート村にほど近い森でゴブリンの殲滅を依頼する旨が書かれていました。

「はい、確認できました。ランクは最低位の一つ上、Dランクのゴブリン殲滅ですね。報酬は証明部位の右耳の数で上乘せされますので、できるだけ刈り取ってください」

「はいはい」

カイルはギルド発行の依頼書を受け取ると足早に扉をくぐって行きました。

「ゴブリン殲滅か。どいつがこんなバカな依頼を頼んだか知らないけど、望み通り殲滅してやるよ」

カイルは悪戯小僧っぽい笑みと小さなつぶやきを残して、セラート村をあとにしました。



二話 ゴブリンの森(仮) その一 身の入らない仕事だと、つつい寄り道

タグ増やしました。

説明長めで申し訳ありませんが、作者の暇つぶし感が強い小説ですのでご容赦ください。

タイトルも内容もコロコロ修正します。そこもご考慮のほど、よろしく願います。

2011年9月24日、編集しました。

セラート村を出たカイルは真っ直ぐに指定された森まで向かいました。カイルが通ってきた道に何頭もの魔物の血肉が散乱していますが、気にしては負けです。換金部位だけは根こそぎ回収されましたが、気にしたら負けなのです。

今まで森を連呼してきましたが、名前は特にありません。森は森です。気になるなら、ゴブリンの森とかでいいんじゃないでしょうか？ ゴブリンがいるんですし。

「さて、お仕事お仕事、つてか。……だる」

様々な魔物の血で形容しがたい色をした自作の『勇者の剣<sup>レブリカ</sup>』を握り直し、カイルはとても面倒くさそうにゴブリンの森へ入っていました。

「ふん、一応ダンジョン指定地なんだな」

一步森へ足を踏み入れた瞬間、カイルは肌で感じる違和感に気づきました。大気に重さが加わり、気温が数度下がった感覚は、主に魔物が生息する『ダンジョン』と呼ばれる地に進入した証拠です。

本当に駆け出しの勇者や傭兵ならば、ダンジョンに入った途端に萎縮してしまうものも少なくありません。しかし、カイルにとってダンジョンの空気も人里の空気も違いがないくらい身近なものです。今更驚く変化ではありません。

とはいえ、カイルもダンジョン指定地をうるつくのは久し振りだったため、多少の心情の変化がありました。

「懐かしいな、このピリピリした感じ。ガキの頃シエラやガディと遊びまわったのを思い出す」

まさかの懐古でした。普通の人間であればトラウマの一つや二つ刺激されるはずなのですが、非常識を地でいくカイルに繊細な心の機微を求めてはいけないことなのでしょう。

鼻歌でも歌い出しそうなカイルに、早速魔物がエンカウントして

きました。

『ゲギヤア』

「おお、ポイズンビーじゃん！ なっつかしいなあ！」

ええ、もうお気づきでしょうが、カイルはリアクションを間違えています。

魔物と出会ったときは誰でも臨戦態勢をとり、気を張るのが普通です。決してテンションがハイになるシチュエーションではありません。

ポイズンビーとは全長一メートル前後の蜂の魔物です。比較的世界のどこにでも見かける魔物で、ランクはゴブリンと同じく単体でEクラス、二十体以上の集団ではDクラスになります。森林に巣を作ってエサを求めて飛び回っている働きものです。

『ポイズン』がつくことから分かるように、お尻についている鋭い針には毒があります。効果は弱い神経毒で若干体がしびれる程度なのですが、ポイズンビーは複数で行動することが多いため、さすがに一度に何度も毒をもらうと命を落としかねません。

毒針は抜けたり壊れてしまっても、本体が健在なら無限に再生可能な上、先端には簡単に抜けないように『かえし』もついていますから、油断すると熟練の傭兵でも危険な魔物です。

換金部位は毒針と羽根が一般的で、特殊なものだとポイズンビーの巣やビー蜜があります。

後者二つはビーの幼生が高級珍味、巣が武具の素材として、ビー蜜も高級食材として取り引きされています。

高級である理由はポイズンビーの大群を相手にしなければならなかったためです。

一匹なら大したことはなくとも、巣を相手取るとなると数百規模のポイズンビーと刃を交えねばなりません。

それに、巣に傷を付けてしまえば途端に価値がなくなってしまったため、採取がとつともなく難しいのです。

カイルと出くわしたポイズンビーは歩哨役だったのでしょう。単

独でカイルを威嚇し、仲間が駆けつけてくる気配もありません。

「虫のクセに鳴き声出すのが謎だ、って理由で、ガキの頃コイツら狩りまくって声帯の場所とか探したっけ。結局、体から自然に漏れる魔力を羽音に混ぜて、魔物の鳴き声っぽくしてただけだったんだよな。その結論に至るまでコイツらの巣を何十個襲撃したっけか？もう覚えてないけど、とにかく懐かしい」

ポイズンビーは人語を理解できないはずですが、カイルの言葉に脅えを見せたように大きく震えました。野性の本能がカイルを危険物と判断したようです。気持ちは分かります。

「そういや、コイツらの集める蜜ってなかなか美味かったよな。幼虫も、見た目のグロさに目をつむればかなり美味だったはず。……良い値で売れたしな。小遣い稼ぎには丁度いいし、久しぶりに『狩り』といこうか」

『ピギッツ！』

一族の危機を察したポイズンビーは勇敢にもカイルに特攻をかけました！ 頑張れ、ポイズンビー！

「さて、じゃあ巣まで案内してもらおうか、羽虫」  
しかし、カイルはポイズンビーの蛮勇を無視し、構えも解かれていて、切っ先が地面についていたおもちゃのような剣を、視認不可な剣速で垂直に切り上げました。

辺りに黄色の混じった透明な液体がぶちまけられます。一刀の元に両断されたポイズンビーの骸はカイルの左右に転がり落ち、ピクリともしなくなりしました。

さようなら、ポイズンビー！ アナタの勇気は絶対に忘れません！ そこにいる極悪面よりもよほど勇者でしたよ！

「おい、さつきからお前はどっちの味方だよ！」  
無論、カイルの敵です。

「喧嘩売ってんのか！ 売ってるだろ！ よし、ちょっと表出る！ 徹底的に話し合おうじゃねえか！」

イヤです。それよりさつきと話を進めなさい。物語の尺は決まっ



ているんですよ？

「っち！ 覚えとけよ！」

はいはい、覚えておきますよ（棒読み）。

一悶着ありましたが、虫の勇者を無情にも殺害したカイルは、現在ポイズンビーの大群に囲まれています。

歩哨のポイズンビーを斬り殺したあと、カイルは死骸から漏れる魔力を解析し、生前の記憶を強奪することで巣の位置を特定しました。

情報収集系統は『サーチ』という自身の魔力を用いて周囲の状況を調べる魔法が一般的ですが、カイルの使用した他生物の魔力から情報を掠め盗る魔法、『シンパシー』は現代では失われたはずの魔法、古代魔法です。

現代の魔法は初級、下級、中級、上級と威力別に分類されています。ただ、例外である上級のさらに上、天級という分類になる古代魔法は、そのどれもが強力で絶大な効果を有する代わりに、必要魔力が莫大で魔法自体の構成も複雑怪奇。詠唱を完成させるだけでも最低十分を要する難解な魔法だったりします。

カイルはそれを無詠唱で発動させ、相当量の魔力を消費したはずですが魔力欠乏による疲労が表れている様子もありません。

ここまでくれば突っ込むことすら煩わしくなります。何度も言いますが、気にしたら負けなのです。

「ただの石ころを巣の近くに投げただけなのに、反応が過剰だな。ま、手間が省けて助かるけどさ」

カイルは大げさに肩をすくめ、全方位から五匹同時に襲ってきたポイズンビーたちを自作の剣で屠ります。

巣の真下を見てみると、光線型魔法でもぶっ放したような穴がポツカリと空いていました。

ただの石ころでこんなもん見せられれば、傭兵たちにとってかなり手ごわい部類であるBクラスの魔物も全力で逃げ出すほどですが、

カイルは気づいている様子はありません。

人は当然のこと、魔物の普通からもかけ離れたカイルの感性は、もはや修正不可能な域にあるのでしよう。

魔王と同等以上の驚異を前にして、ポイズンビーの群れはちまちまと戦力を差し向けることを無駄と悟ったのか、カイルを包囲していた全兵が彼に向かって突撃しました。

『ゲギヤアアアアア！』

「うっせえぞ羽虫共！」

防御を捨てたポイズンビーたちの、まさに捨て身の一斉襲撃は、人の形をした化け物と、おもちゃの剣一本の前に完全敗北を喫しました。

カイルがしたことは単純です。ただ、ポイズンビーを一匹一匹丁寧に斬り殺しただけです。

百数十ばかりの大群相手に、一分もかからず全滅させるといってもはや笑うしかない速度でしたが。

「運動速度上昇に反応速度上昇、デイレイまで使ったのに五十秒もかかっちゃまったな。体がなまってやがる。ガデイじゃないけど、たまには訓練でもしようかね？」

『運動速度上昇』と『反応速度上昇』とは、『身体強化』という魔法に似て非なる技術です。

己の魔力を体内で循環、活発化させて身体能力の補助をする技で、魔力の扱いを知るための必要スキルとでも言いましょうか。『運動速度上昇』は全身の筋力や体を支える骨格、神経伝達速度の強化を全体、あるいは一部に施すことを言い、『反応速度上昇』はその名の通り反射神経を極限まで引き上げる『身体強化』です。

魔力を使用することが多い魔法使い職はもちろん、一部の戦士職も使うことができるほど広く知られた技術です。

あくまで補助なのであまり強力な技術ではありません。魔力量が規格外のカイルが使えば一騎当千の『魔法』になりますが。

そして、『デイレイ』は相手の物理的運動を低下させる、無属性

呪縛系中級魔法です。魔法行使に使用した魔力量によって効果には程度の差があり、戦闘中は意外と使い勝手の難しい魔法です。

今回カイルはポイズンビーの針が自分に触れる少し前に一拍の間が生まれるよう、瞬間的に強力なデイレイをかけていました。

長時間使用するよりも効率が良さそうに聞こえますが、実際は膨大な魔力量に物を言わせた力業で、普通の勇者が行おうとしたら五秒で魔力切れをおこすでしょう。

ただ、カイルと同じ状況でポイズンビーの群れ全体にデイレイをかけたとしても、速度低下は微々たるものです。

そうなると結局魔法行使終了後、すぐに蜂の巣となってしまうのがオチなので、カイルのやり方が間違いと判断するのもまた疑問です。

まあ、そんな使い方の難しい魔法を無詠唱で完璧にコントロールして見せたのですから、カイルにはデメリットなどない魔法の一つなのでしょうが。

「うへえ、この辺体液まみれだな。臭いもキツイし、さっさと離れるか」

区域一帯にむせかえる異臭に鼻をつまみつつ、カイルはポイズンビーの換金部位を剥ぎ取り、空間系と時間系の魔法がかかった袋に次々と入れていきます。

討伐よりも時間をかけて素材の回収を終え、カイルは木を覆うようにぶら下がっているポイズンビーの巣も解体します。

巣の中には女王蜂で単体Cランクのポイズンビー・クイーンが残っていました。カイルの手により流れ作業で首をはねて彼の懐を潤す結果となりました。

一時間ほどで作業を終えたカイルはその場から立ち去り、切り株に腰かけて休憩しています。

カイル自身は疲労など微塵も感じていませんが、彼に付き合ってきた勇者の剣は休みなしとはいきません。

荒い作りの剣の血や脂を拭き取り、刃こぼれがひどいため砥石を使って応急処置を施します。

柄は作成時から変わらないものですが、刀身は何代目かも分かりません。

カイルの使い方も問題がありますが、刀身の素材が安物の鉄や銅を使っていることも一因でしょう。

時には使用に耐えられず、戦闘中に折れてしまったこともありま

す。それでもカイルはたった一度他の剣を握ったことを除けば、この剣を生涯振るってきました。

「……ふう。この剣身もそろそろ限界かもな。今は魔力でコーティングして耐久度をごまかすか。次の街で工房でも借りて鍛造するか」

勇者の剣の手入れをしながら、カイルは剣の状態を確かめます。

「ゴブリンの千や二千くらいなら、剣に頼らずとも素手や魔法でどうとでもなるし、そのときはそのときかな」

単位がオカシイ気もしますが、発言者がカイルなので仕方ありません。しつこいくらい言いますが、気にしたら負けだっただら負けなのです。

「何だかんだで寄り道しちまったな。そろそろ本腰入れて害獣駆除に行きますかね」

カイルは一つ大きく伸びをして立ち上がり、軽く体をほぐしてからゴブリンの捜索に移りました。

三話 ゴブリンの森(仮) その二 鬼? 悪魔? いいえ、僕は勇者だよ?

2011年9月24日、編集しました。

三話 ゴブリンの森(仮) その二 鬼? 悪魔? いいえ、僕は勇者だよ?

ゴブリンの森を散策すること二時間が経過しました。半分以上はポイズンビーに構った寄り道だったわけですが、ついにカイルはゴブリンの巣? 集落? を発見しました。

「おおー。うじゃうじゃいるな。繁殖力だけが売りの魔物だし、見えないところにまだまだいそうだ」

三メロほどの高低差がある位置に陣取ったカイルは、洞窟の前にある広場にひしめく緑色の小鬼たちを俯瞰ふかんしています。

ゴブリンは一メロ程度の人型の魔物で、棍棒や石斧、石弓などといった原始的な武器を使用します。

武器を扱い、集団行動をとれるだけの知能はあるものの、感情に支配されやすいので戦闘行動は誘導しやすく、パターン化されています。

ゴブリンの強みはやはり、数に物を言わせた物量攻撃です。

ゴブリン一体を見かけると五十体から百体は近くにいて、と言われるほどの繁殖力があります。

ゴブリンのコミュニケーションは非戦闘要因を含め、最小単位で二百年前後、カイルが発見した集落は視界に映る群集から推測すると、優に千体は越えた規模になるでしょう。

これだけの数になると一人では当然のことながら、四人パーティー十組以上で挑んでも全滅させることなど到底不可能です。

「なんだ、思ってたより少ないな。皆殺し+素材剥ぎ取り完了まで大体二時間弱つてところかな?」

「……不可能なんですけどね。もう今更こんなこと言う必要ないですかね。」

「さあ、て。さっさと終わらせてずらかるか」

まるで盗賊のようなセリフを残し、カイルは十メロほどのちよっとした崖を躊躇なく飛び降りました。

『うぎゃあ!』

「あ、ラッキー」

着地したのは一体のゴブリンの上でした。哀れ、戦闘が始まる前に戦闘不能となったゴブリンは目を回して気絶しています。

『なんだキサマ! ドコから湧いてでた!』

「ゴブリンに『湧いた』とか言われたくねえよ! 人間様なめんな!」

カイルの『人間』という言葉にざわめきが広がり、ゴブリンたちは一気に色めき立ちました。

『ニンゲンだ! ニンゲンが来たぞ!』

『マヌケなやつだ! 一人でワレワレに勝てると思ってるのか!』

『マモノのチカラ、ゼイジャクなニンゲンに思い知らせてやる!』

思い思いに自分と仲間を鼓舞するゴブリンたち。単体戦力は圧倒的に人間に劣る彼らなりの戦意高揚なのでしょう。彼らの未来を考えると、とても涙ぐましい行動です。

「ざわついてるなあ。ま、勝てないって決めつけて、怖じ気づくよりマシだわな」

賞賛ともとれる言葉を漏らし、カイルは腰に差していた勇者の剣<sup>レブリカ</sup>を抜きました。

カイルが臨戦態勢を整えたと同時に、ゴブリンたちも各々殺気を放ち始めました。

さすがに弱くとも魔物の端くれです。戦闘の気配には敏感でした。「ほう? 小鬼共、この僕を相手に殺意を向けるなんて、どんだけ考えなしなんだ?」

明らかな嘲笑をこぼしたカイルは、次の瞬間ゴブリンの群れ全体が放つ殺気を超える、巨大かつ凶悪で濃密な殺意を放出しました。

『ヒイツ!』

『ば、バケモノだ……!』

『ほん、とうに、ニンゲンか?』

闘志をみなぎらせていたはずのゴブリンたちは、カイルの殺気に

あてられて瞬く間に萎縮していきました。

腰を抜かすもの、武器を取りこぼして戦意を喪失させたもの、武器を掲げてはいるものの体中が震えて動けないもの、白目をむき口から泡まで吹いて失神するものまでいます。

前述した通り、ゴブリンは本能と自分の感情に忠実な魔物です。相手を弱者と思いこむと、自身がどれだけ被害を受けようと戦闘行為を止めることはありません。いずれ自分たちの群れが勝利することを信じて疑わないためです。

しかし裏を返せば、一瞬でも自分たちではいくら束になっても勝てないと思ってしまうと、連鎖的に負の感情が群れの全体に伝播し、自ら戦う意志そのものを根こそぎ刈り取ってしまうのです。

今回、ゴブリンたちの感情共有能力は完全に裏目にでてしまいました。

「おいおい、さっきまでの威勢はどうしたよ？ 僕みたいなのか」  
「人間ごとき、さっさと殺してみろよ？」

カイルの言葉一つ一つが死の宣告にしか認識できないゴブリンたちは返事すらろくにできません。

「なんだ、もつと抵抗すると思つてたのに、つまんねえな」

「ア、ガ、ウウ」

「唸ることしかできないのか？ テメエらの無駄にデカい口は飾りかよ？」

カイルの安い挑発にもまともに返答するものはおらず、ゴブリンたちは沈黙を貫くばかり。

ゴブリンたちが完全に無抵抗になったと知ると、カイルは鋭い気配の一切を消し去り、満げな笑みを浮かべました。

「おしおし。死ぬ覚悟はできたなお前ら。最初から素直に従つてりゃいいんだよ、低脳なゴブリン共が」

さわやかな笑みで毒舌を發揮しまくるカイルに数体のゴブリンはポカーンとしていました。先ほど魔王もかくやといった存在感を示したことを鑑みて、無謀な突っ込みは誰もしませんでした。



「さあて、僕はさつさと殺して『セラート村』に帰りたんだ。ちやっちやと終わらせるかね」

カイルはレプリカの剣に魔力を流して強度を上げ、その上から無詠唱で魔法をかけました。魔法により淡く発光する剣を携え、無防備なゴブリンたちに向かって疾走しました。おそらく『身体強化』を施しているでしょう。ゴブリンたちはカイルの姿を見失っていました。

『がああっ！』

『ひぎいっ！』

『ぎゃああああ！』

刹那、カイルが通ったとおぼしき進路上にいた複数のゴブリンたちが、短い断末魔をあげて次々と倒れていきました。外傷は少ないのにピクリとも動かなくなつた同胞を見て、ようやく事態を理解し始めたゴブリンがいました。

『た、助けてくれえ！』

『イヤだ！ 死にたくねえよ！』

『うあゝ ああ！ ママあー！』

仲間がみるみるうちに倒れていくのをきっかけに、ゴブリンの群れは一気に恐慌状態に陥りました。

我先に住処である洞窟へと駆け込みますが、いかんせん数が多すぎたために入り口が詰まってしまう、すぐにゴブリンたちの足は止まってしまいました。

『ナニやってんだ！ さつさと行けよ！』

『しょうがねえだろ！ 動けねえんだから！』

『は、早くしてくれ！ アイツが、アイツがすぐ後ろまで来てるんだよお！』

そこかしこで怒号が響き、押し合いへし合いするゴブリンたちですが、徐々にそれらの声も小さくなっていきます。

既に戦闘要員だったゴブリンの集団の四割は地面に倒れ伏していました。

凄まじい勢いで一体、また一体と膝を折る仲間を見て、理不尽なまでの虐殺を黙ってみていられなかった一体のゴブリンが絶叫しました。

「なんだ！ イツタイ、ワレワレがナニをしたというのだ！ ただモリで静かに暮らしていただけではないか！ 生きているだけでツミなのか！ そうだとしても、キサマらニンゲンが、どうしてワレワレを裁く！ キサマらにどんなケンリがあつてワレワレをジユウリンするのだ！」

「はあ？ 何当たり前なこと訊いてるんだ？ やっぱゴブリンってアホだな」

「なっ！」

胸の内にたぎる感情を吐露した直後、背後からゴブリンの死神たるカイルが軽い調子で言葉を紡ぎました。

慌てて後ろにいるはずのカイルから距離を離れたゴブリンは、周囲の状況を確認して絶句します。

自分以外のゴブリンは一体たりとも立っておらず、意識のあるゴブリンも己だけとなっていることに気づいてしまったからです。

「まさか、あれだけのカズのドウホウを、もう殺し尽くしたというのか……？」

「楽だったよ。どんな雑魚でも抵抗されたらやっぱ手間だからな。安心しろ。テメエもすぐにコイツらの仲間入りさせてやるからさ」改めて対峙したゴブリンとカイル。

まるで虫を潰すような目で自分をみる人間を相手に、ゴブリンは死の恐怖を感じなくなっているようでした。

ゴブリンの許容範囲を越えた刺激は感覚をも麻痺させたのでしよう。

ですが、そのおかげで忘れかけていた同胞の仇に対する復讐心が灯った最後のゴブリンは、足下に転がっていた木製の棍棒を乱暴に掴み取り、奇声を発しながらカイルに襲いかかりました。

それは、本能のみで動くゴブリンが小さくも激しい、本能を抑え

込む理性を得た瞬間でした。

『この、ニンゲンがああああっ!』

「よっと」

しかし、激情に身を任せて突進してくるだけのゴブリンではカイルの相手になるはずもありません。

カイルは身を半歩ずらしてゴブリンの突撃をかわし、すれ違いざまに手にしていた棍棒をたたき落としました。

『グウウウ!』

勢い余って転倒したゴブリンの首に、冷たい感触があてられました。

「残念だったな。テメエらは相手が悪かった。こんだけ数いりゃ、普通の人間程度なら」ひとたまりもないはずだっただろうし」

すでにゴブリンは自身の敗北を悟り、一族を皆殺しにしたカイルに疑問をぶつけました。

『キサマ、ナニモノなのだ?』

ゴブリンも答えを期待した訳でもなかった。ただろう問いは、意外にも返答がありました。

「僕? 僕は勇者さ。ただ、魔王とか魔物とか魔族とか、正直どうでもいいと思ってるけどな」

淡々と受け答えるカイルに苛立ちを覚えたのでしよう。ゴブリンは声を荒げました。

『ならばナゼッ! ナゼワレワレは殺されなければならなかったのだ!』

「お前ら殺せば金になるから」

カイルの無情な回答に、ゴブリンは全身の血が沸騰したような錯覚を覚えています。

ゴブリンにはない概念ですが、お金がどういうものかは知っています。

『ではキサマは! ニンゲンたちにしか力チのないドウグのためにワレワレは死んだと! そういつつもりか!』

「それ以外に何かあるか？」

「フザケルナ！」

「ふざけちゃいけないさ。僕たちは金がないと生きていけない。自分たちの命を繋ぐために、他の動物の命を奪って何が悪い？ それとも何だ？ テメエらゴブリンはいつの間にも平和主義を掲げる魔物になっただんだ？」

ゴブリンは割れそうなほど強く歯噛みし、何も言い返せない悔しさでギリギリと歯ぎしりをたてています。

「テメエらにはテメエらの価値観が、人間には人間の価値観がある。唯一絶対の価値観なんて存在しない。こんな論争は不毛だ。」

ああ、それともう一つ。僕への恐怖を乗り越えた褒美に、良いことを教えてやるう」

ゴブリンは諭すような声に変わったカイルに、うつ伏せの状態のまま鋭い視線を肩越しから送ります。

太陽を背後にたたえ、逆光で表情の見えないカイルを睨みつけ、ゴブリンは一族の仇の最後の声を聞きました。

「弱者が何を吠えても、負け犬の遠吠えにしかならない。己の主義、主張を他者に押しつけたいのなら、弱者から強者になれ。蹂躪されるのが嫌ならば、先に蹂躪し尽くせ。敵に脅えて過ごすのが嫌なら、敵を潰して黙らせる。この世はな、力あるものが絶対の真理なんだよ」

カイルのセリフが終わると、振りかぶっていた剣がゴブリンに突き立てられました。

激痛とともに不自然な意識の混濁を覚えて抗おうとしましたが、ゴブリンは為す術もなく目の前が真っ暗になっていく感覚に身をゆだねました。

「いや〜！ 大漁、大漁！ ゴブリンの耳みたいなのシヨボいものとはいえ、こんだけ獲れたのは久しぶりだな！ 働くのも随分ぶりなんだけど！」

シリアスモードが長かったため、うつて変わって明るい表情のカイルは意気揚々と帰路についていました。

一見手ぶらに見えますが、魔法がかかった布袋にすべての素材が収納されているので、問題はありません。ちなみに、道中に襲撃した魔物の素材も中に入っていたりします。

「しかし、ゴブリンにも女、子供っていたんだな。よくよく考えれば当然かもしれないけど。さすがの僕もちょっと躊躇しちやいそうだったな。

ま！ 全滅させてやったけどね！」

ゴブリン戦闘員を全員排除したあと、カイルは洞窟にも足を伸ばし、非戦闘員のゴブリンたちも狩っていったのでした。

主に老人、女性、子供が中心で、時折怪我をした男性ゴブリンもいましたが、<sup>しゅんじゅん</sup>逡巡も短くバツバツと切り倒していました。

ゴブリンたちよりもよっぽど『鬼』に相応しい姿だったのはいうまでもありません。

「さあ。ある程度の『仕掛け』も済んだ。金も少しは余裕がでる。あとやることは一つだな！」

大きな独り言を残して、カイルは風のようにゴブリンの森を駆け抜けていきました。

変なテンションが続いたせいでしょう。ついに『アイタァ〜！』な思考と言動が目立ち始めたカイルに明日はあるのでしょうか？

「おい、コラ！ 勝手に人を危ないやつにしてんじゃねえよ！ ブン殴るぞ、この野郎！」

あら、失礼。ついつい本音がでてしまいました。

四話 セラート村 その二 お金って大事。そして大好き！（前書き）

貨幣の話が出ますので、あとがきでちよろっと説明の補足を行います。

2011年9月24日、編集しました。

#### 四話 セラート村 その二 お金って大事。そして大好き！

大小不揃いな緑の耳を大量に仕入れたカイルはまっすぐ来た道を引き返し、セラート村まで戻ってきました。

すでに日は傾き、村に夕日が差し込んでいます。村人たちも仕事を終えたのでしよう、屋外にいる人の数はまばらです。

セラート村の簡素な門をくぐったところで、カイルはあることに気づきました。

「……そういえば、アイツらどこに宿取ったんだ？」

セラート村は民家が三十件程度とギルド支部が建つのみで、どこをのぞけど宿屋どころか店屋の看板もありません。

さすがに村に一件も商店がないわけではないでしょうから、昨日今日来たばかりの旅人には大変不親切といえるでしょう。

「ま、ギルドで聞けばいいか。伝言くらい残してるだろ」

問題の先送りをしたカイルは先にギルドへと足を運びました。

「何だ？ やけに中が騒がしいな？」

カイルがギルドの前まで到着すると、扉の向こう側からどんちゃん騒ぎが聞こえてきました。

酒盛りでもしているのでしょうか。野太い声が多重奏となり、下品な笑い声が彼らの浮かれた気分を代弁して、近所迷惑気味に響きま

す。

「あー、まさかとは思うが、アイツらか？」

嫌な予感を覚えつつギルドの扉をくぐると、室内にこもっていた酒の臭いと、音量をさらに増したバカ騒ぎが外に排出されてきました。

耳をつんざく呆れた爆音に思わず顔をしかめ、カイルは嫌々ギルドに足を踏み入れました。

カイルが依頼を受注したときは気づきませんでした。どうやらセラート村のギルドは酒場と一体になった作りになっているようだ。

す。

男たちの迷惑な叫び声は併設された酒場の方から聞こえてきます。カイルは確かめたいような、関わりたくないような、複雑な心境を抱え、ひとまずギルドカウンターに向かいました。

壁か空間に防音処理でもされているのか、カウンター側に向かうとだみ声の波が急速に引いていきました。

「おい、昼間依頼を受注した勇者だが」

「はい？ あ、はい、えと、カイル様、でしたっけ？」

「名乗った覚えはないが、確かに僕はカイルだ」

どうやらシエラがガデイのどちらかが、少なくとも一度はギルドに寄ったことが発覚しました。カイルが名乗らなかつた名前を、受付嬢が知っているのが証拠です。

選択肢にリーウエがいなかったのは、彼女が単独行動させてはいけない類の少女であることを三人は骨の髄まで理解しているので、二人のうち一人が面倒を見ているはずだからです。

「依頼通り、ゴブリンの『殲滅』をしてきた。討伐部位を引き渡すから、キューブを貸してくれ」

「分かりました。少々お待ちください」

受付嬢は一旦カウンターの裏をゴソゴソとあさり、一辺が十センチ程度の立方体を取り出して、カイルに差し出しました。

『キューブ』と呼ばれるそれは魔法を付与させたマジックアイテムです。

何の変哲もない箱に『時間停止』、『圧縮』、『空間拡張』、『収納』、『排出』、『演算』といった魔法刻印を刻み、魔力を通すことで完成するのがキューブです。

魔法刻印は詠唱の文字版で、魔力を通すことさえできれば、魔法使いではなくても魔法の恩恵を受けられる技術です。この魔法刻印が刻まれた物品を総称して『マジックアイテム』と呼ばれています。キューブは主にギルドが製造しているマジックアイテムで、効果は使用前に指定した物質に限り、質量を無視してほぼ無尽蔵に収納



することが可能というものです。

使用用途は採取系の依頼物の納品や、大型の魔物の討伐部位の運搬の他、カイルがしてきたように特定の魔物の討伐部位の集計にも使われます。

どんなものでも小さな箱サイズに収まるためかさばらず、質量も変化しない大変便利なアイテムですが、使用時に収納させる物を特定させなければならぬ上、指定後は指定した物品以外は受け付けませんし、再使用も一旦設定をリセットせねばならないため、汎用性はあまり高くありません。

なので、一般の市場に出ても買い手が少ない珍しいマジックアイテムといえ、製造はギルドがほぼ独占状態です。

ちなみに、カイルやガデイが持つ布袋や皮袋もマジックアイテムです。効果はキューブの制限がなくなり、魔力供給も必要ないもので、とつても便利な代物です。

ただし、魔法刻印を用いた普通のマジックアイテムではなく、高密度の魔法をかけ続けることで、原材料そのものに魔法を定着させたという、とんでもない製法でできたものですが。

それはさておき。

カイルはマジックバッグ（制作者のカイルは名前を付けませんでしたがので、便宜上そう呼ぶことにします）からゴブリンの耳を取り出していき、キューブに次から次へと移し替えていきます。

数分を要してキューブへの移動が終わり、カイルは受付嬢にキューブを返却しました。

「それでは集計作業に移りますので、しばらくお待ちください」

営業スマイルを浮かべた受付嬢はキューブに魔力を送り込み、魔法刻印の『演算』を起動させました。

キューブの性質上、ギルドの係員は皆魔力操作が必須技能です。

世界規模で見ても、魔力操作は難易度が高めの技能で、扱える人間は全体の半数を切りますが、それさえできればギルドへの雇用はほぼ確定しますので就職には困りません。魔法は使えずとも、習って

おいて損はありません。

初めは笑顔でキューブの集計を待っていた受付嬢でしたが、カウントが加算されていくにつれて口角がひきつっていきました。千を越えたあたりから目を丸くしてカウントを見守り、微動だにもしなくなります。

カカカカ、といったカウント音だけが響き、いつになったら終わるのかと、カイルの表情に退屈の色が浮かび始めた頃、ようやく『演算』が終了したようで規則的な音が鳴り止みました。

「やっと終わったか。で？ 結局いくつあったんだ？」

「……………」

「おい？ 人の話聞け！」

「はっ！ すむません！ 安心してまひた！」

よっほど動揺していたのでしよう。受付嬢はセリフを囁んだことに、自分自身気づいていないようでした。

「それで？ 何体分だ？」

「は、はい。合計1872体分ありました。あの、本当に今日一日で狩ったんですか？」

「当然だ。しかし、戦えないゴブリンって結構いたんだな。直接相手したのは七百か八百くらいだったし」

「それでも驚異的な数字ですけど、戦えないゴブリン、ってことは、もしかしてゴブリンの巣を丸々一つ潰してきたんですか？」

「それが『殲滅』だろ？ 依頼に忠実に従ったんだ。文句を言われる筋合いはないな」

開いた口が塞がらない受付嬢に構わず、カイルは報酬の話に軌道をずらしました。さすが、金の亡者です。

「そんなことより、報酬だ。一体いくら上乗せされるんだ？」

「ええつとですね、少々お待ちください。何分、前例のない数ですので、何度か計算し直さないと分かりかねます」

「まだ待つのか……………」

うんざりすると顔で語りかけてくるカイルでしたが、どう考えて

もカイルが文句を言う筋合いなどありません。

「え〜と、え〜と」と焦りながらも計算をしている受付嬢をぼんやり眺めるだけの時間が続き、カイルが三回目のあくびを漏らしたところでしょうか、完了したようでした。

「お待たせしました。まず、ゴブリン殲滅の成功報酬が5リーウです。次に追加報酬がゴブリン一体につき5セノで、1872体分でしたから9リーウ360セノ。合計で14リーウ360セノですね。こちらが報酬になります」

カイルは受付嬢から渡された袋の中身をカウンターにぶちまけ、銀貨と銅貨の数を数えていきました。

明らかに信用のない行動に受付嬢はむっとしましたが、彼女の表情にカイルが気づくはずもなく、ひたすら無心に金勘定を行います。

五回くらい数えなおして満足したらしいカイルは、銀貨と銅貨を袋に戻して顔を上げました。

「確かに、確認した」

「そうですか、ではまたのお越しを」

「いや、まだだ。依頼の途中でついでに狩ってきた魔物の素材も換金したい。またキューブを貸してくれ。とりあえず二つでいい」

「……分かりました」

さっさと帰れオーラを出し始めた受付嬢の気持ちなどどこ吹く風。カイルは再びキューブを受け取ると、今度はポイズンビーの毒針と羽根を移動させていきました。

「ほれ、ポイズンビーの毒針が134本で、羽根が268枚だ。演算は起動させといたから、計算だけ頼む」

「……失礼します」

ついでで狩ったにしては単位がおかしい素材を受け取った受付嬢は、念のため演算の魔法刻印をもう一度立ち上げて確かめます。

魔法刻印の効果や結果の偽造など誰にもできないはずですが、目の前にいるカイルからやれてしまいそうな何かを感じ取ったのでし

よう。

受付嬢が再起動させた『演算』でも同数の結果が出たので、大人しく計算し貨幣袋をカウンターに置きました。

「ポイズンビーの毒針が一本につき5セノで、全部で134本でしたので670セノ、羽根の方は一枚2セノですので268枚で536セノ、合計1リーウ206セノになります。どうぞ、ご満足いただけるまで確認してくださいっ」

「じゃあ遠慮なく」

受付嬢が皮肉をたつぷり込めたセリフもさらっと流し、カイルは先ほどと同様袋の中身を確認しました。

やはり五回数えなおして自分の懐にお金を仕舞うと、「ああ、それと最後に一つ」と前置きをしてからカイルは受付嬢の方を見やりました。彼女の笑顔の裏に浮かぶ青筋に、カイルが気づくことはおそらくないでしょう。

「ここにシエラと名乗る僕と同年くらいの女が、ガデイと名乗るゴツイ男が来たと思うんだが、何か伝言のようなものを聞いていないか？ 同じパーティーだから宿泊場所が知りたいんだが」

「いいえ、伝言などは特にありません。ただ宿泊については、シエラ様が当ギルドの宿泊施設のご利用手続きをなされたので、今頃は併設された酒場にいらっしやるのではないのでしょうか？」

「……………そうか、ありがとう」

あの騒音のただ中にいるシエラたちを探さねばならないと考えたらしいカイルは、もともと高くなかったテンションが下がりにながっていくのを感じました。

カイルは酔っ払いが苦手でした。シエラほどではないにせよ、カイルも気が長い方ではありません。ちょっとでも気を弛ませると、「あ、やべ、殺っちゃった」な展開になることを、自分でよく分かっているからです。

「感情を抑えろ、僕。自我を極力殺し、人を殺っちゃわないように細心の注意を払うんだ」

ブツブツと独り言のように自身に暗示を施しながら、カイルは酒場の方へと足を運んでいきました。

それを見送っていた受付嬢が奇異なモノを見る目であったことなど、自己暗示に必死なカイルはついで気づくことはありませんでした。

四話 セラート村 その二 お金って大事。そして大好き！（後書き）

1セノが1円相当になり、1000セノで1リーウ（1000円）、本編にまだ出てきてませんが、1000リーウで1エーレ（100万円）になります。

今後、お金や百を越える漢字表記で見にくい数はアラビア数字を用い、その他は特に変換する理由がなければ漢数字を用いていきます。

ちなみに、セノは旧貨幣の『銭』から、リーウは『両』から、エーレは『円』から取って勝手に作りました。安直ですね。

五話 セラート村 その三 酒を飲むなら飲まれるな。飲まれる前に飲め！（前

2011年5月10日、編集しました。

2011年9月24日、編集しました。

五話 セラート村 その三 酒を飲むなら飲まれるな。飲まれる前に飲め！

換金を終えたカイルは半時間も自己暗示に集中し、何重もの精神的なプロテクトをかけてからギルド酒場『荒くれ者の囀り』へ入りました。ネーミングセンスが微妙です。

「……うるせえー」

カウンターに施された魔法処理のない酒場はまさにカオスでした。丸テーブルと丸椅子が初めの配置からは大きくずれ、中央に集められているのが分かります。いつ頃から飲み始めたのかは知りませんが、いまだ健在の酒豪たちは寄せたテーブルで騒いでおり、酒に飲まれたものは床に倒れて微動だにしません。顔色が真っ青なものもいて、ぱつと見死人にも見えます。一体どれだけ飲んだのやら、呆れるばかりです。

「……『セレクト・ボイス』」

カイルは酔っ払いたちの大声にかき消されるか細かい声で魔法を發動しました。

瞬間、カイルの耳に入ってくる音がほとんどなくなりました。

『セレクト・ボイス』は一般的な魔法ではなく、カイルオリジナル魔法です。ある条件付けされた情報を取捨選択する魔法で、今回カイルが選別対象にしたのは人の声でした。

この魔法に詠唱は存在しません。開発したカイルが『詠唱破棄』を取得済みであることも一要因ですが、大きな理由は魔法名そのものが詠唱となるからです。『セレクト・〜』というようにして、『セレクト』の部分で魔法効果を、後に続く部分で効果対象を口にすればいい、応用力の高い魔法と言えます。

ちなみに、カイルがこの魔法を作ったのは、今まさにこの状況下で会話しづらかった、という庶民的な理由だったりします。

ひとまず音の暴力から解放されたカイルはシェラ、ガディ、リーウエの姿を探しました。



カイルがしばらく店内を探していると、バーカウンターで一人何かを飲んでいるリーウエの姿を確認しました。

「っな！　なんでリーウエが一人でいるんだよ！」

カイルは心臓が飛び跳ねるほど驚き、自身にかけた『セレクト』をリーウエにも使用してから、慌てて彼女の元へと小走りに駆け寄りました。

「リーウエ！」

「……カイル……？」

自身を呼ぶ声にしばし周囲をキョロキョロしていたリーウエですが、やがて虚ろな瞳がカイルの姿を捉えました。

「……おかえり……」

「ああ、ただいま。それより、シエラとガディは？　一緒じゃなかったのか？」

「……ん……」

カイルの問いに、リーウエは酒盛りで騒ぎまくっている男たちの中心を指差しました。

「……どっちだ？」

カイルは短く簡潔に問います。

「……ガディ……。……こんかい……。シエラ……。まきこまれた……」

「分かった。しばらくガディは禁酒だな。僕がいないときはリーウエが止めてくれ」

「……いえっさ……」

ゆるゆると敬礼したリーウエの頭を撫で、カイルは安酒を注文してからリーウエの隣へ腰掛けました。

「ちなみに、リーウエは何飲んでるんだ？」

「……ミルク……。……セラート……。……とくさん……。……あじ……」

こい……。おいしい……」

「そうか。よかったな。あと、足元のソイツらは大丈夫か？」

「……ごはん……。さつき……。たべた……。……いま……。ふたり……。ねてる……」

「ならよかった。ソイツらは空腹で暴れられたら色々面倒だからな」  
特に後片づけがな〜、と小さく続けたカイルはちょうど目の前に置かれたジョッキの中身をあおりました。

「あとで全員に話したいことがある。これを飲み終わったら店内の人間全部眠らせるから、リーウエは僕が合図したら自分に常態魔法を発動して、シエラを回収してくれ。僕はガディを担ぐ。部屋場所は知らないから、二人を拾ったあとはリーウエが先導してくれ」

「……（こく）……」

天井の木目を数えながらもしつかりと首肯を返したリーウエに微笑を送り、カイルはちびちびと安い酒を飲んでいきます。一足先にミルクを飲み終えていたリーウエは、声には出さずに口の動きだけで詠唱を開始しました。

喧々囂々けんけんごうごうとした様子の中、リーウエの口の動きが止まり、カイルのジョッキが空になりました。

「今だ、リーウエ。発動時間は五秒だ」

そして、カイルを中心にして静かに魔力の波紋が広がっていき、客はもちろん従業員にも魔力が浸透していきます。

『スレプト・ウェーブ』という無属性干渉系統の中級魔法で、ある一定の範囲内の生物に眠りを誘発する魔法です。ただ、即座に眠り状態にする魔法ではなく、眠気を誘う程度の魔法で敵味方関係なく無差別にかけてしまうため、使い勝手は非常に悪いです。

『スレプト・ウェーブ』から逃れるには、現在リーウエが発動している魔法をかけるのが一般的ですが、その魔法の説明は後々しまし  
よう。

きっかり五秒でカイルとリーウエは魔法を止め、立ったまま船をこぐ男たちの集団を一瞥しました。

「この中を進むのか……」

「……がんば……」

リーウエに手伝う気はないようです。

カイルはがつくりと肩を落とし、邪魔な男たちを蹴倒しながらシ

エラとガディの元へ向かいました。

「……カイル……」

「ん？ どうした、リーウエ？」

「……わたしたち……のみもの……おかね……？」

「ああ、リーウエのミルクと僕が頼んだ酒の代金は床で爆睡してた財布から借りたよ。店長も寝かしつけたし、気づくやつなんていないから平気だ」

「……わかった……」

シエラとガディを部屋まで運ぶ際に行われた、青年と少女のちょっとした無銭飲食についての会話でした。

カイルたちは一旦ギルドから出て、外付けされた階段を上り、二階に移動しました。

リーウエがシエラをおんぶで、カイルがガディを肩に担いで、いくつか設けられた部屋の一つにそれぞれ入りました。

「へえ、思ってたよりまともだな」

ギルド提供の宿ということで質は低いだろうと考えていたカイルでしたが、中は中間クラスの宿と同じくらいの清潔さがありました。寝具は部屋の大きさの問題か、ダブルベッドが二つあり、両者の間に仕切り用のカーテンがあります。

物はあまり置いていませんが、四人で使うとなるとやや狭いかと聞いた広さなので、カイル的には十分及第点です。

「……ふたり……？」

「ん？ ああ、とりあえずベッドに寝かせてくれ。強制的に起こす言いながらカイルは右側のベッドにガディを下ろし、リーウエに反対側のベッドを指し示しました。

一度小さく頷いて、リーウエは素直にシエラを寝かせました。

「さて、お仕置きタイムだな。首謀者には威力を上げてやる」

悪戯小僧の笑みを顔に張り付けたカイルは、楽しそうな表情を崩

さず魔法詠唱を開始しました。

「『この者たちに浄化の光を。ヘルウエス』。『この女に束の間の施しを。この男に熾烈な増幅を。アンプリファイ』」

前者が無属性治療系統の下級魔法で、ある程度の状態異常（今回は強制睡眠）を回復、または予防をしてくれる魔法です。さつきりーウエが使った魔法も、これにあたります。そして後者が無属性干涉系統の中級魔法で、術者が指定した効果を上昇させる魔法です。

魔法詠唱は魔法効果に準じた言葉ならどんな文章でも成立します。それに、詠唱時間が長いほど効果時間や強度が高い、魔法イメージ固定の補助、出現位置や細かな設定の付加など、魔法に付属効果をもたらすものもあります。

ちなみに、カイルやシエラが体得している『詠唱破棄』は、詠唱で得られる細かな設定も頭の中で組み上げ、無詠唱で発動できる技能を指します。緻密な魔力操作と、魔法に対する強固なイメージ力があつて始めて会得できる、希少なスキルです。

とはいえ『詠唱破棄』があつても詠唱が不必要になることはありません。さらなる威力の上乗せもできますので、危機的状況や相当な面倒くさがりでない限り、詠唱をしない魔法使いはいないでしょう。

「うう……、ここは？ ……うっ！」

「……む……？ ……ぬぐうっ！」

さて、今回カイルが『アンプリファイ』で増幅させたのはアルコールが人体にもたらす効果でした。

つまり、

「あいたたたたた！ 頭が！ 頭が痛iiiiiiiiiiiiiiii！」

「うぐおおおおお！」

シエラとガディは現在強烈な二日酔いに見舞われているのでした。「これでよし。りーウエは先に体でも拭いてくつろいでくれ。ほれ、布と水」

「……（こく）……」

悶える二人を満足そうに見守ったカイルは、一度カーテンの仕切りの向こうへリーウエを誘いました。そして、マジックバッグからタオルと水桶を取り出し、詠唱なしで桶に魔法で出現させた水を注ぎ、仕切りから出て行きました。

身を清める際、リーウエは男がいようが町中だろうが関係なしに服を脱ぎ始めてしまうので、手慣れたカイルは道具だけ渡してさっさと退散します。旅の仲間はまだ幼い少女とはいえ、女の子に対する最低限の礼儀はわきまえています。

カイルは女性の絶叫と男の悶絶を肴にして、しばらく楽しそうに様子を観察していました。

「うとう、まだ視界が揺れてるような……」

「……これだけキツイ二日酔いなど、生まれて初めてだ」

「あつたり前だ。どれだけ飲んだか知らないけど、僕が魔法でけしかけたんだぞ？」

十分ほど叫び声を響かせたシエラとガディは憔悴しきり、原因を作り出したカイルは満面の笑みで口にしました。カイルの姿は絵に描いたようなサディストでした。

「大方、落ち込んだシエラを励ます、つてのを口実に飲みまくったんだろ？ ガディもガディだが、シエラもいいところで止めてやれよ」

「だって、私も途中から記憶なかったし……」

「……はあ。まあ今回は僕にも多少責任があるから、シエラについてはお咎めなし。ガディは明日から三ヶ月の禁酒な。監視は僕とリーウエがやるから、気を抜いたら死ぬぞ？」

「………心得た。天地神明に誓って、明日から三月は一滴も飲まん」

大げさな物言いは相変わらずのガディですが、表情は何時にもまして真剣そのものでした。

どうでもいいことですが、カイルが二人を説教することに違和感

がすごいです。珍しくリーダーっぽいです。

「それで、本題に移ろうと思う。リーウエも、服は着たな？ まだなら着込んでからこっちに来てくれ」

カイルの呼びかけがあつて、もぞもぞと衣擦れの音がしてからリーウエが仕切りを戻し、シエラやガデイと同じくベッドに腰かけました。

「さて、その前に確認だ。ガデイ。お前は食料調達係だったよな？ どれくらい買えたんだ？」

「普通に食いつないで十日、かなり節約したら二十日は保つ」

「十分だ。シエラ。次に行く町の候補は出したのか？」

「一応、いくつかね。北か南か北東に町があるんだけど、食料のことも考えたら北が無難ね」

「そうか、ありがとう」

ひとしきり二人から確認をしてから、カイルは二度三度と頷いてから唐突に切り出しました。

「僕たちは明朝、朝一番にこの村を出る。反論は却下だ。質問なら受けつける。聞きたいことはあるか？」

随分急な命令に、シエラとガデイは目を丸くするしかありませんでした。

六話 セラート村 その四 教訓、口は災いの元。（前書き）

ちょっと長めになりました。カイル君紹介用ストーリーは終了です。

2011年5月10日、編集しました。

2011年6月13日、編集しました。

2011年9月24日、編集しました。

## 六話 セラート村 その四 教訓、口は災いの元。

翌日の朝、『荒くれ者の囀り』では阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていました。原因は言わずもがな、でしょう。

雁首揃えて二日酔いに苦しむ傭兵たち。頭を抱えて頭痛に耐える者が半分、吐き気をもよおして外で吐いている者がちらほら、症状が比較的軽い者は水を飲みながらぐったりしています。

「うあ、あ、頭痛え。昨日はさすがにやりすぎたか……」

「まったく……。あの兄ちゃんの飲みっぷりに張り合うんじゃないかなっただぜ……」

どうやら飲み比べをして悪酔いしたようです。乗せる方もよっぽどですが、乗せられる方もおバカなものです。

「ん……？ そっぴや、あの兄ちゃんと連れの嬢ちゃんがいねえな？ まさか、もう復活したのか？」

「あんだだけ飲んでか？ 俺たちと同じくらい飲んで、それはねえだろ。大方、他の連れが部屋まで引っ張っていったんじゃないか？」

あと二人、仲間がいるっていつてたろ？」

「そうだったか？」

この二人の会話はうとうと呻く他の傭兵には聞こえていないようです。それに、当の本人たちもすぐに余韻を思い出し、頭を抱えてしまつて、彼らの話題は自然と消滅していきました。

ゾンビのような声を上げるものがようやく半数を切った昼過ぎのことです。

セラート村の住民は畑の管理や狩りに出かけ、ギルドにいた傭兵もちらほらと活動し始めていました。

そんな村の様子を、村に唯一ある物見台から眺める人間が二人いました。

「ふわあゝあ！ 交代制の見張りつて、本当にやることないですよ



ね。いつそ一日休暇とかになりませんか？」

「そうばやくな。備えあれば憂いなし、と言っただろう？　いまだ村の外には魔物たちが徘徊し、住む場所を追われた追い剥ぎのような輩もいる。村の敵は何時やって来るか分からんからな、あまり気を抜きすぎるなよ」

「了解です。……くあゝあ」

「本当だろうか？」

一方はまだ若い青年で、もう一方は幾分貫禄を感じるナイスミドルでした。

セラート村の自警団に所属している彼らは、五日に一度の訓練以外は農作業をしているか狩猟に行くか、もしくは今日のように村周辺の見張りをしています。

数ある仕事の中でも特に暇なことでは有名なのが見張りでした。セラート村のように、襲つても旨みの少ない村は盗賊からも魔物からも興味を引く心配がないため、自警団の間でも実質休暇扱いの仕事でした。

自警団は村の男衆約五十人で構成され、男子であればほぼ無条件に入団します。若い彼は先日入団したばかりの新人で、見張りをあてがわれたのも初めてのようです。

「訓練も一回受けたけど、さすがに俺は戦力にならないですね。練度が違いすぎる」

「なに、しばらくしたら慣れてくる。誰だつてみんな初心者だったんだ。おまえもすぐに俺たちに追いつくさ」

「だといいですけどね。……ん？」

視線は周囲の警戒をしつつも、暇つぶしのため中年男性に話しかけていた青年でしたが、不意に視界の端に何かを捉えました。

「どうした？」

「あそこ、何か動いてませんか？　あつちの森なんですけど」

そうして青年が指さした先に中年も目を向けました。

「確かに、森が動いているように見えるな……。おい、お前は念の

ためギルドに事情を説明して誰か一人連れてこい。魔物の可能性が高いからな、ほぼ門外漢の俺たちより詳しいだろう」

「分かりました」

しばらくして、ギルド職員を一人連れてきた青年は表情が芳しくない中年に声をかけました。

「あの、連れてきましたよ？　どうかしたんですか？」

「そうか、悪いが確認の必要はなくなった」

「は？」

「今確認できた。あの動いているやつは全部ゴブリンだ。狩りのとき何度か見かけたから、間違いない」

中年の厳しい視線の先を残り二人も追うと、森とは若干色彩の違う緑色の何かがうごめいていました。

「ちよっ！　なんですか、あの数！　常識はずれもいいところですよ！」

ゴブリンの群れを確認したギルド職員はたまらず大声を上げました。

「一応村にいた自警団には交戦準備をさせているが、魔物との積極的な実戦など初めてだから常識が分かん。何がマズいんだ？」

ギルド職員に冷静に尋ねる中年に、半ば怒鳴るような返答がなされました。

「さっきも言いましたが、数ですよ！　今より遠い距離から分かるほどのゴブリンの群れなんて、この村の戦力でどうこうできる問題じゃありません！　あつちには少なくとも五百体はいますよ！」

「う、ごひゃくう？」

あまりの戦力差に素っ頓狂な声をあげた青年でしたが、さらに追い打ちをかけるようにギルド職員はまくしたてます。

「それにゴブリンのランクは低めですが、ランクの基準は戦いを生業とする傭兵たちです！　とてもじゃありませんが、あの数のゴブリンを相手にしようと思えば、少なくとも一人一人が十体以上倒せる実力がなければ村は壊滅しますよ！　現在ギルドにいる傭兵にも

声はかけますが、実力はあまり高くないものばかりで逃げ出す輩も多いと考えられます！ ギルド職員としてはこの村を放棄し、近くの町に避難、あるいは救援を求めることをお薦めします！」

一気に話し終えたギルド職員は逃げるようにその場を立ち去りました。

残された青年は顔を真つ青にして、中年は苦虫を噛み潰した表情でゴブリンの大移動を睨みつけています。

「ど、どうするんですか！ このままじゃ、俺たち……」  
「うるたえるな！」

「でも！ 戦つても無駄死にするんなら、いつそ逃げましょうよ！ ギルドの人も、それがいいって！」

「食料を求めての移動なら、わざわざ人里に向かう必要はない。やつらの狙いは俺たち人間だろう。おそろくな。この勢いをみる限り、村を放棄して逃げても追ってくるんじゃないか？ それに、逃げに専念するとしても、女子供を優先させる。やつらの進行を止めるしんがり殿は必要だ。どの道、やつらとは一戦やらかすだろう。運がなかったと割り切つて、お前も覚悟を決めろ」

「じ、じゃあ、近くの町に救援を！」

「無駄だな。ゴブリンの接近が早すぎる。増援を送れる余裕のある町はここから馬車で三日はかかるぞ。待つてられない。」

そもそも、この村を一つ救ったところでメリットが少なすぎる。税金すらギリギリで支払っているような、貧乏かつ小規模の村だ。

セラート村が潰れてしまったところで、国の貴族様方は歯牙にもかけないさ」

「そ、そんなあ……」

「情けない声を出すな。オレだつて怖いさ。」

でもな、空元気で虚勢でもいい。俺たちが生まれた村なんだから、俺たちが守るんだ！ ってくらいの気概を持って。それくらいの気迫でないと、すぐに死ぬぞ」

元々青かった青年の顔は、もはや真つ白になっていました。

中年は見ていて気の毒な青年を強引に引つ張って物見台から降り、戦いの準備をするために走り出しました。

「しかし、何故急にこの村を襲う？ やつらの逆鱗に触れたバカでもいたのか？」

中年の小さな疑問は、誰に聞かれるでもなく風に溶けていきました。

~~~~~

一方、セラート村を奇襲しようとしていたゴブリンの群れは興奮状態でした。

『そろそろ着くみたいだぞ！』

『確か、セラートムラ、とか言っていたな、あのニンゲンは』

『キノウの借り、きっちり返してやるぜ！』

人間にはただの叫び声に聞こえるゴブリンの会話ですが、内容を見る限り意味のある会話は少なそうです。

『ワがドウシたちよ！ ミナ、聞けえっ！』

しばらくざわついていたゴブリンたちでしたが、一体のリーダー格らしいゴブリンが号令をかけると途端に静かになりました。

ゴブリンの群れを率いていたのは、昨日怒りにまかせてカイルに立ち向かった、あのゴブリンでした。

『これからワレらはセンソウを行う！ センジツ襲いかかってきたニンゲンは、ワレらにセンセンフコクをしてきた！ ショウウコに、ワレらのミミはカタホウだけ切り取られている！ オンナもコドモもだ！』

リーダーゴブリンの言うように、よく見ますと彼らは耳が一方しかついておりません。演説を聞いていたゴブリンたちは皆、失われた方の耳を押さえて苦い顔をしています。

『おそらく、ヤツが出てきたらワレらに勝ちメはない！ しかし！ ワレらとてマモノ！ ニンゲンにこれだけコケにされて、カンタ

ンに引き下がるほどハジ知らずではない!』

ゴ布林たちに対する鼓舞はなおも続き、彼らの戦意が徐々に高揚していくのが目に見えて分かります。

『立て! ユウカンなゴ布林のセンシたちよ! マモノすべてのテキ、ニンゲンを滅ぼせ!』

『うおおおおお!』

感情の波が最高潮に達したゴ布林たちは手に武器を掲げ、己や仲間を励ます雄叫びをあげます。

一致団結して自身の敵を見据えた仲間たちを見てから、リーダーゴ布林はセラート村を睨みつけました。

『キサマに言われたとおり、奪われるマエに奪いにきてやったぞ。ワレらのヘイワにチカラがいるなら、示してやるうじやないか』

カイルの言葉を思い出したのでしよう。リーダーゴ布林の瞳に宿った闘志は誰よりも激しく、熱を帯びていました。

『ただで殺されてはやらんぞ。ジャクシャにはジャクシャのイジがあることを、キサマらニンゲンに思い知らせてくれる!』

リーダーゴ布林の人間に対する憎しみが十二分に蓄積された頃、目標の村から武装した人間たちが姿を現しました。

『出てきたぞ! ミナ、オレに続け!』

『うおおおおお!』

リーダーゴ布林の合図の元、ゴ布林の大群は一斉に進軍を開始しました。

~~~~~

セラート村の勇士とゴ布林の大群が争い始めたのと同時刻、カイルたちはセラート村の北側にある町に向かって歩いていました。

しかし、歩いている人物はカイル、シエラ、リーウエの三人しかいません。

「しかし、やっぱりガディのやつはゴネたな。こついうとき、これ

を作ってよかったと思うよ」

「……べんり……」

「………うん。便利って感想はどうなの？ って思うけど、確かに戦闘時に邪魔にはならないわね」

上からカイル、リーウエ、シエラの発言でした。

カイルはどこか誇らしげに、リーウエはいつも通りどうでもよさげに、シエラは複雑な表情をして、視線をパーティー後方へと向けています。

「なんだ、シエラ？ 問題でもあるのか？」

「強いて挙げるなら、ビジュアルが、ね」

カイルたちの視線の先にあったもの。それは、

「いくら何でも、棺桶はどうなのよ？」

死人を埋葬するときに使われる、あの、棺桶でした。

全体的に黒つぽく塗装が施され、蓋には大きな十字架が白で描かれており、縁取りも同じく白く塗られています。縦に長い六角形の上部は胴体の分下部よりも膨らみ、ちょうど顔の位置にはご丁寧に小窓まで設けられています。

現在小窓は全開で、そこからのぞく眠るように横たわる人物は、やはりと言いますか、ガデイでした。

「何か変か？ 人間相手なら一目見て戦闘不能に見えるし、魔物相手でも真っ先に襲撃対象から外されるだろうから、ガデイにデメリツトはないぞ？」

「いや、だから、私が言いたいのは見た目の問題よ。ガデイは気絶してるだけで、再起不能なワケじゃないでしょう？ それに、埋葬は世界共通宗教のシンシア教では人生を終えた人の魂を神の世界へ導く、とても神聖な儀式なのよ？ これって、思いつきり神様を冒瀆してるわよね？」

「僕の賭博運を根こそぎ奪った実益皆無の神様なんて、僕にとってはいないのと同じだ。信仰して欲しかったら金を積むか、戦闘関連で働く以外の幸運や勘をくれるくらいはしてもらわないとな」



あまりにも余裕のないスケジュールを、いきなり知らされたシエラとガディは困惑しているようでした。リーウエはすでに思考を放棄して、彼方を見やりながらポケーツとしています。

「どうした？ 質問はなしか？」

カイルはまるで二人に考える暇を与えないように話を進めようとしています。

「いや、待つてよ。そもそも急すぎない？ この村に長居する予定でもなかったけどさ、明日の朝って……、もしかして、何かあるの？」

「ご明察。簡単に言うと明日の昼頃、ここにゴブリンの集団が襲撃に来る。規模は七百から八百ってところか」

普通の傭兵や勇者パーティーであれば慌てふためいたでしょうが、カイルパーティーは皆涼しい顔をしていました。

「ふむ、確かに滅多に相対することのない規模だが、特に問題は無いのではないか？ 俺たちで何とかできるだろう？」

「いや、ゴブリンを捻りあげるの簡単だが、今回は相手にしない。面倒だし、こんな貧乏な村を助けたところで、金にならないからな」  
損得勘定を前面に押し出した理由に、ガディは分かりやすく顔をしかめました。

「っていうか、ゴブリンの群れが来る前提で話してるけど、本当に襲ってくるの？ アンタ、また何かやらかしたんじゃないでしょうね？」

もつともなシエラの指摘に、カイルは根拠を平然と口にしました。

「僕はギルドでゴブリン殲滅の依頼を受けただけだ。ちゃんと討伐証明部位の耳を切って、ギルドに納めたよ」

「確かに記録上では殲滅したことになりそうだけど、アンタ、ゴブリンの耳だけ取って、あとは何もしなかったの？」

「失礼な。ちゃんと傷口の消毒もしたし、回復速度を上げて傷も塞いでやったぞ」



「魔物相手に治療するな！」

実はあのとき、ゴブリンたちが倒れたのは殺されたからではなく、カイルが剣に施した魔法で一時的に気を失っていたからなのでした。その後、討伐証明部位の耳だけを切り取り、行動に支障が出ないように無属性の治療系統魔法で傷口を綺麗に塞いだのです。

つまり、カイルはゴブリンたちを故意に生かし、わざわざ巢の近くに人間の村があることも宣言して報復を誘発したということになります。シエラの言う通り、ゴブリンの耳さえ持っていけば討伐したと思われるでしょうし、ギルドの記録上では何の問題もなく処理されてしまいます。

「はあ。なんか一気に疲れたわ。……でも、たった一人でゴブリンを殲滅せしめたアンタがいるこの村を、被害者たちは攻撃しようと思つかしら？ ゴブリンの特性を考えたら、一体でも脅えを見せれば群れ全体に広がるはずよね？ そんな不安定な精神状態のまま戦闘をしようとする種族じゃないでしょ？」

「そこら辺は正直分からないけど、多分、来る。戦闘のとき、気絶と麻痺効果のある魔法を剣に付与して、ゴブリンを殺したように見せかけたら、一体だけ威勢がいいのがいた。そいつが群れを率いるならば、襲撃してきてもおかしくない。

でも、結局根拠はほとんど僕の勘だけだね」

「だったら、ほぼ間違いなく来るわね」

カイルの『勘』という言葉に、煮え切らない態度だったシエラはすぐに断定に切り替えました。

「シエラ、こういうときの僕の勘だけは信じるんだな」

「普段のアンタの運気は最低だけど、戦闘が絡むと話は別よ」

事実、戦闘時に働いたカイルの勘は外れたことがなく、どれだけ突飛な内容でも現実になりました。シエラはカイルの勘を未来予知の一種と見なしているようです。

「変なところで信頼してくれてありがとう。喜んでいいか、苦い顔をすればいいか、すごく複雑な気分だ。」

これで納得したか？ じゃあ、」

「待て、カイル。俺は賛成した覚えはない」

話を締めようとしていたカイルでしたが、言葉を遮って反論するものがいました。ガデイです。

「またか。ガデイ、最初に言ったよな？ 反論は受け付けない、つて」

「それでも、俺は納得なんてできない。無力な村人たちを危険な目にあわせるなんて、人として間違っている」

「それは、僕を否定する、ととってもいいのか？」

「こればかりは譲れん。俺は人の役に立つため、平和のために旅をしたいと考え、今もそれは変わらない。助けられるはずの命を、むざむざ見捨てるなど、俺の信条に反する」

「言いたいことは分かった。『フェアアウエント』」

「……うぐっ！」

カイルが魔法を行使した直後、ガデイは見えないハンマーに殴られたかのようにのけぞり、そのままベッドに倒れていきました。

~~~~~

「僕が使う魔法の中でも、気絶の魔法って案外使う頻度多いよな」

「仲間のガデイ相手にね」

カイルの言うように『フェアアウエント』は無属性呪縛系統の中級魔法で、簡単にいえば対象を気絶させる魔法です。ガデイを黙らせるのが目的で、カイルは丸一日行動不能になるように魔力を調整しました。しばらくガデイが起きることはないでしょう。

「でも、本当のところ何でこんな回りくどいことしたの？ 面倒くさがるのアンタがすることにしては手が込んでるけど？」

「半分は僕の勇者としての矜持きんじだな。勇者とは自分の勇気を示すものであると同時に、他者の中にくすぶる己の勇気を触発させるものだと、僕は考えている。相手がたとえ魔物であろうとな。今回ゴブ

リンには『蹂躪される前に蹂躪しろ』って発破かけただけ。勇気を
出さずか出さないかはアイツら次第だろ。

とはいっても僕は勇者に誇りなんて微塵も感じちゃいないけど」
「人間代表の勇者が言うセリフじゃないわね、それ。あともう半分
の理由は？」

「あの程度の規模の村が『殲滅』の依頼を軽々しく出したことが気
に食わない。これが一番の理由かもしれないな。

人間にとっては害にしかならない魔物とはいえ、その土地の生態
系を担う存在に変わりないはずだ。あの森のヒエラルキーの頂点が
ゴブリンかどうかまでは知らないが、ある程度の戦力をもった生物
が一度にいなくなると力関係が激しく変動し、ともすれば外からよ
り強力な魔物を引き寄せやすい。村を滅ぼす可能性の高い魔物とか
な。

そんな将来的な危機予測ができないような集合体なら、いつその
こと解体すればいい、と思ったわけだ。言い聞かせるのも面倒だし、
はつきり言っちゃえば僕は人間の味方じゃないからな。

それと、ついでにギルドの連中が『依頼は危険だ』とかつて馬鹿
にしてきたから、どれだけ危険か身を持って教えてもらおうかと」

「完璧に私情じゃない！ 巻き込まれた村人はもちろん、利用され
たゴブリンまで可哀想になってきたわ……」

大きくため息をつくシエラ。カイルは気にした風もなく地図を片
手に棺桶を引きずり、リーウエは雲の動きを飽きもせずに見守って
います。

どこかの村とは正反対に、カイルたちはのんびりとした時間を過
ごしているのですた。

六話 セラート村 その四 教訓、口は災いの元。（後書き）

前書きと後書きの書き方を変えました。読み直してまた書き方を
変更するかもしれませんが、慣れてくださいね。

七話 商業都市アルエ その一 有名人も楽じゃない。(前書き)

少し遅くなりました。

今回からはシエラさんの紹介ストーリーになります。

2011年6月14日、編集しました。

2011年9月26日、編集しました。

七話 商業都市アルエ その一 有名人も楽じゃない。

「ふむ、そなたが世俗にて噂の『賢者』シエラか。なるほど、噂以上の美しさであるな」

「お褒めにあずかり、恐悦至極にございます、ユーノ・サダラーン男爵様」

「そこまで畏まらなくてもよい。貴族とはいっても、今の私はしがない田舎領主にすぎん。それに報酬を出すとはいえ、私たちがそなたに依頼をする立場なのだ。多少の無礼には目を瞑ろう」

「私のような一介の平民に対しそのお心遣い、痛み入ります」

「教養もなしにそこまで礼を尽くせる平民など、一握りもいるまい。さて、そなたがここにいる、ということは私からの依頼を理解し、了解した上で来た。相違ないな？」

「左様にございます」

「何卒、頼むぞ。ここにいる私たちだけではなく、領民すべての明日をそなたに託すのだ。難しいとは承知している。しかしどうか、私たちを救って欲しい」

「お任せください。必ず、とは断言いたしかねますが、全力は尽くさせていただきます」

片膝について頭を垂れていたシエラはさらに首を床へと折りました。

シエラの応答に破顔する雰囲気を出したユーノを確認して、シエラは誰にも聞こえないような、呼気だけのため息を密かに吐きました。

（まったく、どうしてこんなことになったのかしら？）

口の動きだけで愚痴を漏らし、さらに内心で盛大なため息をもらしたシエラは半ば現実逃避気味に、つい数時間前のことを思い返しました。

~~~~~

セラート村を出発してから八日をかけて、カイルたちは中継都市アルエにたどり着きました。

アルエは商業が発達した町で、昔から周囲に主要都市が複数点在していたため、流通の中継地点として栄えてきました。

主な周辺都市として、東方面に行くくと海に隣接した港町メルイー。さらに北には魔法使いとしても著名な伯爵が治める魔法都市マギリク。南はセラート村を始めとした農村が多く、特筆する町はありませんが、西に進めば前述の町すべてを領地とするミュトス王国の王都、ミュトスが存在しています。

これらの都市間を様々な物資が往来し、馬車の休息地だった場所に自然と商人が集まったのがアルエの町の始まりでした。

そのため、対魔物用の防壁の内側へ一歩足を踏み入れると、魔物との戦闘とはまた違った叫び声がかしこで上がっていました。

街道の至るところで商人たちが出店を開き、客引きの声で合唱を成しています。活気しかない街の雰囲気は、訪れたものをすべからく元気にする空気を醸し出していました。

「アルエって言ったか？ よく言えば元気な、悪く言えば騒がしい町だな。鼓膜が破れそうだ」

「いきなり町の粗探しするの止めなさいよ。辛気くさい町よりはマシでしょう？」

「強固な防護壁のお陰だろう。道行く人は皆笑顔だ。それに、賑やかなのは日々が充実している証拠でもある。いい町だ」

「……『セレクト・ボイス』……」

好意的な印象を持ったのはシエラとガディでした。あまりいい印象が持てなかつたらしいカイルとリーウエは顔をしかめていて、リーウエに至ってはあまりの喧噪にカイル直伝の魔法まで使っていました。

賑やかな道路を見るともなしに歩いていたカイル一行。やがて町

のほぼ中央に位置する広場に到着しました。

「よし、じゃあこの辺で役割を振ろうか。セラートでは僕に拒否権がなかったから、ここは僕の指示に従ってもらおうぞ」

何故か得意満面な顔で三人を見返すカイルに、シエラは苦笑、ガデイは無表情、リーウエは露店の商品を遠巻きに窺うことで応えましました。

「よっし、じゃあ宿屋は僕が確保してくる。ガデイとリーウエは折角の商業都市なんだから不要な物を売却して、店の雰囲気や値段とかなを見てきてくれ。町を出るとき買い出しする店の調査だから、そのつもりでな」

「了解した」

「……うん……」

「シエラは余ってる魔物の部位を換金して、そのままギルドで依頼を探してこい。問題があればこれに魔力を込める。僕たち全員に現在位置と簡単な意思を送れるマジックアイテムだ。シエラは何かと巻き込まれやすい体質だから、くれぐれも、絶対に一人で判断するなよ？」

「はいはい、分かってるわよ」

そうして、カイルは一つの金属片をシエラに投げてよこしました。金属片には『念話・略』、『探索・受』の魔法刻印が刻まれ、これもカイル自作の品だったりします。

過保護気味なカイルの注意事項に苦笑をより強めたシエラ。長い付き合いだというのに心配されるのに慣れていないようで、どこかくすぐったそうにしています。

「じゃ、私はギルドに行くってくるから。またあとでね」

照れ隠しなのでしょう。簡潔に別れを告げると、さっさと三人から離れていきました。

「まったく、カイルのやつ、私はもう子どもじゃないっての」

若干頬を赤くして早足に歩くシエラは、いつもよりも雰囲気柔らかくして、人の波に埋もれていきました。



数人の町人に道を聞いて、シエラは数十分かけてアルエのギルドへ到着しました。

「ふう、やっと着いた。さすが商業都市。町の入り組み様が半端ないわ」

建物が雑多に建ち並び、舗装された道は曲がりくねってまるで迷路の様相をしていました。アルエに初めて訪れたシエラが迷子になっても仕方のないことです。

「それにしても、アルエギルドは綺麗なところね。セラートとは雲泥の差だわ」

シエラが指す『綺麗』は何もギルド内のことにとどまらず、中にいた傭兵たちも含まれています。

セラート村では薄汚れた山賊風味な輩が大半を占めていましたが、アルエではまっとうな戦士や職業魔法使いであることが一目で分かる人物ばかりです。

傭兵というより、国家に属する騎士団や魔法師団の集会所のようでした。余所者同士が寄り集まって発展した町であるため、当初の自衛の軍隊も寄せ集めであった可能性が高く、あながち間違った解釈ではないのかもしれませんが。

ギルドの様子を横目で観察しつつ、シエラは勇者用の受付まで行きました。

「失礼。私は勇者パーティーのメンバーなんですけど、依頼のリストを見せてもらってもいいかしら？」

「はい。では、勇者パーティーの証を提示してください」

受付の二十代くらいの女性に促され、シエラは一度頭のサークレッドを外し、額を露わにしました。

そこに、カイルと同じく鳥が翼を広げたような紋章が浮かんでいきます。ただ、カイルのものとは違い、紋章の色が雪のように白で、魔力を通して光ることはありません。

勇者パーティーの証はこの通り、勇者から与えられた紋章の有無

で判断されます。この紋章は持ち主の勇者しか彫ることはできず、パーティーから離脱するときも勇者自身の魔力でしか紋章を消すことはできません。

カイルは額の紋章と勇者パーティーのシステムを「呪いのようだ」と嫌っています。ですが、シエラはカイルの紋章をデザイン的に非常に気に入っているため、勇者パーティーのシステムには肯定的だったりします。

「……はい。確認しました。装備を戻していただいて結構ですよ。しばらくお待ちください」

受付の女性は一礼してからカウンター奥へと向かい、本棚から一つに纏められた紙束をいくつか抜き取って、シエラの前に戻ってきました。

「こちらが現在アル工周辺の町で募集しています、勇者及びそのパーティーを対象にした依頼のリストになります。ギルド内に限りませんが、リストは持ち出しても構いませんので、どうぞこゆっくりご覧ください」

「ありがとうございます。それじゃあ、しばらく借りていくわね。少ししたら返しに来るから」

シエラは差し出された依頼リストを両手に抱え、談話室のように整然と並んだ椅子の一つに腰かけました。

アルエギルドは併設施設がない代わりに建物が広く作られ、勇者や傭兵のパーティー用に設置された椅子や机が設置されています。シエラ以外にも、数組の傭兵パーティーが依頼リストを囲んで議論する姿が見られます。

都市部のギルドの様子を面白そうに見渡してから、シエラは勇者パーティー用に用意されたリストを捲りました。

「ええつと、ディグドラゴンの討伐に、ビモーグレイの討伐、オークの集落を襲撃、レプティルバードの卵の入手……。相変わらず、物騒な依頼ばかりね」

勇者に舞い込む依頼は魔物討伐系のものが大多数を締めています。

しかも、残り少ない討伐系以外の依頼も強力な魔物の体の一部の納品だったり、魔境と呼ばれるような僻地に自生する薬草の採取など、生きて帰ってこれるか疑問なものばかりです。

当然、傭兵にくる依頼にも似たような内容のものはありますが、勇者用の依頼と同質の依頼は上位のベテランクラスにならないと紹介してもらえません。

ですから、成り立ての勇者パーティーは勇者用の依頼ではなく、駆け出しの傭兵が受ける依頼をこなしていくことが大半です。セラート村でカイルがあまりいい顔をされなかったのは、己の実力も知らないバカな勇者だと勘違いされていたからでした。

ちなみに、ディグドラゴンは地中で主に活動するドラゴンの一種で、ビモーグレイは海に潜む巨大ウツボ、オークは巨体のゴブリン亜種、レプタイルバードは竜種にも見えるは虫類じみた見た目の鳥の魔物です。

「うちの勇者やガディならいざ知らず、依頼完了まで何日もかかるようなものはパスね。私、あんまり体力ないし」

シエラだけでなく、魔法を主な戦闘手段にしている人間はほとんどが学者気質で、男女問わず線の細いものが大多数です。

それは魔法が最近になって学問として体系化された側面があり、さらに魔法の開発や改良はデスクワークになってしまいがちであることも要因の一つです。

要するに、引きこもり体質が多いのです。

もちろん、他者との交流が盛んな『僧侶』や、契約のためにあらゆる土地へ駆けずり回る『精霊魔法師』などの例外的な魔法使い職も存在しますけど。

シエラは純粋な『属性魔法使い』です。実は本格的なサバイバル経験のある『僧侶』のリーウエとは違って、インドア派の典型的な生活を送ってきたこともあり、パーティー内では一番体力がありません。

「私が依頼を受けるなら、なるべく近場で討伐系の方が無難ね。戦

聞くらしいしか取り柄ないからな、私」

自分ができる魔法の範囲を思い返し、少し自嘲気味になりかけたシエラでしたが、切り替えも早かったため、すぐに依頼の確認作業に戻っていきました。

しばらくページを捲る音が聞こえるだけでしたが、徐々にシエラの周りで人が集まりだしてきました。

「あの、お一人ですか？ よければ俺……、私たちとパーティーを組んでくれませんか？」

「ちよつと、邪魔！ ねえねえ、その貴女！ 私たちとパーティーを組みましようよ。男ばかりのパーティーより、居心地はいいって、絶対！」

「フリーの魔法使いは貴重だからって、抜け駆けは許さんぞ！」  
主にシエラの勧誘に、ですけど。

ギルドに依頼を受けに来るとき、大半のパーティーは全員とは言わなくても数人で行動し、どこかのパーティーに所属していることを示していることが多いので、ずっと一人でいたシエラをフリーの魔法使い職だと勘違いしているようでした。

「あ、あの……」

「あつ、コイツらウルサくてゴメンね？ で、何？」

「今さら非常に申し上げにくいのですが、私、実は……」

「シエラさん？ シエラさんですよね！」

すでに勇者のパーティーに属していることを伝えようとした矢先、シエラのセリフに被さるようにして声を上げた、受付の女性とは違う十代のギルド職員がいました。

「特徴的な白いローブに、少しブルーが混ざった銀髪、それに王冠のような豪華なサークレッドと、翡翠色の瞳！ かの有名な『賢者』のシエラさんですよね？」

シエラは『賢者』というセリフに一瞬だけ顔をしかめましたが、女性に悪意がないことを察して即座に微笑を浮かべました。

「ええ、確かに私はシエラですけど、そのような大層な二つ名を名乗ってはいませんか？」

「うわーっ！ やっぱり本物なんだ！　すごい！　感激です！　握手してください！」

テンシヨンの高い職員の女性に若干押されながらも、シエラは一応握手をしてあげました。表情は完全に困り切ったそれでしたが。

「シエラって、まさか隣国のツイダを救ったって言われてる、生きた伝説の？」

「たった一人で数千の魔物を屠った魔法使い、よね？　その功績を称えられて、民衆が呼び始めた二つ名が『賢者』……。確かにまだ十代の女の子とは聞いていたけど、本当だったの？」

傭兵たちはあまりのビッグネームに全員が驚愕しているようでした。

シエラは苦笑をしながら、世間に広まっているであろう、傭兵たちが話す自分の噂話を聞いていました。

内容自体に誇張はありません。シエラはかつてミュトスの隣にあるツイダと言う国の町を一つ、成り行きではありますが救ったのは事実です。そのときの魔物の数も、少なくとも四千から五千はいました。

しかし、民衆が呼び始めたとされる称号に関しては少し差異がありました。特に、その名に込めた意味合いに。

「あつ、でもさっき先輩が対応してたの見てたんですけど、シエラさんって、どこかの勇者パーティーの一員だったんですか？」

冷静さが戻ってきたギルド職員が、さっきシエラが言いそびれたことを期せずして代弁してくれました。

これ以上話が脱線したら面倒だと判断したシエラは、ここぞとばかりに頷きました。

「ええ。あまり知られていないようだけど、私はそのときからパーティーを組んでいたの。もうすぐ三年になるかしら」

だめ押しとばかりに、シエラは額の紋章を周囲の傭兵たちに見せ

つけました。

これでフリーという誤解は解けたでしょう。傭兵たちは皆、落胆したように肩を落としていることから明らかです。

「そうだったんですね。シエラさんに仲間がいるなんて、何だか意外かも」

「そうかしら？」

「そうですね。シエラさんってどこから見ても、すごくできる女ですよ、って感じですよ。孤高の魔女！ って感じでカッコいいです。同じ女でも私とは大違いで、尊敬しちゃいます！」

「……あはは。それは、ちよつと言い過ぎじゃない？」

「いいんですっ！ 私の勝手なイメージですからっ！」

変な娘に捕まったな、と思っただけで、いやひきつった表情で笑っただけのシエラ。

「そ、それじゃあ、また今度来るわ。しばらくアルエに滞在するから、ギルドにお世話になるでしょうし」

「あれ？ 依頼は受けないんですか？」

「どんな依頼があるかを見てくれるだけで無理して受けなくてもいいって言われてるし、またパーティーのみんなと相談するわ。なんだから疲れたしね」

「傭兵さんたちですね。では今度お一人で問題がありましたら、私の方からフォローしますね」

「ありがとうございます」

まさか、アナタも疲れた要因の一人です、とは言えず、シエラは無難な返答をするに留めました。

それから女性職員と二、三度話をして、シエラもひとまずカイルたちと合流しようと椅子から立ち上がりました。

「ま、待ってください！ シエラ殿！ 貴女は『賢者』シエラ殿ですよね！」

しかし、またしても第三者によってシエラは行動を制止せざるを得ませんでした。

いい加減うんざりしながら、とりあえずシエラは誰に呼ばれたのかを確認しました。

「はいはい、そうですね、今度は何ですか？」

最早ぞんざいな答え方になってしまっているシエラですが、彼女を呼び止めた身なりのいい男性は気にもとめずに、いきなり頭を下げてきました。

「お願いします！ 私たちの町を、貴女様の力で救ってください！」

「……………はあ？」

切羽詰まった男性の懇願する姿を見て、シエラは素っ頓狂な返事しか返せませんでした。

八話 商業都市アルエ その二 売り言葉に買い言葉 (前書き)

2011年9月26日、編集しました。



## 八話 商業都市アルエ その二 売り言葉に買い言葉。

これは面倒事の臭いがする。そう直感したシエラはカイルから借り受けた金属片に微量の魔力を込め、簡単なメッセージを送り出した。

『メンドウ ハッセイ シュウゴウ オネガイ』

金属片の魔法刻印の一つ『念話・略』はあらかじめ登録しておいた魔力波長を持つ人物に、術者の思念を送って意思を他者に伝える効果を持つ魔法刻印です。略、とつくことからわかるように長い文章を送ることはできませんが、単語単語で大まかな情報を伝えることができます。

緊急時にパーティーへ連絡するのに多くの情報はいりませんから、魔力の温存と実用性、スピードに特化した魔法と言えます。

そして同時に『探索・受』が発動しました。

『探索・受』は少し変わった魔法で、固有の魔力パターンを読みとって相手を捜す『探索』の魔法を変化させたものです。具体的には、自分を探し出して欲しい個人か複数の相手に自身の魔力を送り、逆に自分の現在位置を把握してもらう魔法になります。

今回は魔法刻印で魔力を送信する対象（カイル、ガディ、リーウエ）が決まっていました。しかし、本来は自分の周りに巨大な魔力の膜を作り上げ、膜の範囲内に入った人間を選別して居場所を伝える、とても燃費の悪い魔法です。普通の魔法使い職なら、魔力の無駄と切つて捨てるような失敗作です。

ですが、普通じゃないカイルパーティーでは魔法刻印にアレンジや改良を加えたことにより、主に迷子防止や、不意の事故ではぐれてしまったときの集合手段として活躍します。

比較的有名人のシエラが単独行動をするときや、リーウエがパーティーから離れて徘徊はいかいしだしたときに使われる魔法です。

カイルたちに送られた魔力は魔法の使用者の大雑把な現在位置、

術者が魔法行使の前後数秒間に得た五感の転写等といった、付帯情報も含んでいます。

元々リーウエの単独行動を可能な範囲で避けるため、カイルによって考案された魔法で、開発された魔法刻印はやたらと性能がよかったです。

余談ですけど、無駄なところに技術を費やす癖のあるカイルですが、リーウエが絡むと冗談を抑えて、割と必死に魔法やマジックアイテムを作ります。まるで猛獣のような扱いですが、あながち間違っただけはなかったりします。

こつそりと金属片に魔力を込めたシエラは、とりあえずカイル、ガディ、リーウエのいずれかが来るまで、強引に話を進められないように時間稼ぎをすることにしました。

「……とりあえず、事情を聞かないことには何とも言えません。どういった用件で、私が必要なのですか？」

シエラは『探索・受』を起動させたまま、カイルたちに話をリアルタイムで伝えながら男性に訊ねました。

「は、はい。すみません。私としたことが、不躰でした」

何度か深呼吸を重ねて、ギルツと名乗った身なりのいい男性は口を開きました。

「私はミュトス王国領の一つ、シールという町から来た者です。シエラ殿は国外から来られたでしょうから、初めて聞く名の町ではないでしょうか？」

「そうですね。ミュトス国内に入ってから、まだ二ヶ月程度しか経っていませんので、地理には疎くて」

「簡単に説明いたしますと、シールはミュトスの中でも有名な農業都市です。位置的にはここ、アルエの西の方角にあります。ここから王都までの距離を含めると、大体馬車で十日ほどの距離です」

ちなみに、アルエから王都ミュトスまでは馬車で二日の距離ですので、それなりに遠い地にあるようです。

「しかし、現在ある魔物の襲撃を受け、農耕ができない土地になっ

てしまっているのです」

「なるほど。それで？ その魔物とは？」

「ポズアワームといい、討伐ランクはB。一年のほとんどを地中で活動し、土の中にある栄養分や野菜などを主食とする農家の天敵です。それに、やつらは呼吸をするのと同じ感覚で、無意識に微量の毒を分泌するため、長らく放置させておくと土地がすべてやつらの毒に犯されてしまうのです」

聞いたことのない魔物であったため、シエラはギルドにポズアワームの資料を貸してくれるように頼み、ざっと目を通しました。

ポズアワームは全長三メロから五メロの魔物で、見た目は巨大なミミズです。色はピンクと紺の斑模様で非常にグロテスクな外観をしています。

「ワーム種、ということとは火や熱に弱いですよ？ 魔法で炙り出すことはできないんですか？」

「実はシールに來たポズアワームは一体ではなく、現在数十体はいるようでした。今までも数組の傭兵に駆除を依頼しましたが、全滅させることは叶いませんでした。」

それに、シールの町はミュトス国内でも領地が特に広い町でして、やつらを地上に追い出すだけでも大変な労力を費やすことになってしまいます。そのあとでやつらを駆除もするととなると、どれだけの兵力が必要なのか、もう見当もつかないのです」

「なるほど。魔物の大群を一人で皆殺しにしたという風評のあるシエラなら、経済的負担もかなり抑えられて厄介払いも容易だ、ってことか」

ギルツの説明に茶々を入れてきたのは、いつの間にかギルドの出入り口に立っていたカイルでした。

「あら、アンタが一番乗り？ 他の二人は？」

「今来るよ。『サモンズ・ガデイ』、『サモンズ・リーウエ』」

個人を指定した無属性空間系統の召喚魔法を使い、カイルは残りの二人を呼び出しました。

カイルに招集を受けたガディは何故かリーウエを背負っていました。

「よう。ところで、ガディ。リーウエはどうかしたのか？」

「二件目の店で突然昼寝をし始めてな。今まで背負って移動していた」

ガディが背中にいるリーウエを示すと、あどけない表情ですやすやと眠っていました。まだ起きる気配はありません。

「そうか。リーウエはもともと頭脳労働に向いてないし、そのままでも問題ないだろ。ガディが面倒を見ておいてくれ」

「分かってる」

「あの、シエラ殿？ こちらの方々は？」

いきなり現れて物知り顔をしている男二人を不審に思ったのか、ギルツがシエラに疑問を投げかけました。

「彼らは私のパーティーメンバーです。差し障りなければ、お話を一緒にさせてもよろしいですか？」

「そうでしたか。構いませんよ。お二方も、どうぞこちらへ」

ギルツに促されて同席したカイル。ガディはリーウエを背中にやっていることもあって、テーブルの近くに立ったままです。

「魔法で大体の話は分かっている。依頼内容はポズアワームとかいう虫の駆除と、汚染された可能性のある土地の浄化、ってところか？」

「はい。その通りです」

「土地の浄化ねえ。私は魔物退治は得意なんだけど、そういう系の魔法はちょっと……」

渋るというより申しわけなさそうな表情でうなだれるシエラ。

「いえいえ、ポズアワームを排除していただけるだけでも十分ですよ。むしろ、そちらの方が骨の折れる作業になるでしょうし。やつらを倒してくださるだけで、私たちは満足します」

「つまり、シエラは殺虫剤でしかないわけだ。土地の荒廃もどうにかできないと思われてるなんて、低く見られたものだな、シエラ？」

「はあ？ アンタ何様よ！」

突如喧嘩腰に話を振り始めたカイルに、シエラはギルツの前で猫をかぶることも忘れて詰め寄りました。

「シエラも知ってるだろう？ 僕は勇者様だよ」

「んなこと聞いちゃいないわよ！ それよりも、さっきの言い草は何？ 私が無能って言いたいわけ？」

「勘違いするな。遠回しにそう解釈できる発言をしたのは、そつちの依頼主だ。僕がシエラを戦闘バカだなんて思ってないし、口にするはずがないだろう？」

「それはもう口にしてるのと変わらないわよ！」

分かったわ！ 害虫駆除と土地の回復、両方やってやろうじゃない！ 私の有能さを見せてやるんだから！」

こうして、シエラはカイルの挑発？ に乗ってしまい、シールの町に行くことを決意したのでした。

九話 農業都市シール その一 後悔と思惑 (前書き)

2011年5月10日、編集しました。

2011年9月26日、編集しました。

## 九話 農業都市シール その一 後悔と思惑

「ガキか、私は？ あの程度の悪口に敏感に反応するなんて。ちょっと前の私はどうかしてたわ……」

簡単な経緯を振り返り、シエラは椅子に座った状態でうなだれながら、己の迂闊さを責めていました。カイルの人を小馬鹿にした言い方に腹が立ったのは事実ですが、もつと慎重に考えてもよかつたのではないか、と思えるくらいには冷静になれたための発言です。

シールの領主であるユーノ男爵への謁見を終え、シエラは今彼の屋敷の一室にいました。

窓から見える景色は闇色。無属性空間系統で有名な転移の魔法を使つてシールまで来たとはいえ、アルエを出たのが夕方近い時刻だったもあり、町についてすぐに暗くなつてしまつたのです。

本当は転移直後に安宿でも取る予定のシエラでしたが、ギルツから直接の依頼人である領主に会つて欲しいと頼まれ、内心渋々屋敷へ赴いたのでした。

「それにしても、貴族か……。あんまりいい思い出ないなあ。基本的に自分勝手だし、今も宿の提供なんて名目より、軟禁つて言われた方がしっくりくるくらいだし。ギルツさんも、せめて宿を取つてからでも、つていう私の意見なんて無視してごり押しだもん。やつぱり、貴族つてやつはどこも感じ悪いのばかりね」

屋敷に向かう途中も、すぐに、早く、さつさと、とギルツに急かされまくつたシエラの顔は当然厳しいものでした。

カイルたちの中では常識的な人間に見えますが、実際のところシエラもかなりの自由人だつたりします。他人に行動を束縛されたり、一方的に命令されるのを殊更嫌う傾向がありました。

また、過去の苦い経験も合わさつて、シエラは貴族に多大な偏見と悪感情を抱いていました。

ただし、シエラは自身が他人から貴族と同列に見られていること

は気づいていません。誰でも自分については盲目になりがちなんですね。

「……はあ。こんな無駄に豪華で肩の凝る部屋をあてがわれるより、野宿の方がゆっくりにできる気がするわ」

最早癖となりつつあるため息を吐き、シエラは貸し与えられた部屋を見渡しました。

大衆食堂か、それ以上の広さを誇る室内は素人目に見ても分かるような美術品で溢れ、家具一つ取ってもかなりのお金がかかっているようでした。シエラが腰かけている椅子も、華美な装飾がふんだんに施されています。

そして、この部屋で一番目立つのは天蓋付きのベッドでした。見るからにフカフカしている質のいい寝具は育ちのいい人間には快適なのでしょうが、見た目が貴族っぽいだけの平民・シエラは違う感想を持ちました。

「こんなので寝たら、人として墮落しそうよね。それに、あのベッドで寝たら永遠の眠りにつきそうで、ちょっと怖いし。宿屋の堅いベッドか恋しいなあ」

装備にお金はかけても、金銭感覚も生活感覚も思いっきり一般庶民のシエラ。高級品は使うものではなく、遠くから眺めるものという認識の彼女には気後れしても仕方ありません。

加えてシエラにとって快適すぎる就寝環境は、奇しくもカイルが作ったガデイ専用リヤカー（仮称、死者の棺）を連想してしまうようです。シエラは、眠ったら死ぬかもしれない、なんて雪山で遭難したような思いを抱き、別の意味でも使用には消極的でした。

「寝袋あったかな？ 私朝弱いから、時々出立のときとかにガデイの荷物になってたりしちゃうのよね」

どうやら床で寝ることにしたシエラは、到底寝袋など入りそうにない布袋を漁り始めました。言わずもがなですが、シエラの布袋もカイルが作ったマジックバッグです。

「これじゃないし、これでもないし……、ん？ これって……」



肘まで袋に手を突っ込んでかき回していたシエラの手には、私物の中では馴染みの薄い感触がありました。

「何たる？ ……って、これ、カイルのやつが行く前に投げてよこしたお守りじゃない」

取り出してみたところ、それは記憶に新しい、ギルドに行く前に渡されたものとはまた別の金属片でした。

彫られている魔法刻印は『念話』でも『探索』でもありません。シエラも見たことのない魔法刻印であるため、カイルが思いつきで作ったオリジナル魔法を彫ったのだと、シエラは考えました。

「そういえば、カイルって私が長期間パーティーから抜けるときだけ、お守りとかいって意味不明な魔法刻印を彫ったマジックアイテムを渡してくるけど、何か意味があるのかしら？」

カイルに具体的な効果を聞いてもはぐらかされてしまい、シエラはお守りに施されている魔法刻印がどんな効果なのか知りません。

しかし、正体不明なマジックアイテムを持ち歩くことに不安は一切ありませんでした。

「ま、アイツが作ったものは変わり種ばかりだけど、私たちに害がないようにはできてるでしょう。ちょうどチェーンもついてるし、いつものように身に付けておいてやりますか」

人格的な信頼がまったくないカイルですが、能力的な信頼は絶大です。普通のマジックアイテムは暴発や、効果の分からないものならなおさら魔法の効果に対する懸念も多いのですが、シエラにそのような心配をしている様子は皆無です。

最優先される信頼の方向がずれているように見えますが、カイルパーティーはとても固い絆で結ばれているのです。

「欲を言えば、カイルにはもうちょっとデザインの勉強もして欲しいなあ。装飾なしが奇抜なデザインのどちらかなんて、妥協で前者を選ぶしかないじゃない」

シエラはその手にあるネックレスのような金属片を見つめて、眉尻を少し上げました。何せ見た目は金属のプレートにチェーンを取

り付けただけの、なんとも無骨なアクセサリーなのです。

旅をするようになって、普通の女の子が格好を気にするような感覚は薄れてきつつありますが、シエラだってまだ十代の女の子なのです。お洒落だってしたいときもありますし、カワイイものも大好きです。

現在体を支えている椅子ほどではないにせよ、シエラが何かしらの装飾を望むのも当然なのかもしれません。

文句も漏らしつつ、シエラは金属片を首にかけて、再び寝袋探しに没頭しました。断固として床で寝る意志を曲げないようです。

外見からは余りに似つかわしくないその姿は、屋敷の人間が目撃すれば目を丸くしていたでしょう。

幸いにも数分後に寝袋は発掘され、この夜はホクホク顔でシエラは就寝しました。使用者のいない豪華なベッドがどこか哀愁を漂わせていた気がするの、勘違いではないのかもしれませんが。

~~~~~

場所は変わりました、ここはユーノ男爵の私室です。

もしシエラがこの場にいたら、無駄遣いが過ぎると怒り出しそうな部屋に、主のユーノと彼の補佐を務めるギルツが対面していました。

「彼女がああ噂の『賢者』シエラ、か。にわかには信じがたいが、お前が選別した人間ならばそれなりの実力者なのだろう」

ユーノはシエラの前で見せていた謙虚さなど、微塵も感じさせない尊大な態度でギルツに語りかけました。

まさに、平民層が作り上げる貴族のイメージそのままの人物でした。

「ありがとうございます。ただ、今回のあの娘は『それなり』では片付けられない実力を持っているようです。何せ、アル工から私とともに転移の魔法を使って、平然としているほどの魔力量を保持し

ています。期待外れになることはまずないでしょう」

誇らしげに答えるギルツは、嬉しさと興奮を抑えきれないように、声から高揚感が伝わってきます。そこには純粋な興奮とはまた別の色も窺えました。

「ほう？ お前がそこまで断言するとはまた珍しい。私はあまり魔法に馴染みがないから知らぬが、そこまですごいことなのか？」

普段ギルツは感情をあまり表に出さない人間なのでしよう。シエラにさらなる興味が湧いたユーノは質問を重ねました。

「アルエからシールまでの距離ですと、己一人を転移させるだけで少なくとも王国魔法師団の一個小隊分の魔力が必要となります。魔法自体はマジックアイテムを使って転移を実現させたようで、おそらく魔法刻印に魔力消費を抑える仕掛けが施されているのでしよう。しかし、魔法刻印の補助効果は微々たるもの。それに、見知らぬ地であるシールへ転移する際私の記憶からシールの位置を割り出し、座標を固定していたようです。それだけでも、彼女の実力と裏の噂の証明にも繋がるのではないかと」

饒舌に語るギルツの様子から意味を悟ったユーノは、安堵の笑みから欲の笑みに容貌を変えました。

「そうか。くくくつ。災い転じて福となす、とはよく言ったものだ。ポズアームに居座られた期間は苦汁をなめる日々だったが、私たちにも運が巡ってきたらしい。」

ギルツ。あの娘をこの屋敷に何としても留めよ。多少不自然でも構わん。たとえあの娘が忌まわしき虫共を排除できなくともあの美貌だ。利用価値は十分ある。分かっているな？」

「男爵様の仰せのままに」

恭しく頭を垂れたギルツと、濁った瞳を爛々と輝かせるユーノ。

主の楽しそうな表情を見届けたギルツはユーノの私室をあとにしました。

「おい、そこのお前」

「はっ、何でございましょう、ギルツ様？」

自らの執務室を目指して広い屋敷を歩いていたギルツは、すれ違
いざまにサダラーン家に仕える私兵を呼び止めました。

貴族が私兵を持つことはさほど珍しくありません。護衛であつた
り、家の防犯管理であつたり、有事の戦力であつたりと、実に幅広
い活躍をします。

ただ、忠誠心が高い国家所屬の騎士団と違い、貴族所有の私兵団
は税金の払いが悪い農民や、金で雇った傭兵で構成されることが多
く、サダラーン家の私兵団も似たようなものです。

ギルツが呼び止めた兵士も、今まで訓練くらいしか戦いの場のな
い、屋敷の管理が主な仕事の農民の青年でした。どちらかという
と兵士というより、執事に近い青年でした。

「お前は確か、字が読めたはずだな？」

「一通りは分かりますが、それが何か？」

青年の返答後、ギルツはどこからか一枚の紙を取り出し、青年に
渡しました。

「ここに書いてあるものを明日までに買ってこい。買える店もこれ
に記してある。金はこれを使え。余った分は返さなくてもいい」

「分かりまし、……た？」

メモとお金を受け取った青年は、手渡された金額を見て思わず疑
問符が口から出ていました。

「ギ、ギルツ様？ 1エーレ金貨なんて、一体何を？」

お使いで渡されたお金が金貨なのですから、青年の問いも正当な
ものです。サダラーン家の使用人がよく買い揃える家具でも一つで
100リーウが最大で、エーレともなると使用人にポンと出される
金額ではありません。

「余計な詮索はするな。それと、その金貨には私が魔法を込めてい
て、私の指定した使い道以外で使用した場合、発動する仕掛けにな
っている。くれぐれも持ち逃げしようとしなさいことだ。命が惜しく
なければな。分かったな？」

「ひっ！ し、承知しました！」

金貨を恐る恐るしまった青年は逃げるようにその場をあとにし、ギルツは青年をあざ笑うように鼻を鳴らしました。

「バカめ。魔法は万能だが限度がある。金貨は魔力を通しやすいとはいえ、使用期間の指定や効果の維持などしていたら、魔力がいくらあっても足りんわ」

それらを平然とやってのけているカイルたちの存在など知るはずもなく、人間の中では極めて優秀な部類の魔法使いでもあるギルツは再度足を運び出しました。

彼らの密談は彼らしか知るものはいません。

彼らの思惑に巻き込まれたシエラは、彼らの動きなど知る由もなくすでに熟睡しているのです。

九話 農業都市シール その一 後悔と思惑。(後書き)

以前書いていませんでしたが、セノが銅貨、リーウが銀貨、エーレが金貨になります。

さらに補足しますと、小銅貨が1セノ、中銅貨が10セノ、大銅貨が100セノとなり、銀貨も同じように三種類で1、10、100リーウを示します。金貨だけは例外で一種類のみです。桁が桁ですし、原材料も希少なので。

十話 農業都市シール その二（前書き）

本文の修正をしていたら遅れました。少しだけ漢字表記を訂正したくらいですので、内容は全く変わりませんのでご心配なく。

2011年5月30日、誤字訂正しました。

2011年6月13日、編集しました。

十話 農業都市シール その二

翌日、町民がすでに活動を開始している時間にシエラは目覚めました。

「……はにえ？ ……うみゆ？ ……？ ……によわ？ ……」

もしかしたらまだ寝ているのかもれません。

寝袋の中でミノムシ状態のまま、奇声を上げながら部屋を転がり回ること数十分。ようやく意識が覚醒しだしたシエラは、もそもそと寝袋から這い出しました。

「……………ん？ わたし、いつのまにかおかねもち？」

……やっぱり、まだ寝てるのかもれません。

パーティーメンバー以外に見られたら非常にマズい状態から、やっつとの思いで抜け出せたシエラは、無駄に豪華で胃がもたれそうな量の朝食を程ほど食し、シールの町を歩いていました。観光も少しありますが、ギルツの話を受けたシエラは、ポズアワームとは町中での戦闘になることが必至と判断したので、地理の把握と町の被害が少なくなる作戦を立案するための散策でした。

「なるほど、自慢げに言うだけはあるわね。この町、相当広いわ」
シエラは目の前に敷かれた広大な農地を眺めて、感嘆の息を漏らしました。

転移で移動した直後はシエラも気づきませんでした。シールは領土の半分以上が開墾された田畑で占められていました。ただし、いつ頃からポズアワームが居着いたのか定かではありませんが、現在育てている作物はほとんどないようです。

「これだけだっ広い土地なら、多少なら大規模魔法を使っても大丈夫そうね。一体ずつ相手にするのは面倒だし、ちよつと助かるわ」
ツイダの例がありますように、シエラが得意とするのは一対多の集団を相手にする殲滅戦でした。

魔法の特徴として、単体にしか効果が発揮できない狭い範囲の魔法は消費魔力が少ない代わりに、対象をその都度設定し直したり、魔法出現位置の空間座標を細かく設定しなければ対象に当てられなかったりと、かなり事細かに魔法の条件を定めねばなりません。これらの演算が大きな隙を生みやすく、魔法使い職の戦死要因の大半を占めています。

一般の魔法使いが用いる魔法は単体を対象にするものがほとんどです。そして、戦闘中のような冷静さを欠きやすい状況で、魔法命中率が八割を越えれば魔法使いとして一人前と認められます。

対して、中級から上級魔法に多い、一度に大勢を相手にする大規模魔法は、絶大な威力と広大な効果範囲が特徴です。

反面、それだけの力を顕現させるために必要な魔力量もまた莫大で、こちらは魔法に使う魔力をチャージするのに時間がかかり、あまり実用には向かない魔法です。

しかし、総魔力量が通常よりも桁外れに大きく、体内に巡る大量の魔力を瞬間的に捻出し、凝縮することに長けたシエラにとって、扱いやすい魔法は後者となります。

利点としましては第一に、範囲の広い大規模魔法は細かな座標設定をする必要がなく、発動する位置に多少のズレが生じても避けられることが少ないことが挙げられます。

第二に、一度に大量の魔物を敵にする場合、魔法を小分けして複数回行使するよりも、一度の大規模魔法を行使する方が魔力の運用効率が高いのです。

例えば、百体のゴブリンを相手にするとします。

ゴブリン一体を倒すのに必要な単体攻撃系魔法の魔力消費を二としますと、全滅させるのに必要な魔力量は二百です。

そこで、同様のケースにおいて大規模魔法を用いてゴブリンを全滅させようとしてみると、多くても百五十くらいの魔力消費で済むのです。

かなり乱暴な例えではありますが、相手が群れの場合は無駄な魔

力消費を抑えるために、各個撃破よりまとめて殲滅した方が節約になるのです。

もちろん、魔法の資質や才能が尋常でないシエラでこそその荒技ですが。

「さて、問題はどうかやってポズアワームを地中から追い出すかだけど、……単純に熱で攻めますか。討伐後は土属性と風属性の魔法で土中の毒素と熱を排出、拡散させればほとんど問題ないでしょう」
王都に次ぐ広大な土地を前にして、本来は時間的にも魔力的にも途方もない計画をさらっと口にするシエラは、自身立案の作戦に満足そうな笑みを浮かべました。

「ポズアワームの討伐証明部位は皮膚の一部で、換金部位は臓器の一つの毒袋だったっけ？ ワーム系の魔物は気持ち悪いのが多いから、あまり触りたくないなあ。仕事だからやるけど」

ポズアワームの後処理を想像して微妙な顔つきになったシエラは、閑散とした町をテクテクと歩きます。

「町みんな、仕事が滞ってるからか、外に出てる人は少ないわね。それに、たまに見かける人も覇気がないかピリピリしてるかのどちらかだし、正直こっちまで気分がブルーになりそう」

ポズアワームの被害は経済的なものもそうですが、精神的な被害も相当影響しているようです。

農民は作物を育てる以外の技術を教わる機会などありませんから、必然的に農業ができなければ休職状態になってしまいます。

セラート村では総住人数が少なく、小動物の多い森が近いこともあって狩猟にも出かけていました。規模が小さな村ではフットワークの軽さから代替案が可能ですけど、シールのように農業で発展した大都市では住人の役割が決まってしまうため、柔軟性が乏しいのです。

仕事ができない精神的負荷はかなり蓄積されているようで、内に溜まるイライラは行き場を失って漏れ出しつつあるようです。

「お昼ご飯は町のお店で食べようと思ってたんだけど、そもそも開

いているのかしら？」

ユーノから昼食も誘われていたシエラですが、すでに丁寧に断りを申し出ています。貴族の食事よりも大衆料理の方を好むシエラの味覚はどこまでも庶民のソレです。

土地勘などないのでひたすら町をさまよっていると、広場のようになつた場所にいる小さな影をいくつか発見しました。

「こんにちは」

「……ひああ！」

シエラは普通に歩み寄り、小さな背中に声をかけたのですが、何故だかとてもビックリされてしまいました。

「あら、ごめんなさい。驚かせてしまいました。」

「き、き、急に話しかけないですよ！ビックリするじゃ……、えと、あなた、誰ですか？」

数人の中で一番いい反応を示した十歳くらいの女の子が振り返り、シエラに文句を言おうとしましたが、自分の知らない人物だと察してシエラを警戒し始めました。

「うーん、旅人かな？一応だけど」

「ウソだあ！お姉ちゃんの服はすごく綺麗だし、肌も真っ白じゃない！そんなの貴族の人くらいしか、……？お姉ちゃん、もしかして貴族の人？」

「あはは、違うよ。私は魔法使いなの。ほら、杖もちゃんと持っているし」

「でも、そういう貴族の人もたくさん見るよ？」

「確かに、貴族の人は魔力が多くて魔法を使える人がたくさんいるけど、私は平民出身の魔法使いだよ」

魔法を使える人間は限定されています。傭兵や勇者も含めると、全体の二割から三割程度が魔法使い、他は皆武器を扱う戦士系の職業です。

その中でも、魔法使いの大半は長らく続く魔法使いの血筋や、過去に政略結婚で魔法使いの血を取り入れた貴族が占めています。現

在では魔法使いの血統も貴族として名を上げたものばかりなので、実質魔法使いの職業に就くものは貴族と勘違いされることも多いのです。

しかし、シエラのようになんの変哲もない平民出の魔法使いも、数は少ないですが存在します。実力は平均よりも低くなりますが、才能が乏しくとも相応の努力をすれば魔法を行使することは可能なのです。

「ほんとう？　じゃあ、お姉ちゃんは私たちの町を助けてくれるの？」

十歳ほどの少女が察せるくらい、シールの町は空気が悪化していたのでしよう。少女の背後でシエラを見つめるさらに幼い子どもたちも、瞳に希望と不安の色を浮かべていました。

「うん。まあね。私はこの町を救うために呼ばれた、すごい魔法使いなんだから！」

不安で揺れる子どもたちを見て、今回の仕事の重要性を再確認したシエラは、彼女たちを勇気づけるためにわざとおどけた調子で胸を張りました。

「ほんとうに？」

「本当だよ」

「でも、今まで来た人たちもそう言ってたけど、みんなダメだったよ？」

「私はその人たちよりもずっと、ずっと強いから大丈夫だよ」

「……信じていい？」

「お姉ちゃんに任せなさい！」

半信半疑ではありましたが、少しは信用したのでしよう。子どもたちの雰囲気がちよっとだけ柔らかくなった気がしました。

「それでね、みんなに一つお願いがあるんだけど、いいかな？」

シエラが子どもたちを見渡すと、皆首を傾げてシエラを見つめてきました。全員同じ仕草でなんと微笑ましい様子をしばし堪能したシエラは、とびつきりの笑顔で子どもたちに訊きました。

「この町でおいしい料理屋さんってあるかな？　実は私、おなか減っちゃったんだ」

複数の呆然とした目に見つめられ、シエラはお腹に手を添えて困ったように微笑を浮かべました。

数分間の子ども会議の結果、シエラが案内されたのはリアクシヨンがいい女の子の家でした。

子どもたちの言によると、ポズアワームの被害が出始めたのは約一年前からで、数ヶ月前から商店も飲食店も無期限休業中らしく、皆食料の節制を強制されて、食事はかなり質素なものとなっていました。地元の食料自給率がかなり低下してしまい、最寄りの町から援助を受けている状況で贅沢などできません。

その割には、シエラがユーノ邸で出された食事の質は一般の貴族のものと変わりありませんでした。民のためと口にしながら、己の生活をかえりみようともしない様子に、シエラはユーノの心象を大幅に下げました。

自分たちの明日を憂う状況下で、旅人にまで回せる食事などあるはずがありません。

シエラも町の現状を聞いて肩を落とし、シール周辺にいる野生の動物（魔物を含む）でも狩って飢えをしのごうと考えました。

魔物の肉は味や触感の質が時の運なのが玉に瑕ですが、時折自分の好みにぴったりとハマるものも存在するため、一度味をしめるとなかなか止められなかったりします。単純に、保存食がなくなつたときのタンパク源として重宝されるのが主な理由ですけど。

ですが、シエラに気を使ったらしい女の子が断ろうとするシエラを無理矢理引っ張って自分の家に招待したのでした。

「ごめんね、リラちゃん。みんな大変なのに」

「ううん、大丈夫だよ！　だってお姉ちゃんが私たちを助けてくれるのに、私たちがお姉ちゃんを助けられないのはおかしいもん。『まつだいのほじ』ってやつだよ！」

子どもが使うには似つかわしくないセリフに苦笑を漏らし、親の説得に先に家へと入っていった女の子、リラを見送りました。

リラの家はシールに数軒ある宿屋でした。リラが年の割に大人びていたり、年齢に不相応な言葉を知っているのも、仕事の手伝いで傭兵を相手にしていくうちに、自然と培われたのでしょうか。

外から見る限り、リラの宿屋の質は平均のやや上らしく、それに歴史を感じる建物でした。上等すぎず、粗末でないどこにもあるような宿を好むシエラはとても好感を持ってました。

興味深げに宿屋『渡り鳥の羽休め亭』をあちこち眺めていたシエラでしたが、不意に開いた扉から覗くリラの笑顔を確認して交渉が成立したことを知りました。

「大丈夫だった？」

「うん、汚いところで悪いけど、一杯くつろいでってね！」

リラの豊富な語彙力に将来が少し不安になってきたシエラ。十歳でこれなら、数年後はどんな言葉を仕入れてしまうのか、とても心配でした。

子どもの頃からあまり口汚い物言いは覚えて欲しくないと、シエラはある実例を思い返しながらリラの案内に従いました。

「いらっしやいませ。こちらには食事をしたいとのことですが？」

「はい。一応遠慮したんですけど、リラちゃんがどうしても、って」

「お父さん、『ふぎり』はダメなんだよ！」

不義理なんて誰が吹き込んだのでしょうか？

「リ、リラ……」

「あの、リラちゃんって誰から言葉を覚えるんですか？」

「おそらく、お客から吸収したのではないかと」

「やっぱり……」

「やっぱり、とは？」

「私の幼なじみも実家が宿屋で、リラちゃんと同じように言葉が達者でしたから。ちよっと心配です」

「心配？ またどうして？」

「その幼なじみ、今私と旅をしているんですが、性格がねじ曲がってしまつて……」

「ぜ、善処します」

自分がどんな顔をしていたか確認する術のないシエラでしたが、リラの父親がかなり引きつった苦笑をしていたことから、あまりいい表情ではなかったようです。

「お姉ちゃんもお父さんも、お喋りばかりじゃ時間がもつたいな
いよ！ お父さんは厨房に戻つてご飯の準備して！ お姉ちゃんは
こつちだよ！」

他に客もいないため、リラはシエラの手を引きながらテーブルへと誘いました。

しばらくリラと旅の話で盛り上がっていたシエラは、主人が運んできた料理を前にして、目を見開きました。

「あの、こんなによくしてもらつてもいいんですか？」

配膳された料理は野菜がふんだんに盛り込まれたスープに、果物のソースがかかった鳥のステーキ、さらには自家製のパンがいくつかがカゴに入つて、隣にはバターまで用意されていました。

宿屋の食事としては平凡なメニューなのですが、町全体に広がる食糧難のことを考えると、とんでもなく豪華な食事と言えました。

「確かに、現状を考えれば利益なんて度外視のメニューなんですけどね。リラがうるさいんですよ。『いついかなるときでも、一定した安心のサービスを提供しないと、商売人の名が廃るんだよ！』つて。そこまで豪語されれば、私だつて手は抜けませんよ」

「もしかして、リラちゃんの言つてた交渉つて……」

「提供する食事について、そりやもう延々と。別にお客さんを入れ
たくなかつたワケじゃないんです」

そこそこの時間がかつたのはリラの持つ商売人の美学だつたと判明し、シエラは大人顔負けな見識のリラを感じすると同時に、ますますとある勇者とだぶつて見えてきて不安も募らせるのでした。

「はあ、リラちゃんのところまで宿泊したかったな……」

本気でうなだれるシエラは、すでに沈みきって夜の帳が降りた星空を仰いで黄昏ていました。

遅めの昼食は味も素朴でびっくりするほど美味、というわけではありませんでした。注文すればどこでも食べられる、一般人の普通の食事でした。

しかし、シールの住人の努力を足蹴にするような豪勢で堅苦しい先ほどの夕食よりも、それこそシエラには何倍も美味しく感じられました。

『渡り鳥の羽休め亭』の食事には、家族とともにするような温かさがありました。ずいぶんと打ち解けたリラや主人とお喋りしながら、作り物じゃない笑いを自然と浮かべられる、安らぎを感じられた時間でした。

時間が経つのを忘れていたため、ユーノの私兵がシエラを探しに来るまで長居していました。思わずこの宿に泊まりたいと口にしたシエラでしたが、私兵からユーノの厳命だと伝えられれば諦めるしかありません。

「本当に貴族って自分勝手なやつばかり！ そんなに心配しなくても、直前になって食い逃げなんてしないっての！」

シエラの行動を露骨に縛ろうとするユーノに、作り笑顔の裏ではかなり辟易していました。

「リラちゃんとお別れは寂しいけど、サダラーン男爵の軟禁に近い扱いにはもううんざり！ 明日の朝には仕事をちやつちやと終わらせて、リラちゃんのとこに挨拶してからアルエにすぐ帰ってやる！」

心底貴族が嫌いなシエラは、屋敷の誰が聞いていてもおかしくない声量で、部屋の開けた窓から叫びました。

入り口の脇にいた人の気配に気づくことなく、シエラは寝袋を取り出してふて寝気味に就寝しました。

「まずいな、計画を前倒しにするか……」

シエラの魂の叫びを聞いたギルツは小さくつぶやき、シエラの部

屋から離れていきました。

十話 農業都市シール その二（後書き）

シエラさんのかわいらしさや個性がうまく伝わればいい、そんな回です。

戦闘は次回に持ち越しです。あまり上手な描写はできませんが、楽しんでいただけたら嬉しく思います。

十一話 農業都市シール その三（前書き）

遅くなりました。戦闘描写がかなりしょぼい感じになってしまいました。難しいですね。

あとご注意ですが、厨二が入りました。黒歴史がうずきそうな方は直視しないことをお薦めします。

タグ追加しました。

2011年5月16日、編集しました。

十一話 農業都市シール その三

シエラがシールに来て二回目の朝がきました。

寝起きがすこぶる悪いシエラは、当然寝袋にくるまったままごろごろしています。

ただ、シエラの部屋には昨日と違う点がありました。

室内にオレンジ色の球体がいくつも宙に浮かんでいたのです。

床スレスレの位置から天井付近まで、高度にばらつきはありますが、オレンジのシャボン玉のようなものは室内をほぼ埋め尽くす勢いでプカプカと漂っています。

「うみゅ〜……」

かわいらしい寝言を漏らし、シエラが寝袋ごと寝返りを打ったときでした。

大量の浮遊物体の内、一つが小刻みに震え出しました。それを皮切りにして、一つ、また一つ振動を始める球体たち。まるで卵の孵化を彷彿とさせる、どこか神秘的な光景がサダラン男爵の屋敷の一室にて展開されていました。

しかし、現在の部屋の主は未だ夢の中にいます。どんな夢を見ているのでしょうか？ 口の端からヨダレが垂れ、完全に弛みきった幸せそうな表情で寝息をたてています。

そして、もう一転がりしようとシエラが勢いをつけたとき、寝袋にオレンジのシャボン玉が触れました。

直後、

パアアン！

「ふみゅっ！」

かなり大きな、乾いた破裂音がシエラの耳朶じだを打ちました。

それだけでなく、シャボン玉の消滅によって生まれた衝撃波がシエラの体を数歩分転がしました。

移動地点に待ちかまえていたのは、新たなシャボン玉です。

パアアン！ パアアン！

「みにゅ！ ほみよ！」

また床を転がったシエラは、テンポよくシャボン玉の餌食になりました。

それから数分間、部屋は連続した破裂音と、丸太が転がされるような音、それにシエラの短い悲鳴で支配されました。

オレンジ色のシャボン玉の正体は『ベリツシュボム』という魔法でした。

単体攻撃系の魔法ですが、他の魔法とは異なる変わった特徴があり、魔力を流し続けなくても魔法発動状態を維持できるのです。

『ベリツシュボム』は本来、敵の動きを制限し、攪乱かくらんするための罠としてよく用いられる魔法です。

魔法行使時に威力、発動位置、属性、持続時間、移動制限範囲が決められ、最後の二つが他の単体攻撃系魔法にあまり見られない設定項目になります。

今回、シエラが寝る前に発動させた『ベリツシュボム』の大群は、火属性かつ威力が最弱になっていたので、軽い衝撃波と破裂音が鳴るくらいのシヨボいものです。威力が弱いのは持続時間の方に魔力の比率を傾けたためで、通常は普通の人間なら触っただけで指が吹き飛ぶくらいの威力があります。

要するに、シエラは一步間違えれば爆死体ができる、非常に危険な『目覚まし』を用意していたのでした。

しばらくして、無数にあった『ベリツシュボム』もすべて姿を消し、騒がしかった室内に静寂が戻ってきた頃。

途中でぶつけたらしい、赤くなった鼻をさすりつつ、シエラは寝袋から這い出しました。

「うう……。早起きのためとはいえ、この目覚ましは毎回すごく体力を消耗するわね」

大きな欠伸を一つ吐いて、とろん、とした目つきでシエラは一人ごちました。

「小さな怪我もするし、あまりやりたくないんだけど、この魔法が一番私の目を覚ますのに適した魔法なのよね……」。

今度カイルに頼んで、安全な目覚まし用マジックアイテムでも作ってもらおうかしら？」

目を擦りながら身支度を始めるシエラ。自浄効果を持つ、いつも清潔な装備一式を着込み、愛用の杖を左手に持つと、眠気により覚束ない足取りで部屋をあとにしました。

日がまだ昇らない内に屋敷を出たシエラは、早速ポズアワームを退治するための準備を始めました。

「まずは、昨日仕込んだいた魔法刻印を発動させますか」

小さく呟いたシエラは目を閉じ、自身の中にある魔力を体内で循環させ、体細胞を活性化させました。

全身の、特に脚部へと『身体強化』を施し終えたシエラは一つ短く息を吐くと、風を切る勢いで駆け出しました。

町中を目にも止まらぬスピードで走るシエラは、家屋がすれ違いう度に家全体を覆うように魔力を放出していきました。

昨日行った散策のとき、シエラは一軒一軒『保護』の効果を持つ魔法刻印を壁に彫っていました。

『保護』は文字通り、あらゆる外的要因から対象を守る魔法刻印で、武器の刃こぼれや損傷を防ぐために用いられるのが一般的です。建築物に施すものでは似たような効果を持つ『状態維持』という魔法刻印も存在しましたが、風化などの干渉力の弱いものから対象物を守るだけなので、外からの強い衝撃から守護するには、より効果の強い『保護』を使うのが最善なのです。

一時間ほどで広大な土地を一周したシエラは、次にリラと出会った広場に足を運びました。

「よし。次は注意喚起ね」

この時点で大量の魔力を消費したはずなのですが、シエラには疲れた様子もなく、町中を疾走したにもかかわらず息切れ一つありません。

せん。

体力がないとシエラは以前こぼしていましたが、比較対象はカイル率いる勇者パーティーのメンバーに限られています。

彼らはとてもじゃありませんが基準にしている人間ではありません。シエラの体力も決して低いわけではなく、むしろ魔法使い職を考えれば驚異的な高さと言えるのです。

思い込みの激しいシエラがそれに気づく日が来るのでしょうか？それは神様でも分からないでしょう。

シエラは『身体強化』を解除してから、右手人差し指の先に魔力を溜めだしました。

ほんのりと光る魔力を確認して、シエラは人差し指を動かし、そのまま空中に魔力の残光を残すことで魔法刻印を刻み始めました。書いた魔法刻印は『念話』、『範囲指定・シールの町』、『生物指定・人間』です。

数秒で書き終えたシエラは眼前に浮かぶ魔法刻印へと、さらに魔力を送り込みました。

『あゝ、あゝ、あゝ。ただいま魔法のテスト中です。聞こえた方は、頭の中で返事をお願いします』

実際に声を出すわけではないので、別に喉の調子を整えるような言葉など必要ないのですが、シエラは不特定多数の人間へ『念話』をかける場合、よくこのような常套句を使います。

シエラの考えでは、突然頭に響く『念話』に余計な恐怖心を与えないよう意図したのですが、今まで功を奏したためしはありません。実際、シエラに届いた多数の思念は困惑に満ちていました。

『えゝ、皆さん、おはようございます。私はシールの領主様であらせられる、ユーノ・サダラン男爵様より依頼を受けた魔法使いです。今からポズアワームを退治しようと思しますので、諸注意を行いたいと思います。』

初めにご忠告しておきますが、皆さん自身の余計な行動で死ぬことになっても、私は一切責任を負うこととはしません。ユーノ様から

も責任を取る必要はないと許可を受けていますので、死にたくなければ私の指示に大人しく従ってください」

シエラの脅し文句に、頭に響いていたざわめきはピタツと止まりました。実はユーノに確認も許可ももらっていないのですが、簡単に自分の言うことを聞いてもらうには脅迫が一番効果的とシエラは考えていたため、実行したのでした。

「……お姉ちゃん？」

静寂に満ちた『念話』でしたが、ふとシエラに聞き覚えのある声が届きました。シエラの頬が自然と弛みます。町全体に広がっていた『念話』の網を一旦解除し、その人物だけに『念話』を送りました。『リラちゃん？ 起きてたんだ。早起きなんだね』
『ほんとうにシエラお姉ちゃんなの？ どうやってお喋りしてるの？』

『私の魔法だよ。体に害はないから、安心してね。今からちよつと騒がしくなるけど、家の中で大人しくしててね？ シールの町にある建物全部に防御の結界は張ってあるけど、外に出られたら私も対処しきれないから』

『わかった。シエラお姉ちゃん、怪我しないでね？』

『まかせて！』

他の人たちもこれくらい聞き分けがよかったら。などと詮無いことを思いつつ、シエラはリラに話したような注意を、事務連絡のように堅い口調で一斉に『念話』に乗せました。

『念話』越しにシールの総意で了承を受け取ったシエラは魔法刻印を消し、左手に握られていた杖を掲げました。

「さて、やりますか。最初は索敵ね。」

『水よ。我が魔力を寄り代とし、球となりて顕現せよ。』

ウォーターボール』」

シエラの詠唱が終わると、地面と水平に構えられた杖の先端についた、透明の水晶玉が淡く青色に光りました。

そして、瞬く間に杖の指す前方で半径十メロの水球が出現しまし

た。

『ウォーターボール』は大気中の水分を集めて微量の水滴を作り、水の情報を自身の魔力にコピーして複製させた、擬似的な水球を顕現する魔法です。

一般には単体攻撃系魔法として敵にぶつけて終わりの下級魔法です。

しかし、シエラはさらに魔力を込め続け、最終的にはシールの領地を満遍なく覆えるほどの水壁を作り、蓋をするように地面と平行にして頭上に待機させました。

余りに巨大な『ウォーターボール』によって朝日は遮られ、辺り一面に暗い影が差します。

「こんなものかな？　じゃ、次ね。」

『水よ。形を変えて大地に注ぎ、我が敵を探れ』

シエラは雲のような水壁に追加詠唱で命令を下し、雨のようにして地面に降り注ぎました。

バケツをひっくり返したような大雨に濡れるのにも構わず、シエラは目を閉じて地中に移動した魔力の操作に専念しました。

大地に染み込んでしまった『ウォーターボール』の水分は、ほとんどがシエラの魔力によって生み出された偽物です。水の形をしています。本質はただの魔力の集まりに過ぎないのです。

そして、魔力操作が秀逸したシエラにとって、魔力とは六番目の感覚器と呼んでもいい知覚の一つとなっていました。

「……ふん。幼虫も合わせて全部で五十三体か。確かに多いわね。しかも潜伏地点がてんでバラバラだし、今まで全滅できなかったのも無理ないわね」

シエラはポズアームの位置をすべて把握すると、あらかじめ足元に刻んであった魔法刻印へ、またしても大量の魔力を送り込みました。

「さあ！　出てきなさい！」

シエラが地中に向かって叫んだ刹那、地面が大きく揺れ出し、大

量の蒸気がそこかしこで上がり始めました。

シエラが発動させた魔法刻印は『沸騰』です。水などの液体に、魔力が変質した熱を加えて沸騰状態にする、言葉通り『沸騰』の魔法刻印です。

考えなくとも分かるように、主に家庭でする料理の際などに役に立つ、生活密着型魔法です。一般の家庭に魔法刻印を使える人間が少ないため、使用しているのは一部の富裕層や、貴族以上の身分が高いものたちしかいませんが。

シエラが熱したのは地中に染み込ませた、水のように変質した魔力そのものでした。そして、討伐対象のポズアワームは火属性に弱く、火に準ずる熱にもあまり耐性がありません。

『キユオオオオオ！』

よって、熱せられた土の温度に耐えきれなくなったポズアワームたちは、次々と地表を突き抜けて逃げ上がってきました。

シエラはポズアワームに地中へ逃げられないように、土の温度を高温に保ったまま、新たな魔法の詠唱に移りました。

両手に握られた杖はシエラの体の前で地面に突き立てられ、水晶は静かにたゆたう青色から、目に突き刺さる色相の白が混ざった水色に変化しました。

「全部出てきたみたいね。それじゃあ、これで終わり。」

『其れは閉ざされし空間。其れは開けた牢獄。生きるものには停止で迎え。死せるものには永久の不滅を約束する。』

降り立つは氷粒の霧。流れを止めたわがままな水たちは皆も皆もと周りに縋り。舞って纏わり戯れる。幼子のように困む彼ら。行き着く先は絶対閉鎖。時の限りも果てもない。虚無の停滞へとこちらを誘う。

目を瞑るものたちへ。手向けに添えるは造花の花束。受け取るものはついぞなく。ただ咲き誇るだけの花たちは。誰かに愛でらることもなく。生者と死者をあまねく見送る。

あなたの柩は町の表層。あなたは汚れた魂を持つもの。血を流す

こと須く能すへからわらず。隠るる辛苦は無に帰そう。其れが私のせめてもの慈悲。

さあ。別離の時が訪れた。私の魔力に抱かれて眠りなさい。せめて子守歌を捧げましょう。其れはすべてを葬おくる鎮魂歌」

シエラが行使しようとしているのは大規模魔法でした。

上級の魔法になると、正しく魔法を発動させるために詠唱量が多くなります。シエラなら『詠唱破棄』も使えますから、必ずしも詠唱をしなければならぬことはありません。

しかし、ツイダの一件以来あまり目立つことをして、自分から面倒の種を蒔く行動はしないと、シエラは堅く心に決めていました。大規模魔法を単独で発動できるだけで、国境を越えて騒がれたのです。その上『詠唱破棄』まで世間にさらしてしまえば、シエラの自由をさらに奪う結果になるのは自明の理でしょう。よって、シエラが他人の目に付きやすい魔法について、人前や町中で詠唱を飛ばすことは、よっぽどの理由がない限りありません。

シエラが瞑目めいもくして詠唱をしている間も、大半のポズアワームたちは熱による苦しみに悶もえていました。十メロ前後の巨大なミミズが地面を何度も跳ね回り、聞くに堪えない醜い悲鳴をシールの町に響かせています。

『キアアアアアア！』

シエラが詩のような詠唱を完全に唱え終える前に、ひときわ大きな一体のポズアワームがシエラへ襲いかかってきました。声音から相当ご立腹のようです。

長い体を鞭のようにしならせ、反動を利用して大きく飛び上がったポズアワームは、地面へと潜る動きそのままにシエラを飲み込もうと牙を向けました。ポズアワームを正面から見た顔のすべてが口になり、整然と並んだいくつもの鋭利な歯が円状に伸びていて、シエラを噛み潰そうと妖しく光ります。

「特攻してくれば勝てると思ったの？ 私をあまりなめないで」

閉じていた目を薄く開けて、シエラは一瞬だけ襲いかかってきた

ポズアワームへ意識を移しました。

そして、足元にあつた『沸騰』とはまた別の魔法刻印へ魔力を注ぎました。

『キイイイ？』

「もう少し大人しくしてなさい。すぐに終わらせてあげるから」

シエラが用意していたもう一つの魔法刻印は『拘束・光』でした。『拘束』は魔法刻印を彫刻された位置より、半径五メロの範囲で発動者以外の動体を捕縛する魔法刻印です。地面や木から拘束具を生成し、動きを止めるのが一般的な効果です。

ただ、魔法刻印に付属された『光』は『拘束』の属性を指定したものです。この効果により、実体を持たない光の集合体がポズアワームを捕らえていました。

魔法刻印は属性を指定すると効果が多少変化したり、威力が高まったりします。

今回シエラは『拘束』を光属性に修正したわけですが、属性付加がないとシールの土でポズアワームを捕らえていたことになっていました。ポズアワームの体液が含む毒性から土壌汚染の懸念もあり、シエラは事後処理に手間がかからない光で捕縛するのが最善と判断しました。

十本弱もある光の縄に雁字搦がんじがらめにされたポズアワームは、シエラの目と鼻の先で身じろぎ一つできずに空中をもがいています。

『キヨオオ！』

「残念だったわね。」

『世界よ。私の魔力で凍てつき固まれ。』

フリーゾスト・オーバー』

恨みがましい奇声を発したポズアワームに別れを告げるように、シエラは大規模魔法『フリーゾスト・オーバー』を完成させました。詠唱を終えた直後、シエラを中心としてすさまじい冷気が展開されました。渦を巻くように吹き荒ぶ大気は、ポズアワームの体だけでなく、大気中の水蒸気までもを凍らせていきました。

『沸騰』によつて高温となつた地面さえも氷に覆われ、地面に接する場所は例外なく巻き込まれ、シールの町が次第に氷結していきま
す。凝固した水分が霜を作り出し、蓄積されたそれらはあたかも白
い草花のように固まって、町の至る所に根を下ろしていきます。比
較的温暖な気候のシールが、今年年中雪に覆われたような極寒の地
へと変貌を遂げました。

シエラの発動した魔法『フリーズスト・オーバー』は術者を中心
として、狭くても一キロ（キロメートルと同義）の範囲を瞬間凍結
させる水属性の高級魔法です。辺り一面が溶けない薄氷に覆われ、
現実離れた美しさと生物の終焉を表したような絶望的な様から、
魔法使いから『世界を浸食する停止の悪夢』と畏れられていまおそす。
シエラがあえて水属性の『フリーズスト・オーバー』を使ったの
は、町の被害を最小限に留め、利益を最大限得るためでした。

ポズアワームは肉体のほぼすべてが毒になつており、風属性で解
体すれば土壌の悪化は避けられず、土属性は論外。火属性では町に
被害が及ぶ危険性がありました。

また、光、闇、無属性では死体が残らないような魔法が多くなり
ますし、雷属性は力加減が最も難しいので換金部位ごと消し炭にな
るおそれがありました。

消去法で残つた水属性で、広範囲に渡る強力かつ死体が残る魔法、
と条件をつけてシエラが選んだのが『フリーズスト・オーバー』な
のでした。

「ん、終わったあ！　あとはポズアワームの死体を町の外まで移
動させてから、換金部位を取り出そうつと。まだ何体が生きてるか
ら、ちよつと時間をおくことになるけど、小休止にはなるし、いつ
か！」

浮き世離れた町並みにひどく不釣り合いな気楽さで背伸びをす
るシエラ。ほんのわずかに疲労の色が見える顔を満足そうに弛ませ、
街にそびえ立つ魔物の氷柱を眺めました。

そのかわいらしさと艶めかしさが合わさつた妖艶な美貌と周囲の

状況から、シエラが改変させられた世界の女王のようには見えませんでした。
世界から切り離された、寂しい孤独な女王に。

十一話 農業都市シール その三（後書き）

もしかしたら続きに時間がかかるかもです。

それにしても、大学生で厨二を出すとは思いませんでした。いい思い出になるといいんですけど。

あと二話くらいでシエラさん編が終わる予定です。なるだけ早く投稿しますので、どうかご容赦を。

感想とかも良ければ書いてくださいね？

十二話 農業都市シール その四（前書き）

すみません。一話増えます。

あともう一つ謝罪を。コメデイどこいった？と思われた方。私も不思議です。

2011年5月19日、編集しました。

2011年5月30日、誤字訂正しました。

十二話 農業都市シール その四

魔力供給のなくなった町の薄氷が溶け始めた頃。ポズアワームの全滅を魔力知覚で感じ取ったシエラは、未だ氷のオブジェとなっているポズアワームたちを『身体強化』で移動させていきました。

自身より何倍もある体長の物体を担いで運ぶシエラの姿は異様でしたが、外出禁止令が解かれていない現在、シエラを奇異な目で見るものはいません。

きつちり五十三体、町の外へ運び終わったシエラは早速ポズアワームの換金部位である毒袋の回収作業に移りました。『フリーゾスト・オーバー』の効果で、体内の隅々まで氷漬けになったポズアワームの解体は難しいように見えました。シエラがマジックバッグから取り出したナイフは、まるでバターを切り分けるかのような滑らかさで氷柱を切断しました。

「こんな力チコチの死体を解体したことなんてなかったから、今まであんまり意識なかったけど、この解体用ナイフ少し切れすぎでしょう？ カイルが作るものはどれも便利だけど、ちよつと手を滑らせたら腕ごと切り落とすちやいそいで怖いわね」

シエラが戦々恐々としながら扱うナイフはカイルが作ったマジックアイテムでした。

どこの市場でも売っている大型の解体用ナイフの刃身に、『保護』と『切断』の魔法刻印が彫られただけのものです。

しかし、カイルが手を加えたよく切れるナイフの凄さは魔法刻印の効果ではなく、発動方法にあります。

魔法刻印は効果を発動させるために、魔力を刻印にそそぎ入れることが絶対の条件です。人為的に魔力が込められなければ、いくら強力な魔法刻印といえどもただの装飾と同じです。

ですが、シエラはナイフをマジックバッグから取り出してすぐにポズアワームへと刃を入れていて、魔力を放出した様子はありません。

んでした。

実はカイルが魔法刻印を彫刻する際に、柄の方にも彫刻を施していたのでした。仕込んだ刻印は『魔力回収・大気』と『魔力回収・使用者』です。

前者はともかく、後者は強制的に魔力を引き出されるといった、負のイメージが強そうな魔法刻印ですが、使用者から回収する魔力は生物が日常で無意識に発散する微量の魔力です。これなら魔力の温存もできますし、疲労などの副作用もありません。

とても便利な『魔力回収』ですが、一般的なマジックアイテムに施されていることはありません。カイルのオリジナル創作魔法刻印ですから、仲間内でしか流通しないのです。

抵抗のなさ過ぎるナイフの手応えに慎重さを増すシエラは、普通よりも時間をかけて凍った毒袋を切り離してはマジックバッグに放り込んでいきます。毒が定着した体液も凍りついてしまっているの、土地の汚染や自身が毒に冒される心配はありません。

三時間くらい解体に時間を要し、あとに残ったのはポズアワームの肉片だけです。強力な毒性を含んでいるため食用になどできませんから、シエラは環境のために焼却処分することにしました。

「それじゃあね。来世では私と会わないことを勧めるわ」
端的に別れを告げたシエラは、無詠唱で火属性下級魔法『バーナツプ』を発動し、凍りついたままのポズアワームの屍肉を燃やしていきました。

主に魔物の死体処理に使われる『バーナツプ』は時折人の葬儀でも使われる、一応攻撃系なのですが生活密着型寄りの魔法と言えます。

完全な攻撃系に指定しづらい理由としましては、葬儀手段という宗教的な意味合いともう一つ、実用的な問題もありました。

『バーナツプ』は対象を塵すら残さぬ高温の炎で、対象を燃やし尽くすまで消えない魔法です。町を襲撃に来た魔物の大群の殲滅ならまだしも、魔物を倒し討伐部位を持ち帰って生計を立てる傭兵稼業

の人間にしてみれば、初めから『バーナツプ』を使うのはお金を捨てる行為と同じです。

さらに、『バーナツプ』は消費魔力の割に効果範囲が狭く、戦闘で使うにはかなり扱いづらい魔法でもありました。

こういった面から、攻撃系としてあまり発展しなかったがために下級指定を受けた高威力の火属性魔法。それが『バーナツプ』でした。

ポズアワームが灰となって風にさらわれていったのを確認したシエラは『バーナツプ』を解き、シールの町へと戻っていきました。この頃にはすでに太陽も南に高く昇っていて、『フリーゾスト・オバー』の影響はほとんど残っていませんでした。

シエラはポズアワーム討伐の前にした『念話』を再び使い、外出禁止令の解除とポズアワーム殲滅の報を町中に知らせました。

「シエラお姉ちゃん、すごいよ！　ほんとに強い魔法使いさんだったんだね！」

「そんなに褒めないでよ。大したことはしてないし、照れ臭いから」「いやいや、十分に大したことですよ！　アイツらをまさしく一網打尽だなんて！　町の至る所に開いた穴を見てもまだ信じられませんか！」

興奮気味な宿屋の親子を苦笑で応えたシエラは、お茶を優雅に一口含みました。

依頼を達成したらず依頼主に報告するのが通常ですが、シエラはかなりの安全を確保していても知り合いのリラたちが気になってしまい、屋敷へと戻る前に『渡り鳥の羽休め亭』へと寄りました。その結果、やたらと興奮状態にあるリラと主人に囲まれ、半ば無理矢理お茶をごちそうされることになったのです。

リラたちの誘いを断ることもできず、シエラはご厚意に甘えて宿の食堂でゆっくりしていました。さすがに雇われの身で依頼主を蔑ろにはできません。そろそろお暇しようと席を立ったシエラは、

一度リラに振り返って頭を優しくなでました。

「ごちそうさま。美味しかったよ。私はそろそろ行くね。またこの町に来るかはわからないけど、そのときはお世話になるからね」

「……シエラお姉ちゃん、行っちゃうの？」

「うん。私は旅の途中だし、仲間も私のこと、待ってるはずだから途端に表情が暗くなるリラを、シエラは軽く抱き寄せました。

「ほら、そんな顔しないの。宿屋の娘なら、こういうときこそ笑顔で旅人を送り出すものでしょう？ 大丈夫。また絶対にリラちゃんに会いに行くから」

「ほんと？ ほんとに、ぜったい？」

「うん。私は約束を破ったりしないよ。さっきも怪我しないで帰ってきたでしょう？」

「ぐじゅっ！ ……わがっだ。やくそくだよ」

「うん。約束」

感極まって泣き出してしまったリラの背中をさすり、しばらくあやしていたシエラはリラが泣き止んだのを確認して、そっと抱擁を解きました。

目元が赤く腫れぼったくなったりリラは、それでもシエラに満面の笑みを見せていました。

「ありがとうございます！ またのおこしを、こころよりおまちしています！」

「こちらこそ、色々サービスしてくれてありがとう。楽しかったわ。じゃあね」

元気一杯の挨拶を微笑で受け止めたシエラは『渡り鳥の羽休め亭』をあとにしました。

ユーノの屋敷へ戻ったシエラは初めにこの町に来たときに連れてこさせられた応接室に通されました。部屋にいるのは先日と同じ、シエラ、ユーノ、ギルツの三人です。

「しかし、よくやってくれた。これで我がシールは息を吹き返すだ

ろう。これもそなたのおかげだ。町の代表として礼を言う」

「男爵様より直接お褒めの言葉をいただくなんて、光栄にございます」

早く終われ、と内心で文句をはさみつつ、シエラはユーノの長ったらしいお褒めの言葉に耐えています。

かれこれ一時間は経つのでは、というくらい話を止めようとしないうーノを不審に思いつつ、シエラは黙って話を聞くしかありません。ギルドの契約はほぼ完遂したようなものですから、依頼人と傭兵の立場から貴族と平民の立ち位置に戻ってしまいます。シールの住人ではないため直接罰せられることはないシエラですが、体に染み着いた平民としての立場が謙遜を止められないのでした。

「とにかく、ご苦勞であった。報酬はすでにギルドへ納めてある。

これが証明書だ」

「分かりました」

やっと解放される、とシエラは作り笑顔の裏でうんざりしながら依頼終了証明書を受け取りました。

「それでは、私はこれで失礼いたします。仲間が私を待っていますので」

「まあ待て。そこまで急かずともよいだろう？」

さっさと退室しようとしたシエラですが、ユーノに引き止められてしまいました。

ユーノの態度が若干変化し、嫌な予感を覚えつつ、シエラは席を立ったままの状態で訊ねました。

「それはどういった意味でしょうか？」

「なに、ちよつとそなたに頼みたいことがあるだけだ。すぐに済む」

「ギルドの依頼はすでに完了しましたので、私はユーノ様とは雇用関係にありませんが？」

「いくらそなたが隣国の英雄とはいえ、身分は卑しい平民のそれ。

男爵とはいえシールのような大都市を領地としている私に、目を付けられてミュトスを出るまで不自由をしたくはあるまい」

身分の差を持ち出し、嵩にかかった横柄なセリフを口にしたりしたユーノに、シエラは盛大な舌打ちをしたい気分になりました。

貴族からの依頼を今まで幾度か受けてきたシエラです。経験則でどのようなことを強要されるのか、ある程度の想像ができていました。

「最初に申し上げておきますが、私は国に属する気も個人に属する気もございません。私兵への勧誘でございましたら、他の方をお探しく下さい」

「ほう？ 断ればそなたがどうなるのか、理解していないわけではあるまい？」

「そうですね。しかし、私の身に何かあれば、その時はユーノ様にもご覚悟をしていただかなくてはなりません。国よりも強大で、世界のように優しくない報復を受ける、ご覚悟を」

「そなたが我らを滅ぼすというのか？ 本当に可能か？ 確か、リラとかいう子どもが私の領民にいたのだが？」

シエラは思わず奥歯を強く噛みしめました。嫌な予想がすべて当たってしまったことに悪態をつきそうになります。

シエラがこの町を滅ぼすことは能力的に十分可能です。大規模魔法を単体で使えるシエラは歩く魔導兵器のようなものです。広大な土地を持つとはいえ、シールの町ならば簡単に更地にできるでしょう。

しかし、シエラも慈しみの心を持った人間です。親しくなった人間を人質に取られてしまえば、手も足も出せません。

「……貴方は、何が望みなのですか？」

「私はそなたのすべてが欲しい。能力も、その美しい身体もな」

全身に嘗め回すような視線を受け、シエラは軽く身震いして後ずさりしました。

いくら実力をつけようと、性差からくる恐怖はぬぐい去れません。男性から色欲にまみれた目にさらされることが多々あるシエラでも、背筋を毛虫が這うような不快感に慣れることはありませんでした。

「確かに私は平民ですが、この国の民ですらない私が、心まで貴方に屈するとても？ 脅しの常套手段である都市外追放なんて、私には何の効果もありませんが？」

都市外追放とは、主に領主の気に障った平民たちが受ける死罪です。戦う術を持たない平民にとって、町の外は地獄と変わりありません。放り出されてしまえば、あとは死を待つだけの身となってしまいます。

ただ、シエラのように戦闘能力の高い人間には脅迫の効果もありません。

「追放に意味がなくとも、あなたはユーノ様に心から仕えるようになりませよ。次に目が覚めたときにはね」

「どういう意味？ ……っ」

今まで壁の花だったギルツが裏のある笑みを浮かべ、体から魔力を放出しました。

言葉の意味を問いただそうとしたシエラでしたが、ギルツの魔力に反応して急に体が動かなくなり、強烈な睡魔が襲いかかってきました。

「そ、んな。もう、魔法薬を、盛られてた、の？」

「さすがは『賢者』殿。聡明でいらっしやる。ご安心ください。体に害のない魔法薬ですから、今後の行動に支障はありませんよ」

魔法薬とは薬草や魔法的な効果を持つ素材を調合して作られる、魔法の補助に特化した薬品です。液体だったり粉末だったりと形は様々で、主に液体であることが多いため『マジックポーション』と呼ばれることもあります。

普通の魔法薬は苦みが強くて、いくら偽造しようと服薬したことにすぐ気づきますが、高価な魔法薬だと無味無臭なものもあり、料理に混ぜられでもしたら発見は困難となります。

ギルツは昨日の夕食に魔法薬を仕込み、シエラに悟られずに薬を飲ませたのでした。

「く、いしき、が……」

「一日のみ私の魔力にだけ反応を示す『行動支配』が盛り込まれた魔法薬でしたが、随分持ちこたえますね。『欠陥品』の魔法使いだと聞いていましたが、単に気力で抗っているだけですかな」
立っていられず床に膝をついたシエラは『欠陥品』という言葉に顔を上げ、悔しさで一杯になった鋭い眼差しをギルツへと向けました。

「噂には聞いておりましたが、未だに信じられませんな。あれだけの膨大な魔力に攻撃系の魔法技能を持ちながら、非攻撃系魔法の一切を使えず、かつ幻惑系などの間接攻撃系はおるか魔法薬の耐性すら持たないとは。『なり損ない』、『欠陥品』、『不完全』など、あなたを調べれば出てくるのはそのような評価ばかりでしたぞ？」

通常、魔法使いは魔法薬にかなりの耐性を持っています。そもそも魔法薬は戦闘において魔力が少なかったり、魔法操作ができなかったりする魔物や人間に更なる魔法的效果を及ぼすために作られたものです。

魔法薬は体表面にかけるだけでも効果はあり、本来は液体ならば飲ませるよりもぶっかける方が用途としては多いです。

また、魔法薬は魔法に非常に似通った効果があるため、体内で直接作用させる魔法である、とも言われます。

ただ、擬似的なものでも魔法であるが故に、魔法に精通・熟達したもののたち相手では効果がなかったりします。体内で発動した擬似魔法を自身がかけた新たな魔法で相殺させたり、魔力で抑え込むことが可能だからです。

通例なら魔法練度が高く、保有魔力量も人外並みにあるシエラが魔法薬に対処できないはずはありません。

しかし、シエラは生まれたときから体内における魔法への感受性が異常なほど敏感で、自分に害があるうとなかろうとすべての効果を素早く受け入れてしまう体質なのです。

また、この特異体質のために、シエラは攻撃系以外の補助系魔法も全く使えないことが判明しました。

理由はシエラ自身が発動した魔法の余波からくる影響を、体に直
接受けてしまうからです。戦闘に用いられる魔法は効果対象を害す
る魔法ばかりなので、シエラが使用するともれなく自爆してしま
います。『身体強化』は厳密にいうと魔法ではないのでシエラでも可
能なのですが、補助系魔法は修行段階で諦めざるを得なかったの
です。

「唯一好意的な称号である『賢者』も、あなたの欠点を皮肉した蔑
称だったとは調べるまで分かりませんでしたよ。あなたの容姿と実
力に嫉妬したものが言いふらした名だとか。自ら名乗りを上げない
のも、そのような理由からでしょう？」

喉を鳴らすような笑い声を零したギルツを睨むしかできないシエ
ラ。もう声を出すことも、魔法を行使することもできないシエラは、
精一杯の抵抗としてギルツとユーノへ鋭い視線を投げかける他あり
ませんでした。

「……………つく、……………あ」

「ふふふ、そろそろ限界のようですね。では、ごきげんよう。今後
ともよろしくお願いいたしますよ」

二人の男のいやらしい笑い声を最後にして、シエラの意識の糸は
ついに断ち切られました。

(助けて、カイル、みんな……………)

完全に五感が途切れる前に、シエラは心の中で助けを求めました。
当然ながら誰にも聞き取られることはなく、シエラは倒れるように
して眠りにつきました。

十二話 農業都市シール その四（後書き）

次は短めになると思います。

十三話 農業都市シール その五（前書き）

更新遅れてすいません！

言い訳させていただけば、そろそろ大学の課題が増えてくる頃で、書く時間がとれなくなってきたんです。

なるべく早めの更新を心がけますので、ご容赦を。

最後に、しばらくコメディ要素は永い眠りにつきます。いつ起きるかは私にも分かりません。

十三話 農業都市シール その五

時間感覚がなくなり、どれくらい経ったか分からない眠りから目が覚めたとき、シエラはどこかの部屋のベッドに寝かされていた。

「……ここは？」

寝起きが悪いシエラですが、自分に起きたことははっきりと覚えていて、常でない俊敏さで意識を覚醒させました。

周囲の状況を確かめようとシエラは身体に力を入れますが、筋肉が弛緩したままいうことをききません。窓から覗く風景が闇色に染まりきっていることから、夜の時間帯であることは確認できました。「くっ、魔法薬に心底弱いこの身体、本当に嫌になるわね。あの程度の魔力で、簡単に魔法の暗示にかかるなんて」

「おや、あの程度とは失礼ですね。あれでも私の最大保有魔力の半分を消費したのですよ？ まったく、感応性がずば抜けて高い魔力の持ち主でよくあれだけ抗えましたね。どれだけ膨大な魔力量をお持ちなんですか？」

慇懃無礼な男性の言葉に、ユルユルとした動作でシエラが首だけで振り返ると、部屋の扉の前で薄く微笑むギルツの姿がありました。「ギルツさん、これは一体どういうつもり？」

「賢明なあなたであれば、私たちの意図にも、あなたの未来も予想済みなのでは？」

「答えになっていないわ。私の質問に答えて」

「おや。言葉遣いが粗野になっていきますぞ？ 乱暴な口をきくなど、シエラ殿には似合いませんなあ」

のらりくらりと会話を外していくギルツに苛立ちを覚えるシエラですが、身動きを封じられては手も足も出せません。

「分かった、質問を変えるわ。私がどうして補助系の魔法が使えず、魔法薬の耐性がないと判断したの？」

「と、申されますと？」

「たとえ私の噂を知っていても、噂は所詮噂でしかない。己の安全を保障できる確たる証拠がないと、貴族はどこまでも保守的なのは知ってるわ。なのに、ギルツさんが魔法の知識があつて扱えることを考慮に入れたとしても、貴方たちは驚くほど行動が早かつた。どうして？」

「なるほど、そういう意味でしたらお教えしましょう。それと、今日はちも変わらず、黒の七の時、おおよそ四半分（午後七時十五分前後）です。魔法薬の効果が切れるのはあと数時かかりますから、時間を稼ごうとしても無駄ですよ」

密かに魔法薬の効果切れを期待していたシエラは悔しそうに歯噛みしました。いつ魔法薬を飲まれたのか判断がつかないまでも、時間制限が一日だけであることは記憶にとどめていたのです。

ポズアワームを討伐する前にシエラは食事を取っていませんでしたから、魔法薬が混入されたと思しき食事をしたのは前日の夕食のみとシエラは考えていました。魔法薬の効果時間はかなり正確に身体に反映されるため、昨日の夕食時を過ぎていけばシエラにも成す術があつたでしょう。

妙に勝ち誇つた顔をしているギルツから嘘を伝えた可能性は低く、シエラが未だ危機的状況に変わりにないことを如実に示していました。「まず、初めに違和感を覚えたのは私があなたに依頼をした、アルエギルドのときです。

あなたは私と話をしている間、魔法を発動せずに微量の魔力だけを発散させて仲間を呼んだ。マジックアイテムを使った証拠です。

シエラ殿ほど名の知れた傑物が、あらかじめ魔法刻印を用意しておく意味があるのでしょうか？ そもそも『念話』程度の初歩的な魔法ならば、私に隠すことは無理でもその場で発動すればいいはずでしょう？

それに、シールへ転移した魔法もあなたはマジックアイテムで行いました。転移先の座標指定も完璧で、なおかつ私を巻き込んで転

移しても平気そうなあなたが、何故『転移』の術式だけのマジックアイテムなどに頼っているのでしょうか？

まあ、これだけならば私も噂の確証は薄く、真偽は半々だと判断したでしょうが、確信を得たのは今朝のポズアフォームを討伐するあなたの様子です」

「へえ、屋敷から見えるはずのない距離まで離れたのに、見られてたんだ？」

「私も魔法を行使するものの端くれですからな。『透視』に『遠視』の魔法刻印くらい扱えます」

ギルツはおもむろに懐から二枚の紙片を取り出しました。そこには羽ペンで『透視』と『遠視』の魔法刻印が一つずつ書かれています。

マジックアイテムの媒体はかなり応用が利きます。魔法刻印を刻めるものなら、砂に書いても紙に書いても同じ、一時的なマジックアイテムになります。

ちなみに、マジックアイテムの媒体は自由ですが、組み込める魔法刻印の数は魔法刻印を刻むものの腕でかなり左右されます。魔法の発動に必要な式をどれだけ無駄なく簡略化できるかで、初心者用の魔法刻印でも、二文字から四十文字くらいの差が出てしまい、文字の量がかなり違ってくるからです。

ギルツの手にしている二枚の紙片には十文字の刻印が成され、それぞれ『透視』と『遠視』に必要な文字数と比べて、平均文字数の半分で構成されています。

これだけでギルツの魔法技能の高さが窺えます。

「ずっと観察していましたが、あなたが魔法を発動させる素振りを見せたのは、最後の『フリーゾスト・オーバー』のみでした。残りの『保護』『念話』『沸騰』『拘束』はいずれもわざわざ魔法刻印に直して発動していましたね？」

水の派生属性である氷の、しかも上級魔法の術式を極わずかな時間で組み上げたあなたが、どうして魔法刻印を多用しなければなら

ないのです？ それも、直接攻撃に関係しないものばかりを？

それで私は得心したのですよ。あなたが補助系魔法を行使できないという噂は真実だと。ならば、同時に広まった魔法薬に関する噂も真実である可能性が非常に高い。

そう結論づけましたから、こうしてあなたを憂いなく説得できると判断したのですよ。」

「身体の自由を奪っておきながら、なにが説得なんだか。

そもそも、私の噂が疑わしいままだったらどうしていたのよ？

魔法薬は自分で調合するのも、誰かに作ってもらうのも、かなりの費用が必要になるはずでしょう？」

「もちろん、今と同じことをしていましたよ。たとえ確率が半分ずつの賭けになっても、乗ってみる価値があなたにはありましたから。たとえ失敗しても、宿屋の子どもに情を移すほどのあなたの甘さなら、脅されこそすれ私たちが殺されることはまずないでしょうしね」「すべては私が隙を見せすぎたことと、貴族に対する甘さがもたらした必然だった、ってわけね……」

懊悩あうのうした表情のシエラは、自然と特大のため息をこぼしました。

以前から自分の欠点について悩みはあったシエラですが、一気に弱みを突きつけられると、こつも脆弱な存在だったのかと思わずにはいられません。

過去にカイルとも話し合って割り切り、長所を伸ばしてきたシエラですが、深く根付いた劣等感が再び首をもたげました。

（私は、こんなにも、弱かったんだ）

実際に声として出さずとも、心の中で一度言葉にしまつと、シエラはどうしようもなくそれに縛られます。

自分の弱さにどうしようもなく打ちひしがれ、シエラの目に真珠のような涙がいくつも浮かびました。

「おや、どうかされたのですかな？」

「……うるさい。ほっというて」

何もできない自分が齒がゆくて、無力な自分が悔しくて、シエラ

は止めようとしても流れ続ける水珠でベッドに染みを広げていきま
した。

「くくくっ、涙で濡れた顔もまた美しいな。ますます平民にしてお
くには惜しい女だ」

いやらしく喉を鳴らしながら部屋を入ってきたのはユーノでした。
シエラが初めにあつたときの格式張った衣装ではなく、ユーノは
薄い寝間着のような格好をしており、これから何をされるのか予想
したシエラは強い寒気を覚えました。

「近づかないで。私に触れたらただじゃ済まないわよ」

「それは恐い。だが、指一本満足に動かせない状態で何ができると
いうのだ？

まずはつきりさせておこう。今日からお前は私の人形だ。人形に
反発は許さぬ。大人しく従ってさえいればよいのだ」

「ふざけないで！ 私はあなたの操り人形になんかならないわ！」

こちらの意志に真っ向から反抗してくるシエラに違和感を覚えた
ユーノは訝しげにギルツを見やりました。

「……ギルツ。どうなっておる？」

「ユーノ様、この娘は行動を縛られただけで、まだ完全に堕ちたわ
けではありません。こちらが最後の一押しです」

一言忠告をいれてからギルツがユーノに差し出したのは少し透け
たピンク色の魔法薬でした。

そして、ギルツがその魔法薬を取り出した瞬間、シエラの顔色が
驚愕と絶望で蒼白になりました。

「まさか、それは『魅了』と『隷属』が込められた魔法薬？ 大陸
中で製造禁止に指定されている禁薬じゃない！」

「仮にも『賢者』と呼ばれるだけではありません。その通りですよ。
ただし、これは製造禁止になる前に私が調査、保存したもので
非法法ではありません。使用は未だ禁じられていませんからなあ」

「そんな屁理屈っ！」

「あなたにとっては残念でしょうが、まかり通るのですよ」

ギルツの取り出した魔法薬は、対象を一定期間使用者の虜にする『魅了』と、使用者の言葉に一切逆らえなくなる『隷属』の効果と同時に組み込まれた魔法薬で、数年前に禁止薬物に指定されたものでした。

ただ、それぞれ単体の効果を持つ魔法薬はさほど問題はありませんが。製造も容認されていますし、ほとんどが貴族ですが需要もあります。この魔法薬自体が比較的安価で手に入り、奴隷制の残る国もありますから、反抗が強い奴隷に使用することもままあります。

問題なのは『魅了』と『隷属』という効果の組み合わせです。

『魅了』のみだと薬の効果が一度切れれば我を取り戻しますし、『隷属』のみでは行動を恒久的に支配することができても対象を心から従属させることができず、万一効果が切れてしまったとき手痛いしっぺ返しを食らう恐れがあります。

しかし『魅了』と『隷属』を同時に混入させると、それらのデメリットが消失するのです。『魅了』の効果で魔法薬の使用者を意中の人物と錯覚した状態で『隷属』により対象を支配した結果、高確率で「自分はこの人（魔法薬使用者）のことが好きだけど、言うことを聞かなきや嫌われるかもしれない」などと誤認し、魔法薬の効果がなくたって相手に服従してしまいます。この魔法薬を三本も使えば己を心酔する奴隷が完成するのです。

常に魔法薬を投与しなければならぬ『魅了』よりも効率がよく、わずかな懸念の残る『隷属』よりも安心できるこの魔法薬ですが、あまりにも非人道的だとして大陸中の国王が話し合って製造を禁止し、破ったものは重大な罰を与えると法で定めたのでした。

ですが、一部の有力貴族が反発し、廃棄義務と使用禁止を免れた混合魔法薬は市場から姿を消しても、存在は消えていないのでした。「ユーノ様、この娘に主人だと思わせるために使用者の血が必要なのでございますが」

「構わん」

「では、失礼します」

恭しく跪いたギルツはユーノの手と魔法薬を取り、ユーノの人差し指をわずかに切って浮かび上がった血液を数滴、魔法薬に滴らせました。

ギルツは魔法で傷口をすぐに塞ぎ、怯えた顔をした哀れな小娘に近寄りました。

「い、や。イヤ。来ないで」

「そう怖がらないでください。恐怖などすぐに感じなくなります。

ユーノ様に仕える喜びで満たされ、余計なことなど何も考えずに済みますから」

「いやあ！ やだよお！ 助けて、カイル！ カイルう！」

「ふむ、叫ばれては飲ませ辛いですな」

恥も外聞もなく泣き叫んで拒否していたシエラですが、ギルツが『行動支配』を用いて口の動きを緩慢にさせました。

「これでいい。さあ、これを飲みなさい」

ボロボロと目だけで泣き崩れるシエラはどうすることもできず、ギルツの手で妖しく揺れていた魔法薬を、シエラの意味に反して飲み下しました。

（イヤ！ 私が好きなのはこんなクズみたいなヤツじゃない！ 私が、…… 本当に、好き……なのは……）

頑なに魔法薬に抵抗したシエラでしたが、徐々に魔法薬が血液に乗って全身を巡り、シエラを変質させていきました。魔法に対するずば抜けた感応力があだとなり、数分もすると魔法薬の効果に支配されてしまいました。

「そろそろ魔法薬が全身に回ってきた頃でしょう。ユーノ様、お確かめください」

「うむ。おい、シエラ。お前の主人は誰だ？ 言ってみる」

「……わ、たし、の、ご主人、様？」

「そうだ。お前の所有者は誰かと訊いている」

「わたし、……私は、」

魔法薬でギルツに縛られていた身体をゆっくりと持ち上げ、シエ

ラは茫洋とした目線でユーノとギルツを交互に見やりました。

そして、ユーノに視線を固定させたあと、シエラは涙により真っ赤だった顔を、別の意味で余計に赤らめて俯き加減になりました。

「わ、私は、ユーノ様の、」

ぼそぼそと呟くシエラに先ほどの気迫もなければ、忌避や嫌悪もありません。

「ユーノ様だけの、下僕です。ご主人様」

そこに小さく座っていたのはかつてのシエラではなく、偽りの感情に浸食され尽くした、無力で哀れな少女でした。

十三話 農業都市シール その五（後書き）

投稿する前に確認してみたのですが、切りのいいところで調節しようと思いましたが、シエラさんの話ってあと数話増えるんですよ。

なにかと予定が狂いますが、そこは流していつてください。

十四話 農業都市シール その六（前書き）

注意です。

今回はやや性描写が入ります。

直接的な行為はないので発禁にはなりません。性的表現が苦手な方は読まないか飛ばしながら読むかを選択してください。

十四話 農業都市シール その六

魔法薬の効果を確認したギルツは一つ頷くとユーノに退室の旨を伝え、部屋から出ていきました。

残った二人の内、シエラは借りてきた猫のように大人しくなっており、ユーノはその様子を面白そうに眺めていました。

「いやはや、魔法薬の使用は始めてみるが、これほど効くものとはな。いや、シエラが特別なだけか？」

「ひゃい！ お、お呼びでしょうか！」

「いや、ただの独り言だ」

自分の小さな発言に過度な反応を見せるシエラに、ユーノは薄く笑いながら応えました。客観的に見たユーノの笑い顔はかなりあくどく、薄気味悪いものでしたが、シエラには妙な補正がかかっているようでさらに赤面していました。恋は盲目、とはよく言ったものです。

「おい、いつまでそうしておるつもりだ？」

「えと、それはどういう意味でございますか？」

「これから私の夜伽の相手をするのに、いつまで呆けているつもりか？ という意味だ」

「よっ！ 夜伽でございますか？」

先ほどよりも増して狼狽しだしたシエラを訝しんだユーノは軽く眉をひそめました。

「何だ？ お前ほどの年齢だと男の経験くらいあるだろう？ 何をそんなに慌てている？」

この世界では一般的にどの地域でも男女ともに十五で成人とみなされ、二十歳になる前には七割から八割の男女が夫婦になり、その中でも半分くらいは子供も産まれています。

シエラは見た目十七、八歳くらいですから、町娘であるならば性交渉の一度や二度は経験していてもおかしくない年齢です。

「あの、私、まだ男性と、その、性交を、したことがないので、ちよつとびつくりしちゃって」

「何だと？ お前の美貌でか？」

「お恥ずかしながら……」

ユーノは目を丸くしてまじまじとシエラのかんばせと肢体を観察しました。

普段きつめにつり上がっていた目は垂れ気味になり、不安そうに細かく震えるピンク色の唇やハの字になった眉など、シエラの表情からは男の本能を直接刺激するような、強い保護欲と支配欲が湧き上がってきます。

全体的に細身であるシエラはしかし、決して貧相な体つきではありません。女性的な丸みを帯びた肉付きのよい体つきに、触れずとも分かる瑞々しい白い肌は汚れを知らない貴族令嬢のそれです。

彼女を相手に欲情しない男は同性愛者くらいしかいないのでは？ と思えるほど女性的な魅力で溢れており、熟達した娼婦にも似た蠱惑的な魔性を醸し出していました。

そんなシエラが生娘であるなど、ユーノはすぐには納得できませんでした。

「お前ほどの器量なら引く手あまただろうに。何か理由でもあったのか？」

「私は好きでもない人に抱かれるのは当然のことながら、私よりも力の弱い人間に身を委ね、屈する形になるのがどうしても嫌なんです。世界を旅する生活で恋人や配偶者は諦めていましたけど、せめて初めてくらい自分が心から納得できる相手に捧げたいと考えていたら、すっかり行き遅れてしまいました」

シエラの言い分を聞いてユーノも頷けました。単騎で何千もの魔物を殲滅しうるシエラの実力より上となると、真偽自体が疑わしい伝説級の存在しか思い当たりません。シエラはそれほど、現代の魔法使いの中でも突出した力量を持っていたのです。

「なるほど、お前よりも強きものしか認めぬか。私は戦闘能力など

持たぬから、本来は私もお前の基準には到底届かぬのだろうな」

「そつ、そんなことはありません！ 確かに私は私よりも弱い人間に膝を折るなど考えたくもありませんが、その、あの、愛しいと思える方を、私から拒絶するなど、できませんよ……」

シエラは茹でたタコのような色をして、目尻に涙をうつすらと溜め、上目遣いで熱っぽくユーノを見上げました。

見れば見るほど情欲を駆り立てる目の前の少女の姿に、ユーノは思わず生唾を飲み込みます。

ユーノは三十代で全体から見ると若い貴族ながら主要な町の一つを任され、領地経営の手腕も高いのですが、仕事にかまけていたため妻も子供もいません。性欲は今まで気に入った町の若い娘を適当に見繕って済ましていましたから、女性に対する執着もあまりありませんでした。

しかし、ユーノは生まれて初めて一人の女を独占したいと強く思いました。誰の目に触れさせることもなく、どこにも逃げないように閉じ込めて、自分だけを見て欲しいという暗い情念が暴れ狂っています。

自分の方へ引き寄せ、捕まえたつもりが、逆に目の前のあどけない少女に捕らえられてしまったのだとユーノは悟りました。

「そのように切なげな声を出すな。強引に押し倒してしまえばいいぞ」

「……あう、で、できれば、やさしくしてください」

シエラは恥ずかしさのあまりか、顔を両手で覆ってしまいました。無意識に出る己の所作やセリフの一つ一つがユーノの理性を食い破っているのに、シエラはまったく気づいていません。

一見受けの立場に見えて、実際は果敢に攻めている様子は、どれだけしおらしくしてもシエラらしい姿でした。

「もう我慢できぬ。脱げ。私が男を教えてやるぞ」

あと一押しで切れそうになる理性の糸で、ユーノはなんとかシエラに襲いかかりそうになる衝動を抑え込みました。

ですが、臨界点を突破しようとしていた高揚感はすぐに引いていくことになります。

「え……？」

それは脅えたような、恐れるような、とても頼りない表情で顔を上げたシエラが原因でした。

「どうした？ 何か問題でもあるのか？」

加虐嗜好があると自己分析しているユーノですが、特別強いものではありません。愛おしいと想える相手が嫌悪することをする気はない、と考えるくらいにはユーノは常識人でした。

「……いえ、何でもありません。少しお待ちください」

「あまり気が進まぬなら、無理強いはしたくないのだが？」

「大丈夫です。ユーノ様はお優しい方なのでですね。ユーノ様は私のご主人様ですから、私のすべてを知って欲しいのです」

シエラの触れれば壊れてしまいそうな微笑を前にして、ユーノは己の身勝手な言い分と見当違いの優しさに嫌悪感と罪悪感を抱きましました。

彼女の意思を無視して自分に惚れさせ、いざ行為に及ぼうとしたときに彼女を気遣うなど、偽善もいいところです。

しかし、ユーノは自身の言動の矛盾を把握しておきながら、深く考えてしまう前にそれに蓋をしました。

シエラの本当の意思を完全に無視した形になりましたが、ユーノはそれでもシエラの独占を選んだのです。それほどまでにユーノはシエラに惹かれていたのでした。

「ユーノ様」

自責に没頭していたユーノを覚醒させたのは鈴のような女声でした。

思考に没していたユーノが顔を上げると、そこには生まれのままの姿で佇む少女がいました。

(恋心に近い情を向ける色目を抜きにしてもなお美しい)

ユーノはシエラの裸身を一瞥し、肉欲よりも先に審美の目で彼女

を評価しました。

均整のとれた肉付きは高度な美術品のようにも映り、自分のような矮小な人間が触れてもいいのかと、ユーノが一瞬逡巡するほどでした。称するならまさに『天使』か『女神』が相応しく、身分の次元を越えた崇高さが彼女には窺えました。

そして、シエラの形のいい胸に視線がなぞったとき、ユーノは『それ』に気づきました。

「む？ シエラ、まさかこれは……」

「はい、ユーノ様のご察しの通りです」

ユーノの指摘した場所、シエラの双丘の谷間に、白い痣のようなものがありました。

痣は文字でも記号でもなく、どことなく絵のようにも見えます。

先端の丸い棒が胸の中心に垂直に立ち、棒の周りには放射状に伸びる光のような模様が描かれていました。

それはまるで、魔法媒体の杖から魔法を発動している様子を抽象化したようでした。

「これが私の弱所の原因であり、私の力の正体であり、私の生を縛る呪いの鎖そのもの。人々が『勇者の紋章』と呼ぶものです」

シエラの胸にある模様は、カイルの額にあつた紋章と同じ、彼女が勇者を示す紋様でした。

カイルとシエラはそれぞれ、同じ村から排出された勇者だったのです。

「どういうことだ？ 力の正体というのは分かるが、弱点でもあり呪いとは。随分穏やかではないな」

「ユーノ様もご存じの通り、私は人の手に余る強力な攻撃系の魔法を単体で行使できます。

ですがそれは私個人の才ではなく、紋章の働きかけによるものなのです。

私の紋章が杖を表しているのがお分かりですか？ これは勇者の特性も示しており、魔法に特化した人材であることを示しています。

細かい意味までは推測でしかありませんが、光のような模様が攻撃系の魔法を指しているのではないかと思われまます。

そして、それが私の体質をも変化させたのです」

「体質というと、精神や魔力に働きかける魔法に対する感受性のことか？」

「正確には『魔法耐性』と呼ばれるもので、魔法が使えない普通の人でもある程度は持っているはずの、魔法に対する免疫力のことです。」

私はその魔法耐性が常人以下では済まず、耐性自体が身体に存在しないのです。

魔法という無双の矛の代償として、私は魔法を防ぐ盾の一切を失ったのです。

その上、勇者はこの世に存在する魔王を討伐せしものと定められています。

望まぬ力を理不尽に押しつけられたばかりか、生きる道さえ強制させられたのです。この紋章はシンシア教の定める神から授かった栄誉などではなく、私にとっては悪魔がもたらした忌むべき呪いにすぎません。

こんなものさえなければ、私にはもつと違った人生があつたのではないか？ 今でもそのように考えることがあります。

私が昔から欲しかったものは力でも名声でもなく、愛したものとともに過ごす明日だけなのですから」

自虐的に微笑むシエラは、ユーノの目に何よりも脆く儂い存在に映りました。少しでも視界から外せばこの世から消えてしまいそうで、ユーノは思わずシエラをきつく抱きしめていました。

「……ユーノ、様？」

「そのように自分を卑下するな。そのように苦しそうに笑うな。そのように何もかも自分で抱え込むな。」

お前が自らを貶めたら私も悲しい。お前が苦しければ私が慰めてやる。お前が抱え込めなくなったら私が共に背負ってやる。

だから、そんな泣きそうな表情で笑うことは許さん」

「ユーノ様……」

ユーノは勝手な言い分ですますシエラを誘導している自分に反吐が出そうになりながら、背中に回した手に込めた力をわずかに強めました。

胸の中で縋るように見上げるのは、ユーノが初めて手放したくないと想えた少女でした。魔物を苦もなく討伐せしめた体躯は小さく、剛毅な仮面で武装した裏には年相応でひ弱な内面を持つ臆病な女の子。

疼く良心の呵責を黙らせ、ユーノは静かにシエラの肩を抱き、ゆっくりと互いの顔を近づけました。求めに応えるようにシエラも目を閉じ、ユーノを仰いで待っています。

あと数セロで唇同士が重なるうとした、その瞬間でした。

「！ユーノ様！」

突然シエラがユーノを思いっきり突き飛ばしました。若干の『身体強化』も含まれているのか、女性の細腕で押されたとは到底信じられないくらい強い力で遠くへ倒れ込んだユーノは、強かに背中を打ち付けました。

「がはっ！ い、一体、何が？」

よもや魔法薬の効果が不完全だったのかという考えがユーノによぎりましたが、突き飛ばされる前にシエラが敬称を用いていたことですぐに消え去りました。

肺の空気を一気に吐き出したユーノは痛む背中を気にしつつ、倒された身体を起こしました。

「よう、オツサン。僕は回りくどいのが嫌いだから、簡潔に訊くぞ」「っ！ 誰だ！」

そして、ギルツのものではない若い男の声がユーノに突き刺さりました。

慌てて誰何すいかを尋ねると、先ほどユーノたちが向かい合っていた場所に、一人の青年の姿がありました。

身につけている装備はすべてどことなく安っぽい印象があり、勇者を模したであろう一式は子どもの工作のようで、成人した男性が着るには違和感が強すぎるものでした。

そんな冗談みたいな格好をした青年はユーノを見下し、ぞっとするほどの無表情かつ抑揚すらもない声音で、一言。

「僕の大切な仲間は何しやがった？ このクソ野郎」

かつてない怒りを静かに凝縮させて声帯を震わせたカイルは、床に突き刺さした剣を抜き放ち、尻餅をついたままのユーノへと切っ先を向けました。

十四話 農業都市シール その六（後書き）

ワードはド直球でしたが、私は性に関する描写って初めて書くんですね。背筋に寒いものを感じながら書いてました。

さて、今回はカイル君大活躍の巻（誇張表現含む）です。お仕置きサドタイムです。

作者的には主人公ということもありカイル君は大好きなのですが、好き嫌い分かれそうなキャラだと思います。支持かアンチかは読者様に任せましょう。

最後に、この話の途中まで読んで、若干名寝取られを期待した方。作者はそこまで過激ではないはずですのであしからず。

十五話 農業都市シール その七（前書き）

最近文章が詰まります。

遅れてしまったのはそのせいです。

今回ちょっと長めです。

2011年6月14日、編集しました。

十五話 農業都市シール その七

突如として現れたカイルに困惑を隠せないユーノはすぐに反応できませんでした。

おもちゃのように拙い剣の切っ先を鼻先に突きつけられ、思考が真っ白に染められます。

どれくらいそうしていたのか、時間感覚のなくなったユーノはカイルと対峙した刹那が半時（三十分程度）にも一時（一時間程度）にも感じられました。

「ユーノ様！ お下がりに下さい！」

二人の膠着状態を破ったのは、カイルとユーノの間に立ち塞がったシエラでした。

いつの間に着込んだのか、一糸纏わぬ扇情的な格好からローブ姿に戻っており、左手の杖にはすでに魔法の準備が整っているようでした。

「風よ！ 我が魔力を食らい空間を喰らえ！」

「ウエンスライ！」

杖の晶球が緑色に光ると、カイルがいた周囲の空間が歪み始めました。歪みが一定の大きさにまで達したとき、空気が捻れて不可視の刃が範囲内の物体を即座に切り刻みます。

無数のカマイタチに襲われたカイルでしたが、魔法発動と同時にその場を退いていて、危なげなく難を逃れていました。

「あれだけの時間で私の魔法を避けるなんて、どんな反射神経してるのよ」

シエラは感心半分呆れ半分で呟き、カイルを警戒しています。

「シエラ！」

ようやく我を取り戻したユーノが反射的に自分を守る少女の名を呼びました。

「初めて私の名を呼んでくださいましたね。もう少しお下がりにさ

い。ユーノ様を害する賊は私が始末します」

毅然とした立ち振る舞いでカイルへ向き直るシエラに、さっきまでの弱気な雰囲気は微塵も感じません。ユーノを庇う背中ではまさしく戦いを生業とする魔法使いの姿そのものでした。

「あいつは得体が知れん。無理はするな」

ユーノは恋慕する女性に守られることに情けなさを覚えながら、部屋の壁際まで退避しました。

ユーノが退室しなかったのは、奇妙な出で立ちの青年の目的が自身ではなくシエラにあると考えたからでした。

シエラが賞賛する実力の持ち主の潜在能力は未知数です。部屋を飛び出してしまえば、その間にシエラを失ってしまうかも知れない。ユーノはそう考え、足手纏いを理解しつつ二人の争いを見守ることにしたのです。

「シエラ、と言ったか？ 僕が誰だか分かるか？」

シエラとユーノの一連のやりとりを観察していたカイルが、おもむろにシエラへ尋ねました。

「生憎、あなたのような一度見れば忘れないような格好の男に知り合いはいないわね」

「そうか……、そいつは残念だ」

辛辣な物言いに軽く肩を竦めて見せたカイルは、シエラからユーノへ視線を移動させました。

「少なくとも『魅了』に『隷属』、あとは『記憶改竄』か。今まで色んな貴族を相手にしたが、今回みたいな陰湿で夕チの悪い魔法薬を使ったヤツはアンタが初めてだよ、オッサン」

「な、何だと！」

ユーノはオッサン呼ばわりに声を荒げたわけではありません。カイルの発言内容に驚愕を隠せなかったからでした。

カイルはどのようにしてか、シエラに使った魔法薬の効果を言い当てたのです。少なくとも、実際に薬品を見ずに効果を断定するなんてシエラにもできなかったことでした。

「な、何故それが、」

「匂いだよ。魔法薬は効果によって、それぞれ微妙に香りが変化する。僕はこの部屋に滞留していたそれを『身体強化』で鼻を鋭敏化させて嗅ぎ分けただけ。あとは裏付けを取れば終わり。簡単だろ？」

ユーノは力の底が窺えない青年に強い恐怖を覚えました。

こともなげに話してはいますが、依然ユーノがギルツから聞いた魔法薬の判別方法に、そんな無茶苦茶な手段はありませんでした。

ほぼ無臭の魔法薬の効果を知るには、せいぜいが色か味かで判断するしかなく、カイルが言うようなことを試した人間がいたかどうかも怪しいものです。

「さつきから何をごちゃごちゃと。あなた、一体何しにきたの？」

「無論、仲間を騙し裏切ったそのオツサンへの懲罰と、仲間の救出だよ。今のお前には関係ない」

「そう。でも、ユーノ様を害するという存在を、私が黙って見ていると思う？」

「安心しろ。お前如きじゃ僕には勝てない。一生な」

「……言ってくるわね。どこからそんな自信が出てくるのか、興味深いところだけ」

「客観的事実だ。感情が根拠の空論じゃなく、冷静に行った戦力分析の結果だよ。お前はこの状況じゃ不利な点多すぎる」

カイルはだらりと下げていた腕の片方を持ち上げて頭をかき、そのまま胸の前で指を三本立てました。

「一つ、お前が得意とする広範囲魔法が室内では一切封じられること。まあ、足手纏いもいるようじゃどのみち大規模魔法なんて使えないだろうけどな。」

一つ、お前は長年長所を伸ばすことに専念し、対象指定や座標設定の短所を疎かにしていた。他の有象無象よりも遥かにマシだが、僕から言わせれば単体攻撃の狙いが甘すぎる。せめて素で移動中の僕に一撃を加えられるようにならないと完全とは言えないな。

あと一つ、僕に勝てない要因はあるが、今のお前に話しても意味

が分からないだろうからな。言わないでおくよ」

明らかに馬鹿にされたシエラは内心の怒りを押し殺しつつ、カイルが口にした自身の不利に納得もしていません。

決してシエラが一对一に弱いわけではなく、環境に苦手意識があるだけです。しかし、そのような精神作用も戦闘には大きく影響を及ぼします。どれだけ有利な状況でも、苦手な条件下では無駄な行動や焦りを誘発しやすくなり、思わぬところで足元を掬すくわれたりします。

室内という閉鎖空間を保持しつつ、護衛対象のユーノを庇いながらカイルと闘うなど、細かいコントロールに欠点があるシエラには難しいのです。

「どうしてあなたが私の戦闘スタイルを熟知しているかは分からないし、あなたの言う通り私には戦闘の枷が多いわ。けど、それだけで私の力を嘗めて欲しくないわね！」

「闇よ。彼の者を包みその身を砕け。」

「ダークルギイ」

シエラが初級の短い詠唱を唱え、杖が黒く発光すると、カイルの足元からねっとりとした黒い塊が噴出し、次々とカイルへ巻き付いていきました。今度はカイルも抵抗せずに闇に補足され、逃げ場はありません。

「闇よ。更なる我が魔力を糧とし彼の者を押し捻ねじり破壊し尽くせ」

魔法の闇がカイルに満遍なく付着したあと、シエラは追加の詠唱を施し「ダークルギイ」を強化しました。闇の圧力を中級までに強くし、力の流れに回転を加えて擦り潰すような動きを付加。カイルを肉片に変えようと暴れ出します。

しかし、

「お前、僕を馬鹿にしてるのか？」

カイルは何の痛痒も感じていないようで、全く平然としていました。代わりに、カイルの手にしていた勇者の剣レブリカの剣身が悲鳴を上げ、

呆気なく砕けていました。

「はあ？」

苦しむ素振りを微塵も見せないカイルに、シエラは思わず素っ頓狂な声をあげてしまいました。

普通の人間なら数瞬で細切れの肉片と化す威力を孕んでいて、追加詠唱によりかなりの強化を施された魔法だったはずなのです。

「まさかとは思ったけど、やっぱりそうか。本当に馬鹿だな。お前も、魔法薬の効果を設定したヤツも」

嘲りの色が強い笑いを漏らし、カイルは剣の柄と鞘をマジックバツグに仕舞いました。鎧以外は無手の状態となり、余計に付け入る隙ができたように思えます。

「水よ。我が敵を貫く槍となりて広がり弾ける。」

『ウボースピア』

すかさずシエラは水属性の中級魔法『ウボースピア』を発動し、青く輝く杖を振るってカイルへ射出しました。詠唱を簡略化し、魔法発動本数が十本前後と少なくなりましたが、一人の人間相手には十分すぎる殺傷力がありました。

「冷たいな」

ですが、カイルは水の槍をことごとく素手で殴り落とし、シエラの『ウボースピア』はカイルの手を湿らせる程度の効果しか与えられませんでした。

「あなた一体どんな身体してるのよ！

『光よ。幾重に集まり瞬滅しゅんめつの炎ほむらと成れ。

『ライティボム』

続いてシエラが発動させたのは光属性魔法『ライティボム』です。白い光が杖から溢れ、蛍のような小さな発光球体がカイルの周囲に数体出現し、身体に群がるように集まりました。かと思うと、光が一つに融合したと同時に一気に縮爆し、膨大な熱エネルギーがカイルを襲いました。

「ぬるいな」

光の小爆発が収まったあと、カイルはまたも平気そうに佇み、羽虫でも除けるかのように光の残滓を手で扇ぐだけでした。

「あなた化け物か何かなの！」

「魔力よ。純粋な力へ変換し彼の者をあまねく拒絶せよ。」

「リーバグラテイ」

めげずに発動した魔法は無属性重力系統の中級魔法『リーバグラテイ』です。

無属性魔法は他属性と違い、系統というものがいくつ也存在します。系統は一般属性（火、水、風、土、雷、光、闇）に分類できない、いわば概念的な属性を言います。重力、磁力、吸収、発散などが無属性の系統になります。

シエラが行使した『リーバグラテイ』は重力分類属性で、空間に一カ所座標を設定し、そこを中心にして不可視の圧力を周囲へ拡散させる魔法です。

見た目は火属性の無差別に広がる爆発系に似た魔法ですが、有効範囲が狭い分加わる力が局所に集中し、明確な被害領域が設定されるところが、無属性重力系統魔法の特徴です。

シエラが設定した『リーバグラテイ』の中心位置はカイルの胴体でした。肉体を押し広げてくる内圧が、カイルの身体を飛散させようと奮闘します。

「効かないな」

が、やはりカイルには無意味でした。その場から一步も動くことなく、シエラとユーノを見返していました。

「何事ですか！」

シエラだけでは進退きわまったところ、部屋の扉からギルツが慌てた様子で飛び込んできました。シエラの魔法を察知して来たのでしよう。手には魔法媒体の杖が握られています。

「ギルツ！ シエラの援護を頼む！ 私にはよく分らんが、あの男は魔法が通じていない！」

「は？ そんな人間、存在するわけが」

「現実を見てください！ ギルツさん、私はこれから上級魔法の詠唱をしますから、あいつの足止めをお願いします！」

言うが早いのか、シエラは即座にギルツと立ち位置を変更し、魔法詠唱に集中しました。

「ん？ アンタは確か、仲間に直接依頼を持ってきたオツサンじゃないか？」

カイルはシエラを止めるでもなく、前に出てきたギルツの顔を見て呑気に確認をしてきました。

「お前は彼女といた平民の小僧か？ どうやってここまで侵入してきた？」

「魔法で転移してきただけだよ。仲間の魔力を目的地に据えてな」「嘘も休み休み言え。貴様のようなばつとせん小僧に、転移のような大それたことができるか」

「信じる信じないは勝手だが、僕の仲間を返してもらいにきた。依頼は完了したんだろ？ だったら余計な小細工をしないでさっさとこっちへ引き渡せ」

「ふん、仲間仲間とうるさい奴だ。もう分かったのだろう。すでに彼女は我々と共に歩む道を選んだ。貴様のような小僧に彼女は似合わない。彼女の真価は我々と共にあってこそ発揮されるのだ」

「……ああ、そう。アイツに魔法薬を盛ったのはアンタの方が。アホな貴族が使うにはヤバイ薬に手を出してたから妙だとは感じていたが、魔法に精通してそうで偏屈そうなアンタなら納得だ」

「何とでも言う方がいい。既に采さいは投げられた。一度魔法薬に染まれば、元に戻すことなどできはしない。神でない限り、な」

「へえ、それはどうかかな？」

「ギルツさん、下がって！」

シエラの退避勧告を受け、ギルツはシエラよりも後方へ退却しました。

床と身体に平行に掲げられた杖から強烈な灰色の光が迸り、シエラの結びの詠唱で一際輝きを増します。

「『一片残さず私の世界から消えなさい！

ヴァニシユメント・ルウォード！』」

シエラの上級魔法が発動した瞬間、カイルに初めて反応がありました。

「っ、ぐほっ！」

カイルは身体を大きく『く』の字に曲げ、口元を覆った右手からは大量の血液が漏れだし、床を真っ赤に染めました。

左手は胸の辺りを強く握りしめ、拳は骨や内蔵を押しつけて自然に身体へ埋まっています。

カイルはたまらず両膝をつき、大きくせき込みながらうずくまっています。

シエラが発動させたのは無属性魔法の中で最も強力かつ扱いの難しい、消滅系統に属する上級魔法『ヴァニシユメント・ルウォード』でした。

消滅系統は読んで字のごとく、あらゆる物質や概念を消し去ることがができます。

理論上は人間を物質的にも精神的にも消失させ、死体を残さないだけでなく、対象者に関する記憶すらも消すことが可能です。要するに、元々そのような人物など、この世に『いなかった』状態にできるのです。ただ、シエラの魔力量でも実現できないほど莫大な魔力が必要で、机上の空論とさえ言われる説だったりします。

シエラが『ヴァニシユメント・ルウォード』で消し去ったのは、カイルの内蔵と胸骨などの骨の一部でした。一気に空洞と化したカイルの身体は生命維持が不可能で、もはや致命傷といえる状態でした。

「シエラ、やったのか？」

「はあっ、はあっ……、おそらくは、仕留めたかと」

「どうした？ 息が荒いぞ？」

「魔力切れ、です。さっきの魔法で、残りの魔力を、全部、使ってしまった、から。一晩寝れば、半分くらいは、回復、しますの

で、心配は、いりません」

消滅系統魔法は細やかな魔力操作能力や、途方もない魔力があつて初めて、取得条件が揃います。長い間使い手のいかなかった古代魔法に分類されますが、シエラは見事に再現してみせたのでした。

「そうか。しかし、よくあの男を倒せたな」

「さすがはシエラ殿。失われた魔法さえ扱えるとは。いやはや、私が魔法に関してこれほどまでに敬意を抱いた人物は他にいませんよ」
口々に褒めてくるユーノとギルツにはにかみながら、シエラは息を整えていきました。

「でも、この『ヴァニシユメント・ルウォード』は、多用できないのが、難点なんです。最小の範囲でも、一日に二回使えば、魔力は空になりますし、何より、かなりの集中力が必要です。詠唱を少しでも失敗すると、直接死に繋がる諸刃の剣なので、ここぞというときにしか使えませんから」

「まったくだ。あんなもん連発されちゃ、こつちの身が保たないつての。僕だって消滅系統の魔法なんざ初めて受けたぞ」

カイルが倒れて安心しきっていた三人でしたが、頭に響いてきた『念話』によつて空気が凍りました。

「……まさか、そんな！」

シエラは殺したはずの青年へ振り返り、悲鳴に近い声を上げました。

そこには床に血だまりを作りつつ、满身創痕ながらも自らの足で立ち、シエラたちを見据えるカイルの姿がありました。幽鬼の様に佇む彼の瞳は生氣に満ちあふれ、死にかけているとは思えない覇気が滲んでいきます。

「馬鹿な！ 何故生きている！」

絶句して言葉が出ないシエラとユーノの代わりに、ギルツが一人声を荒げました。

「なんだ、知らなかったのか？ 僕は勇者だ。仮だけどな。だから、ある程度反則じみた能力は僕にも備わっている。そいつと同様に不

便もあるが、今は別段困っていない。他に質問は？」

口からの吐血は止まらず、右手は膝に乗せ、左手は胸を押さえる痛々しい姿からは連想できない軽い口調で、カイルは『念話』を返しました。

「質問の答えになってないわ！ どうしてその身体でまだ生きていられるの！」

「声がデカいぞ。結構ギリギリなんだから、ケガ人は労ってくれ。種を明かせば簡単な話だよ。僕はただ、消滅魔法を受けてすぐ、自分に治療系統魔法をかけたんだよ。」

しかし、自分の一部とはいえ一から臓器を作るのは難しいな。心臓は元に戻ったが、他はもうちょっと時間がかかりそうだ」

よくよく観察してみますと、カイルの左手は淡く発光しており、魔法を発動させているのは事実でした。

「治療系統魔法だと？ そんなもの聞いたことがない。治療系統魔法の間違いいはないのか？」

聞き慣れない魔法に首を傾げたのはギルツでした。

治療系統魔法とは医術の補助として用いられる、怪我や病気を癒す無属性魔法です。以前カイルがゴブリンの耳を治すのに使ったのは、こちらの魔法です。

ただ、治療系統魔法の効果は即効性はありませんが、あくまで応急処置の範囲としての効用しかなく、重い症状は薬と魔法薬を投与する長期治療が一般的です。このことから、医者とは全体の八割が薬師とも呼ばれます。

よって、カイルが手の施しようのない状態から起きあがったのは異常なことなのです。

『消滅系統と同じで、治療系統の根元とされる古代魔法の一つだよ。知らないのか？』

薬の処方による治療が生まれるずっと昔に主流だった医療手段で、患者の免疫力や再生能力を無視し、魔力だけで身体の構造をかき換える魔法だ。

利点は致命傷の傷でも回復可能な即効性と再生力、詠唱を必要としない、あとは副作用や拒絶反応もないことか。

欠点は八ナから身体の構造を理解してなくちゃうまく完治のイメージができないし、古代魔法だから消費魔力量がでかい。

その上、臓器を再構成して体内に移植する場合、臓器を血管の位置や筋肉の付き方などの細部に至るまでを再現し、設置位置を元の場所からずらさないようにしないと、あとになって障害などが生じやすい。

よって、一つの針の穴に五本の糸を通すくらいの細緻な魔法操作能力が求められ、使い手が少なくなることだな』

カイルはどこまでも単調に『念話』を続けていました。

治癒系統魔法が遅延したり、魔法の制御をわずかにでも誤れば死に直結する状況下に変わりはありません。だというのに伝わる声音に動揺はなく、並行して『念話』まで使う余裕を残し、泰然としています。

シエラはカイルの魔法技量に戦慄しました。

カイルの口にしたことがすべて事実なら、彼は既に『転移』で魔力を消耗しているはずです。治癒系統魔法が仮に『ヴァニシユメント・ルウオード』と同程度の魔力が必要だとすれば、カイルはシエラと同等以上の魔法使いと言えます。

シエラがそこまで思い至ったとき、カイルは一度大きく咳をしました。血痰を吐き出し、前傾姿勢は真っ直ぐに伸ばされ、背伸びをする様子は『ヴァニシユメント・ルウオード』を直撃する前と変わらない動作です。

「ん〜っと！ 血を作るのに時間がかかったが、これで全快だ。さて、まだ抵抗するか？」

軽いストレッチをしながら問いかけるカイルは、声だけが親しげで目は捕食者のそれで、見逃してくれる風には見えません。

「ギルツさん、あの人に勝つだけの力がありますか？」

「シエラ殿でお手上げでしたら、私では足止めすらできないでしょ

う。情けないですが、次元が違いすぎます」

悔しそうに唸るギルツを横目にしたシエラは一度瞑目し、覚悟を決めました。

「分かりました。お二人は逃げてください。私は時間稼ぎを」

「何を馬鹿なことを言っている！」

「……申し訳ありません、ユーノ様」

真っ先に反対したのはユーノでした。しかし、シエラは謝罪の言葉を残してカイルに突撃しました。

「はあっ！」

杖を棒術の様にして構え、シエラは鋭い突きをカイルに見舞いました。ローブさえなければ本職の格闘家に見えるほど、その動きは洗練されていました。

「遅い」

しかし、奇をてらった襲撃もいなされ、カイルのかけた足払いでシエラは身体の均衡を崩してしまいました。

「あっ！」

床に倒れ込むかと思われましたが、前のめりになったシエラを優しく受け止めた腕があり、転倒は免れました。

「眠れ」

同時に首筋へカイルの手刀が当てられ、呆気なくシエラは意識を手放してしまいました。

「シエラ！」

「シエラ殿！」

健闘むなしく敵の手に落ちたシエラを助けるべく、ギルツは咄嗟に魔法の詠唱に入ろうとしました。

「『サイレント』。お前、少し黙ってる」

ギルツの動きを読んだカイルが発動したのは声を一時的に奪う魔法です。詠唱を封じるため大半の魔法使いを無力化でき、カイルパーティーでは時折『一口を利けない』という罰ゲームで用いられます。

カイルは陸に上げられた魚のごとく口を開閉するギルツと、唇を強く噛みしめているユーノを睥睨しました。そして腕をシエラの背中和膝の裏に回して抱き上げ、二人へ静かに告げました。

「シエラは返してもらおう。貴族の道楽に関わるのはゴメンだからな」
「道楽だと！ 私は本気で！」

「少なくとも初めは遊び半分だったんだろ？ それで、すぐにシエラに惚れていった。でもな、それは本当にオッサンの意思か？」

「どつという意味だ！」

「勇者は紋章があるおかげで、人々から好い感情しか向けられないようになってる。ご丁寧にも容姿も秀麗に作り替えられ、より大衆から受け入れられるように変質させられるんだよ。」

「勇者が一時期無条件に名声を得ていたのは、ひとえに紋章の影響が強い。正式ではないにせよ、無意識に人々の目を狂わす『勇者』であるシエラに抱いた感情が本物かどうかなんて、当人も含めて分かるはずがないんだよ」

「出任せをほざくな！」

「なら、オッサンがシエラに惚れたのはいつだ？ まともな会話を、一時に満たない間交わした程度で心動いたようなら、紋章の毒気にはやられてるんだがな？」

「そんな、嘘だ……。私は、私は……」

「安心しな。僕たちが町を出た頃に、お前らの記憶の一部を書き換えてやるから、失恋したことにはなんねーよ。僕のことシエラのことキレイサツパリ忘れさせてやる。もう二度と会うこともないだろうしな」

カイルは声なき怒声を放つギルツと、顔色の優れないユーノに『ファイアウエント』の魔法をかけて気絶させました。

「ああ、それと。僕らは明日の早朝に旅立つとするよ。ついでに慰謝料として、この屋敷の財産を半分持つてくから。返事がないのは持つてつて構わないと判断するから、そのつもりで」

意識を失い、返答などできるはずもない二人を残して、カイルは

音もなく屋敷をあとにしました。

後日、シールの町は原因不明の大赤字を抱えることになるのですが、カイルが関係しているかどうかは誰にも分かりません。

十五話 農業都市シール その七（後書き）

大学の課題の準備があるので、ちょっと執筆スピード落ちます。
なんだか出来も微妙でしたかね？

もうすぐシエラさん編は終わります。

十六話 農業都市シール その八（前書き）

今回長めです。話数を増やさないようにしたらボリュームがすごいことじ。

そのため、かなり雑な仕上がりかもしれませんが。違和感があったらごめんなさい。

十六話 農業都市シール その八

『転移』でユーノ邸を脱出したカイルは真つ暗な町に静かに降り立ちました。

そこはまだシールの領地内で、シエラがポズアワームをおびき寄せた広場でした。

「さて、これで僕も必要分を除けばほぼ魔力切れだな。しかし、あのオッサンたんまり貯めてやがったから、かなりの軍資金になるぞ」
「気絶したユーノたちを残して、カイルが最初に『転移』したのはユーノ邸の金庫の前でした。そこで金庫の中身を自分のマジックバツグの中に『転移』させ、ようやく外へと『転移』したのでした。有言実行です。抜け目がありません。」

「治癒系統魔法まで使わされちゃあ、仕方ないな。僕の切り札の一つだったんだが、記憶は消すし、問題ないだろ」

カイルは勇者ですが、目立たないことを第一にして行動してきました。たとえ注目される行動を起こしても、他の町に広がる前に関係者の記憶を消したりして、情報操作は徹底して行っています。

理由はシエラの二の舞を演じることを避けるためです。有名な勇者パーティーは良くも悪くも人を引きつけます。それは人間関係を煩わしく感じているカイルには、とても堪え難い苦痛に感じられるのです。

今回、カイルは『賢者』のシエラを第三者の前で圧倒し、現代では希少な古代魔法も行使できる人材だと確認されました。前者はともかく、後者の情報が漏れてしまえば、カイルに矛先の向いた面倒事は避けられないでしょう。

「あのオッサンどもにかけた『フェアウエント』を一日に設定し
として正解だったな。効果時間が短いと記憶を消す魔法用の魔力回復が間に合わないし、逆に長いとすぐに魔力が枯渇してここまで簡単に逃げられなかっただろうし」

いまだ意識を失っているシエラを抱き上げたまま、カイルは今夜の宿を探していました。

魔力切れの状態では『転移』による長距離の移動はできません。かといって足での移動をするなら日が明けてからの方が動きやすいため、どのみちカイルがシールに一泊することは変わらないのでした。

「宿っていつても、こんな農耕都市に宿屋なんて気の利いたもんがあるとは思えないな。もしものときは、僕の作品に出番が回ってくるかも……、ん？」

益体のないことを呟きつつ宿屋の看板を探していたカイルに、お目当てのものが視界に飛び込んできました。

「ちようどいい。ここに泊まるか。金ならあるし、断りやしないだろ」

自然と漏れた安堵の息を残して、カイルは『渡り鳥の羽休み亭』へ入っていきました。

「邪魔するぞ」

「いらっしゃいませ。宿泊ですね？ 何泊のご予定で……シエラさん！」

「うおっ、ビビった！ 急に大声出すなよ！」

途中までは宿屋の常套句を述べていた主人でしたが、カイルが抱えている人物が既知の少女であると知り、驚きの声を上げました。

「なんだ、シエラと知り合いか？」

「はい。二度ほどこちらで食事をなされた方で、この町に巣くっていた魔物を倒してくださった方です。昼間にこの町を出ると聞かされていたのですが」

「ああ、そういうこと。」

なに、シエラは依頼主のしつこい勧誘を受けててな、今まで屋敷で立ち往生してたんだよ。

で、シエラに『念話』で呼ばれた僕が様子を見に来たら、ギルツとかいうオッサンとドンパチやってたんでな。加勢してやったんだ

が、何発か魔法をくらって気絶しちゃったんだ。

何とかシエラを連れて脱出することに成功はしたんだけど、シエラが目覚めるまで町は出られないだろ？　そこで宿を探してたらここを見つけたんだ。

納得したか？」

ほとんども嘘で塗り固めた説明でしたが、カイルはさもそれが真実であるかのようにスラスラと二枚舌を動かしました。

「ええっ！　シエラさんの具合は大丈夫ですか？　いくらシエラさんがお強いとはいえ、ギルツ様はミュトス国内でも有数の魔法の使い手と聞いています！　そのような方の魔法を直に受ければ、ただではすまないのでしょうか？」

「いや、そこは僕が補助に回ってダメージを軽減したから大丈夫だよ。死にやしないし、今も寝てるだけだから、心配すんな」

全くのデタラメをコロツと信じた主人に苦笑しつつ、カイルは当たり障りない返事にとどめました。

「つつワケで、僕とシエラの二人で一泊な。今も明日の朝も飯はいらぬ。毒ミミズの被害はアルエで聞いているから、ロクなもん置いてないだろうしな。それで、いくらだ？」

「そんな！　この町を助けてくださったシエラさんにお金なんていだけませんよ！　とにかく、部屋まで案内しますので、彼女を休ませてあげてください！　こちらです！」

主人はバタバタと部屋の鍵をひつつかんでカイルを促しました。

あまり賢いヤツじゃないが、根は優しいんだろうな、とカイルは内心で主人を評価し、痩せ気味な背中に大人しく追従しました。

「さて、また『アレ』をやんなきゃならないのか……。シエラの願いを知っている僕としては、何回も無断するのは非常に罪悪感があるんだが、背に腹は代えられないな」

珍しく大きなため息をついたカイルはシエラにあてがわれた部屋で一人悶々としていました。

全室が空き部屋だったため、贅沢に部屋を二つとつたカイルは初めに主人に案内を受けた部屋のベッドにシエラを寝かせ、自分の部屋の鍵を受け取っていました。

当て身をくらって規則正しい呼吸音を続けるシエラを一瞥し、ため息を一つ吐きます。

「相手が幼なじみじゃないとか、せめて美人じゃなかったら躊躇いなくいけたんだけど、なあ。……ハア、ウジウジしても始まらないか。やるっきゃない」

シエラの治療という名目で主人には退室してもらっていました。この部屋にいるのはカイルとシエラだけです。

覚悟を決めたカイルは自身に残った魔力を体内で循環させ、普段滅多にしない詠唱を口遊くちあそびみしました。

「ああ、悪しき権力者の手にかかった私の半身よ。その身に宿りし束縛の術は貴女に深く浸透し、本来の貴女を苦しめている。

私は貴女の半身だ。私は貴女で、貴女は私。二つでようやく完成する。私たちは生涯不変の同義存在だ。

なれば、私は貴女の苦しみを引き受けましょう。貴女に向く悪意を呑み込みましょう。貴女に害な為すすべてを壊してみせましょう。

私は貴女のすべてを肯定するもの。貴女も、私のすべてを肯定してくださいますか？」

カイルの蚊の鳴くような小さな声での詠唱はとても芝居のセリフじみた内容で、シエラの詠唱とはかなり趣が違います。

シエラが吟遊詩人のような詩の形態をとらねばならないのに対し、カイルの詠唱は芝居口調のこっぴどくかしい内容でないとうまく効果が発動しません。

普段カイルが詠唱破棄をしている理由も分かる気がします。事実、詠唱している本人は羞恥で顔を赤らめていますし。

そして、カイルが個人的にこの魔法を使うことを躊躇する最大の理由は魔法の完了までのプロセスにありました。

「私に身を委ねなさい。貴女にかかった呪まじないは私の魔力で洗い流

してあげましょう』……悪く思うなよ、シエラ」

詠唱の最後に断りを入れたカイルはシエラの顔をのぞき込み、目にかかった前髪を指で梳くように除けました。

そして、徐々にお互いの距離を縮めていき、

「……んっ」

深く唇を重ね合わせました。

お互いの唇が触れた瞬間、シエラが軽く身じろぎしました。心なしか頬が若干赤くなっています。

シエラ以上に顔を朱に染めたカイルは雑念を無理矢理押さえ込んで、シエラに流れる生存に必要な魔力を自身の魔力と連結させ、二人で一つとなつた魔力の流れを各々の体内で循環させました。

魔力を共有した二人は魔力内に残つた魔法薬の効果も共有し、カイルにも『魅了』、『隷属』、『記憶改竄』の効果流れ込んできました。

しかし、カイルの体内に入り込んだ瞬間、魔法薬の効果はみるみる内に薄れていき、カイルの魔力の通り道を一巡してシエラの体内に戻る頃にはすっかり異物は取り除かれていました。

カイルの持つ勇者の特性はほとんどシエラの真逆をいくものでした。

シエラは自身の魔法耐性を犠牲にして、人智を越えた攻撃系魔法の行使を可能としました。

反面、カイルは攻撃系の魔法が一切使えません。保有魔力量だけならシエラといい勝負なのですが、上級はおろか下級攻撃魔法でさえ扱うことはできないのでした。

そして、カイルがそれを対価に得たのが異常なまでの魔法耐性でした。

普通魔法耐性とは、体内に影響を与えるような干渉系魔法や魔法薬の効用に対してのみ意味を成します。

しかし、カイルの魔法耐性は驚異的な干渉系の魔法に対する浄化能力に加え、攻撃系魔法にも効果が及ぶほど強力なものとなってい

ました。それにより、カイルは中級以下の魔法では傷を負うことが一切なくなりました。

その上、カイルの非攻撃系魔法は常人よりも強力で、特に『記憶改竄』などの干渉系や治癒・治療系統の魔法が優れています。カイルはこれらを多用し、戦闘を有利に進めることが多いです。

シエラが魔法界最強の矛ならば、カイルは魔法界最強の盾と言える存在なのでした。

そんな矛と盾が交わってから数分が経ちました。シエラの中にあつた毒素は九割が抜け、あと少しで完全に魔法薬の浄化が終える頃でした。

「シエラお姉ちゃん！ ケガしたって、……ほん………と………
……………」

突然部屋に小さな女の子が乱入してきました。先ほどまで寝ていたのでしょうか。パジャマ姿の女の子は髪の毛が所々はねていて、右手には枕を抱えています。

「……………」

リラの侵入によって部屋の空気が凍り付きました。シエラが使った『フリーゾスト・オーバー』なんて目じゃありません。精神的な気温が五度から六度は急降下したでしょう。

「……………へ、ヘンタイさんだ！」
「（断じて違う！）」

誤解を抱いたリラに反論したかったカイルですが、魔力浄化の魔法はまだ完全ではありません。

今ここで唇を離してしまうと、残り一割のシエラに残留した魔法薬の効果のために、カイルたちは再度キスをしなければなりません。素面じゃとてもできない行為をそう何度もしてられないカイルは、幼女の生ゴミを見るような視線を受けながら、それでも唇を離しませんでした。

「シエラお姉ちゃんから離れる！ 意識のない女の人をおそう」き

ちく』め！ お姉ちゃんの『じゅんけつ』は私が守るんだから！」
「んっ！ んっ！ んんっ！

（いてっ！ 痛い！ 蹴るな、このクソガキ！）」

リラの襲撃に耐えつつ、何とかあと少しで終わる、そうカイルが安堵しかけたときでした。

「……………んっ、……………うんん？」

カイルの真下からとても色っぽい、死へのカウントダウンが始まりました。

「（んなあ！ ここまできて何意識取り戻そうとしてんだよ！）」

耳元でリラが怒鳴り散らしていたせいでしょう。シエラの表情が曇り、重なった唇から吐息が漏れ出しました。

シエラが起きるのも時間の問題です。

「（頼む！ 起きるなあ〜！）」

太股に突き刺さる小さな足を無視して、カイルは長年連れ添ってきた幼なじみに強烈な念を送りました。お互いの精神衛生上利益になるはずだ、と『念話』でもないので伝わらない内容を考えながら、シエラとの接吻状態を維持しました。

「んんんっ、……………うん？」

しかし無情にもカイルの願いは届かず、苦悶の声を漏らしてシエラは徐々に目を開けていきました。

羞恥で上がっていた体温が急速に下がっていくのを感じながら、

カイルはシエラが目覚めていく過程をスローモーションで見届けていました。

「……………むえ？」

数瞬シエラは茫洋とした視線の動きをしていましたが、カイルの顔がゼロ距離にあるのを認識すると、間の抜けた声をカイルの口腔内で響かせました。

「（……………終わった。色んな意味で、僕は終わった……………）」

タイミング良く、もしくは悪く、魔法薬の解毒が終了したカイル

は、驚愕で一氣に目覚めてしまったシエラを眼下に眺めつつ、ゆっくりと顔を遠ざけていきました。

「……あゝ、その、なんだ、……おはよう、シエラ」

とりあえず挨拶してみたカイル。

「……………っ！ きゃあああああ！」

とりあえず、自身に起こっていた状況を認識し終えて悲鳴を上げるシエラ。

「シエラお姉ちゃんにさわるな、この『ごーかんま』め！」

とりあえず、色々ギリギリなセリフを口にしながらカイルを蹴り続けるリラ。

かくして、見事にカオスが産声を上げたのでした。

その後、シエラの悲鳴を聞いて駆けつけた主人が見たものは、ボロ雑巾のように打ち捨てられたカイルと、放心しながら窓の外を見つめるシエラと、必死に話しかけてシエラを慰めている娘の姿でした。

事情を全く理解できない主人でしたが、とりあえず床に転がったカイルだったものを回収して、静かにドアを閉めました。

踏み込んではいけない、と瞬時に悟った主人はカイルにあてがわれた部屋へと向かいました。

深夜、理不尽な反撃をくらったカイルはベッドに寝ころんで、大きなあくびを漏らしました。

「ふわあゝあ！ ……眠気はあるけど、眠れねえ」

あんなことがあれば仕方ない気はしますが、カイルは妙に目がさえてしまっていました。

考えてしまうのは、魔法薬の浄化に必要なだったキスのことです。

「今まで有効な手段がなかったから、僕の体質を利用した魔力の透析ですつとやってきたけど、そろそろ対魔法薬用の新しい魔法でも考えるか。とはいっても、魔法薬は個人の魔力に直接浸透して働き

かけるから、魔法薬と個人の魔力をどうやって分離させるかが問題だよな」

カイルの言うように、魔法薬は血液の流れで循環するものではなく、体内に流れる魔力に影響を及ぼすものです。

魔力はその人の魂であるとも言われ、生物に必要な不可欠なエネルギーです。もちろん、残存魔力量が全くのゼロになれば死に至りません。

魔法使いは自分に最低限必要な分の魔力を残して魔法を行使しています。そういう意味では、魔法使いはまさに命を削って戦う職業と言えるでしょう。

そして、魂を直に変質させる魔法薬は、一般では解浄が不可能とされるほど困難です。

一度放出された魔力ならまだしも、体内に残留している純粋な魔力に干渉し、不純物だけを抽出し除去するわけですから、まともなやり方では失敗するのがオチです。

万能とされる神の如き魔法操作能力がなければ、魔法薬の成分を外部から分離することはできません。

「透析は粘膜の交換をすることで、対象者の体内へ直接的な魔力干渉を可能にした荒技だが、それ以外となると、術者が他人の魔力を隅々まで掌握していじるか？」

非現実的だな。外部から個人の魔力を支配できたのなら、そもそも魔法薬なんて開発されなかつただろうし。

ならどうしろっていうんだよ……」

早くも暗礁に乗り上げたカイルは難しい顔をしながら、何とか理想を形にしようと模索しました。

悩み出して半時がたった頃、不意にカイルの部屋の扉が数度叩かれました。

「……………カイル？ 起きてる？ 私、シエラ、だけど」

「起きてるぞ。ちよっと待て」

こんな夜更けにどうしたのかと首を傾けつつ、カイルは扉にかけ

ていた鍵を外し、シエラを招き入れました。

「ほら、とりあえず中入れ。何か話でもあるんだろ？」

「あ、うん」

シエラは白いローブではなく、薄いピンク色の寝間着姿でした。生地が薄いのか、微妙に白い肌が透けて見えるので、とても艶めかしく映ります。

かなり大人しい様子のシエラから先ほどの一幕が頭をよぎり、カイルもシエラをまともに見れそうもありませんでした。

「で、どうした？」

「うん……」

シエラに椅子を勧めて自身はベッドに腰かけ、簡潔に質問したカイルに返ってきたのは長めの沈黙でした。

いつもは割とハキハキ喋るシエラが言葉に詰まるのは珍しいです。傍目から見たら、強姦未遂をしでかしたカイルと被害者のシエラという構図ですから、むしろ言葉が弾む方がおかしいです。

しばらく会話もなくお互い相手の顔を見て、目が合えば逸らすを繰り返していました。

「あのさ、カイル」

意を決したシエラがようやく口を開きました。

「さっきの、キス、なんだけど。あれって、さ、どんな意味があった、の？」

唇を押さえながら訥々と話すシエラの様子に、それはもう居たたまれない空気でカイルは静かに聞いていました。

「どうして意味があると思う？ 僕が本当にシエラを襲っていたかもしれないだろ？」

「カイルはちよっとズレたところがあるバカだけど、そんな最低なことをするクズじゃないから。何年幼なじみやってると思ってるの？ アンタとの付き合いは一番長いんだから、それくらい分かってるわ」

間髪入れずに返ってきた答えは柔らかな微笑を含んでいました。

少しだけいつもの調子に戻ったシエラにホツとしながら、カイルはシエラに答えました。

「確かに意味はある。が、それを話すのはシエラにとって大きな精神的負担になるだろうから、僕は言いたくない」

回答の拒否を申し出たカイルに、シエラは寂しげな弱々しい声で再度問いかけました。

「……それは、私がカイルに暴言を吐いたり、敵意をむき出しにして攻撃しちゃったことと、関係があったりするの？」

予想外の返答に、カイルは思わず気まずさも忘れてシエラを凝視しました。

「覚えているのか？ 今までのこと、全部？」

「ハッキリとは覚えてなかったけど、やっぱり、あれって夢じゃなかったんだね」

痛みに耐えるようにして俯いてしまったシエラ。そこでカイルはシエラがカマをかけたと気づき、自分の迂闊さを罵倒したくなりました。

「なんだかね、今まで何回かあったんだ。夢の中みたいに曖昧な記憶だけど、私は嫌なのに、そんなことやりたくないのに、カイルのこと『知らない』とか、『死ね』とか、そんなヒドいことばかり言ってる、魔力の抑制とか考えないで魔法を使って、カイルが倒れちゃったこともあった」

「……………」

「今でもね、時々夢に出るんだよ？ 私がカイルを殺しちゃった夢とか、知らない男の人に抱かれてる夢とか。

そんな夢を見たら、夜中でもすぐに起きるんだけど、その日はもう眠れなくて、恐くてずっと震えてた。

ただの夢なんだから、って割り切ろうとしても、妙に現実感があるって、本当に、私が、カイルを、殺そうとした、みたいで……………」

思い出しながら話しているためか、シエラの声は尻すぼみになっ
つていき、はつきりと聞こえるくらいに震えていました。

「シエラ……」

「今日のことは、夢じゃないってちゃんと自覚できてる。ユーノとギルツに薬を盛られて、自分から裸になって、紋章も見られて、助けに来てくれたカイルに消滅系統魔法まで使っちゃって。」

私、カイルのお荷物なのかな？ カイルにずっと迷惑ばかりかけて、カイルを傷つけてばかりで、カイルに頼ってばかりで。」

正直に言っつて。カイル。私は。出来損ないの魔法使いである私は本当にカイルたちと一緒にいてもいいの？」

カイルは叱られた子どものように怯えて震えているシエラを黙って見つめていました。

シエラはカイルの視線から逃れるように俯き、膝の上に置かれた手の甲に涙を滴らせました。しゃっくりを繰り返して、肩が小刻みに上下する様子はとても痛々しく映りました。

カイルはベッドから立ち上がり、むせび泣くシエラから少し距離をとりました。

窓際まで歩いたカイルはシエラに背中を向けたまま、ゆっくりと口を開けました。

「シエラが僕たちと一緒にいていいのか、か。」

本音を言えば、僕だつて分からない」

シエラは拒絶ともとれるカイルの言葉に大きく身じろぎし、ユルユルと頭を上げました。

「それは、ひつく！ 私が、必要ない、つてこと？」

涙でグシャグシャになったシエラは手のひらを力一杯握りしめました。大きな痛みに耐えるように、爪が深く食い込んで血が滲むほど、己を責めていました。

「そうじゃない。僕は、シエラが僕たちといてもいいのか、つてことで迷ってるんだ」

「ぐずっ、……どういうこと？」

曖昧なカイルの返答に戸惑いながら、シエラは続きを促しました。「今日、シエラを迎えに行ったとき、魔法を使う方のオッサンに言

われたんだよ。僕にシエラは似合わない、ってな。

隠しても無駄みたいだから言うが、シエラは何度も貴族のオツサン連中に魔法薬を盛られてきた。シエラの場合、身体に付着しただけでも致命的だからな。さっきのアレは魔法薬の浄化作業だよ。それ以外に他意はない。

話を戻すが、別に僕は魔法を使うオツサンの言うことを気にしちゃうじゃない。似合う似合わないなんて論争するだけ無駄だからな。

僕が気になったのは、シエラが勇者パーティーにいたことだ」
少し間を空けて、カイルはシエラを振り返り、続けました。

「シエラが狙われやすいのは、傭兵じゃなく勇者パーティーの一員だからじゃないのか？ 大規模の傭兵団や、フリーの傭兵でいたなら、シエラはそこまで注目を集めなかつたんじゃないのか？

シエラが貧乏クジを引く度に、ずっと考えていたことだ。僕はシエラの意見を尊重するし、やりたいようにさせたいと思ってる。僕たちといたいならいてもいいし、愛想が尽きたら抜けてもいい。

でも、シエラの安全を考えたら本当に僕たちとさせてもいいのか、分からない。

ハツキリ言うが、シエラは僕たちの中で一番弱い。シエラ力は人間の強さの限界でしかないからな。そして、僕は国の後ろ盾がない非正規の勇者だから、自然と敵も多くなる。

大切な幼なじみを危険な目に合わせたくない。でも、できれば僕はシエラと一緒にいたい。だから、どうしたらいいか、分からないんだ」

要領の得ない思考を何とか言葉にしきったカイルの目の前には、きよとんとした表情のシエラがいました。

「……なんだよ？」

「え？ その、カイル、は、私のこと、嫌いになったんじゃないの？ だって、殺されかけたんでしょ？ 私に……」

「シエラが覚えているかは知らないが、僕は魔法薬で錯乱した状態のシエラを名前で呼んだことは一度もない。

だから、僕が何度か殺されかけた相手は、僕にとってシエラじゃない。シエラに似ていて、絶対に殺しちゃいけないだけの、敵だ。シエラとは別人だと割り切ってるよ。

それに、よく喧嘩はするけど僕はシエラのことを嫌いになつたりしないさ。だって、僕たちは『二人で一人前の勇者』なんだから。」

カイルは自身が認めた、もしくは親しみを覚えている相手にしか名前を呼びません。それはカイルが定めた知人と他者の明確な区別であり、友人として、仲間として信頼している証拠でもありました。

「じゃあ！ ……じゃあ、私は、カイルの傍にいてもいいの？」

「シエラがそれを望むなら」

「また、いっぱい迷惑かけちゃうよ？」

「旅の間、シエラと僕は運命共同体だろ？ シエラの失態は僕の失態だ。自分のツケを自分で払うようなものだって、僕が勝手に思ってるだけから、気にするな」

「私に、殺されちゃうかも……」

「僕は弱くない。少なくともシエラよりは強い。簡単に殺されてやるかよ。」

付け加えると、僕は苦しむ仲間を見捨てるような冷血漢でもない。僕はしつこい性格なんだ。守ると決めたものは、たとえ本人がどれだけ嫌がっても守ってみせる」

呆気にとられたままのシエラにカイルは歩み寄り、頭の上に軽く手のひらを乗せました。同時に、無詠唱で治療魔法を発動し、シエラの手の傷を治しました。

「心配しなくても、僕からシエラを見限ることなんてしない。シエラはシエラが自由でいられる場所にいたらいいい」

小さな子どもをあやすように優しく頭を撫でたカイルに、シエラの表情は見えません。

しかし、シエラが身に纏っていた恐怖や寂寥感が和らいだのは分かりました。

「……恥ずかしいこと言わないでよ、バカ」

「そつちこそ、恥ずかしいこと言わせんな、大バカ」

小さく軽口を漏らすと、シエラはカイルに勢いよく抱きつきました。

「カイル、一つだけ、お願いしてもいい？」

「何だ？」

「今日だけ、一緒のベッドで寝ていい？ また悪い夢を見そうので、恐いの。だから、お願い」

「……………今日だけだぞ」

シエラはカイルの腕の中で、小さく首を上下させました。

カイルの部屋に規則正しい二つの呼吸音だけが響いています。一人用のベッドは布が大きく盛り上がり、二人の人物が寄り添って横になっていました。

「つたく、人の気も知らないでぐっすり眠りやがって」

隣の眠り姫を起こさない配慮をしつつ、カイルは控えめに悪態をつきます。

カイルはシエラに背中を向けて横向けに寝そべり、シエラはカイルの身体を抱き枕のようにして腕を回し、穏やかな表情で眠っていました。

「確かにガキの頃はよく添い寝してやったが、シエラには羞恥心がないのか？ 幼なじみとはいえ、僕だって立派な男だぞ？」

一つのベッドに同衾どうきんしたのがつい一時前で、カイルはその間全く眠気が訪れませんでした。

普段あまり意識したことのない女性の部分をシエラから感じてしまい、どきまぎしてしまうのが理由の一つです。

「背中に柔らかいものが当たってるし、なんかいい匂いするし、こんなんで眠れるわけないだろ。」

それに、昔から変わらない最悪の寝相が健在だと思つと、安心して眠れやしない。本当にハゲると思つたほど髪の毛を引っ張られたり、足が鳩尾に降ってきたり、色々されたからな。寝ぼけて魔法を

使ったりしないよな？」

ただ、もう一つの理由は色気も何もありませんでした。

「んみゅ〜……カイルウ〜……えへへ」

ふと、シエラがカイルの背に頬ずりしながら寝言を漏らしました。何とも呑気な声に呆れかえったカイルでしたが、その表情は穏やかでした。

「ま、たまには頼られるのも悪くないかな」

小さな微笑みを浮かべて、カイルは枕代わりにしていた腕に頭を預け、目を閉じました。

眠れるとは思っていないカイルでしたが、久しく覚えのない和やかな時間に浸れて、休息にはなったようでした。

翌朝、シエラの回した腕の圧力でカイルが絞め殺されそうになったり、シエラの暴走を阻止するために『身体強化』を使って組み敷いたところをリラに目撃されて騒がれたり、寝ぼけたシエラが精神退行気味にカイルに抱きついて場が騒然となったりと、一悶着はありました。カイルたちは無事、シールをあとにしました。

出発の前に、カイルはシエラの希望で『渡り鳥の羽休め亭』を除き、シールの住人を町ごと『記憶改竄』を行い、シエラのことを忘れさせていました。

「ねえ、『転移』を使わないの？ シールからアルエまで歩いて行くことと思ったら、結構かかるわよ？」

「さっき回復してた分のほとんどを『記憶改竄』の魔法に使ったから、魔力が足りないんだよ。」

シエラが『転移』の魔法刻印を使おうにも、僕らの内一人が転移場所の明確なイメージを思い浮かべるか、行使者が分かりやすい目標地点の目印になるものが必要だ。

けど、僕はアルエに一週間も滞在してないからイメージは難しいし、シエラは魔力知覚は鋭敏でも、魔力感知は苦手だろ？ ガデイかりーウエの魔力を、この場所から感知できるか？」

「無理ね。アンタじゃあるまいし、そんな広域を感知なんてできっこないわよ」

魔力知覚は魔力に感覚を繋げて探索する方法で、魔力感知は遠距離にある生物の魔力の気配を感じ取る方法を指します。

前者は魔力を周囲に広げる必要があるもので、効果範囲がかなり狭くなりますが、五感を広げることによって多くの情報を得られますし、訓練で鍛えることも可能です。

しかし、後者は個人差があつてある程度広範囲を察知可能なのですが、生物があのだりにいるだろう、といった曖昧なことしか分ならず、どうしても感覚的な作業になるために得手不得手はつきります。個人でやり方が違うため訓練するのも難しく、生まれ持った才能がなければ厳しい技能です。

カイルは元々魔力感知に長け、シエラは感知の弱さを補うために魔力知覚を鍛えていました。

シエラが魔法刻印で『転移』を行おうにも、転移後の座標がはっきりしないため、発動は躊躇われたのでした。

ちなみにシールへ『転移』したときは、町の出身者であるギルツが転移座標を確定していたので、カイルたちが直面している問題はありませんでした。

「もう一日だけ、我慢しろ。魔力を補充できたらすぐに飛ぶから、それまでは僕らの足でシールからなるべく離れるぞ」

「分かったわよ。ちよつとした休暇だと思つてのんびりするわ。」

「そうだ。アンタに一つ聞きたいことがあるんだけど」

「なんだ、改まつて？」

「ユーノの屋敷でアンタが言つた、私がアンタに勝てない最後の理由って、結局何？ 確かにアンタは私よりも有利なところが多いけど、絶対に勝てないわけじゃないわよ？」

「ああ、そのことか。」

魔法薬の効果に『記憶改竄』があつたら？ それでシエラは記憶を書き換えられ、少なくとも僕と過ごした記憶は消えていた。それ

が三つ目の理由だ。

僕の特異能力を忘れてしまったことで無駄な魔力を消費し、対処が遅れてしまった。加えて、シエラは『詠唱破棄』を覚えたとき、僕と一緒に修行してただろ？ 記憶が変わったことで『詠唱破棄』を会得しなかったことになり、即時対応ができなくなる。

シエラは全力で僕に挑んで始めて互角の実力になる。屋敷と保護対象の保持に加え、能力に制限までつけちまったら、いくらシエラでも僕に勝てるわけないだろ？」

「……納得したわ。アンタ相手に手加減なんて、愚かとしか言えないものね」

そのときの状況を思い浮かべて、シエラは自分の肩を抱き、背筋が寒くなるのを感じました。相手がカイルじゃなかったら、シエラは既に殺されていたかもしれせん。

「また修行しようかしら。アンタに勝てるとは思えないけど、実力の差を縮めるくらいはできるでしょうし。せめて結婚するまでは死にたくないしね」

「ま、がんばれよ。」

そうだ。死にたくないで思い出したが、シエラに試して欲しい作品があるんだ」

「かなり唐突ね。何？ また私に実験動物になれと？」

「言い方が悲観的だが、そんなところだ。今回はコレの動作確認をして欲しい」

そうして、カイルはもったいつけながら、マジックバッグから大きな箱を取り出しました。

色は全体的に白で統一されていて、縁取りなどは黒で塗装されています。縦に長い六角形をしたその箱は中心に大きな十字架が描かれており、シエラも非常に見たことがある代物でした。

「これってガディを運ぶときの棺じゃない！」

「違う！ 色合いをシエラのイメージに合わせたから、これはシエラを運ぶときの、」

「そんな状況、いくら待っても来ないわよ！ それとも何？ アンタが私を足腰立てない状態にするっての？」

断固拒否の姿勢を崩さないシエラでしたが、カイルが含みのある笑みを浮かべのを見て、とても嫌な予感がしました。

「ほう？ 反抗的だな？ 僕を殺しかけた負い目があるのに、よくそんなに強気でいられるな？」

「……………何が言いたいわけ？」

「いや、別に？ 僕の作品『死者の棺・シエラ仕様』を試してくれば、何度か殺されかけたことを水に流してやらんこともないなあ、とか思っただけだ。いやなに、あくまで強制じゃなくシエラの自由意志だから、僕からはとやかく言わないけど？」

「アンタ、本当に性格悪いわね……………」

「はて？ 一体なんのことやら？」

わざとらしく肩を竦めたカイルを思いつきり殴り飛ばしたい衝動に駆られつつ、シエラは甚だ不本意ながらカイルのおもちやにされる覚悟を固めたのでした。

後日、カイルはシエラに『死者の棺』の感想を聞いてみました。

「はあ？ 今更何聞いてきてるのよ？ 別に私の感想なんてどうでもいいでしょ？」

「ずっと気持ちよさそうに寝てた？ 私が？ そうだったかしら？ 覚えてないわね。」

「……………何よ、そのにやけた目つきは。覚えてないって言ってるでしょ。いい加減しつこいわよ、アンタ。」

「……………ああ、もう！ 分かったわよ！ 呆れるくらい快適だったわよ！ 半日目を覚まさないほど寝やすかったわよ！ 下手な宿よりも数段気持ちよく寝られたわよ！」

何よ、悪い？ ずっと文句言ってた割にくつろぎまくってた私を笑いたいの？ バカにしたけりゃバカにすればいいわよ！ 答えてあげたんだからもういいでしょ！ しばらく話しかけないで！」

思い出させたら大激怒するくらいには完成度の高いモノだったよ
うです。

ちなみにその日、カイルはしばらく不機嫌なシェラを見て含み笑
いを漏らし続け、シェラは無駄な魔力を大量に消費したようでした。

十六話 農業都市シール その八（後書き）

はい、これでシエラさん編が終了です。カイル君より長くなっちゃいました、行き当たりばったりはいつものことです。気にしないようにお互い努力しましょう。

次回以降はガディ兄さんのお話になります。キャラクターの個性が出てくるかは分からないので不安ですが、らしさを出せればいいなと思ってます。

ただ、しばらく大学の課題で手一杯になりそうなので、更新速度はがたつと落ちるかもしれません。一ヶ月以内には一度更新しますので、拙作を読んで下さっている方はしばらくお待ちください。

ではみなさん、ごきげんよう。

十七話 商業都市アルエ その三(前書き)

非常に遅れました。すみません。
今回短めです。

十七話 商業都市アルエ その三

さて、少しばかり時はさかのぼり、ギルツの依頼を受けてシエラがカイルたちと別行動をした夜が明けた日の早朝のことです。

「結局、シエラの方はしばらく時間がかかりそうだから、役割分担は白紙だな」

「それは構わないが、シエラを行かせても良かったのか？ あの男から不穏な空気を感じたが？」

「多分平気だ。いつも通り、何もなければそれでよし、何かあれば僕が何とかする。そのために僕の魔力を染み込ませた首飾りを渡してるんだ。」

万一シエラが操られて僕の探知を逃れようと魔力を隠蔽しても、僕の魔力が目印になってくれるから『転移』もすぐにできるし、シエラの魔力の異常も感知するようにしたから対処も早めに行けるしな」

カイルたちはギルドでシエラを見送ったあと、アルエにある宿『キャンプ』で一泊し、その一室で朝から今後の相談をしていました。資金調達係だったシエラが抜けたことで、新たに依頼を受けて早急にお金を稼ぐ必要がありました。それほどまでにカイルパーティの財政は逼迫ひっぱくしていたのです。

余談ですが、首飾りとはシエラも解読不能だった魔法刻印が彫られた金属片のことです。あれには魔法の式が組み込まれていたわけではなく、単にカイルの魔力を定着し、保持させる効果があるだけでした。それは『転移』魔法の目印としての効果他、限定された使い道でしか効果のないものなのですが、今は詳しい説明は省きましよう。

「仕方ない。僕は働きたくないから、今度はガデイがギルドへ向かってくれ。日帰り可能かつ安価すぎるものは避けて、かといって難度の高いヤツも避けるよ。ガデイはシエラとは違う意味でヤバいん

だからな」

「大丈夫だ。問題ない」

「……いつもそれで問題大ありなんだから不安なんだよな」

「……わたし……ふあん……」

口々に心配の声をあげるカイルとリーウエに、ガディはニヒルな笑みを浮かべました。

「心配はいらない。俺とてそう馬鹿じゃない。同じ間違いは繰り返さないさ」

「リーウエ、ガディのそのセリフ、何回目だっけ？」

「……おぼえる……むり……」

どうやら相当同じ轍を踏んだようです。

「今度は平気だ。俺に任せておけ。問題など何も無い」

根拠のない自信を浮かべるガディに、カイルは苦笑するしかありません。

「だといいいけどな。」

リーウエは僕の手伝いを頼む。ちょっと作りたいものがあるんだ」

「……いえっさ……」

ゆる～い動作での敬礼は変わらず、心なしか嬉しそうに、呆然としてリーウエは応えました。

ガディは食事をとったあと、二人と別れてギルドへと向かいました。穏やかな陽光と優しい風が肌をなぞり、朝の爽やかな空気が感じ取れます。

一方で耳に飛び込んでくるのは野太い商売人の客引き文句です。一つでも多くの商品をさばくために、道行く人に片っ端から声をかける姿は一種の狂気すら感じました。カイルたちとは違う見えない戦いが繰り広げられています。

ガディは活気のある町を、柔らかい空気を醸しつつ、顔は一切の無表情のまま歩いていました。普段からあまり表情筋が動かない仏頂面はガディの特徴です。一見無愛想でいつも機嫌が悪そうです

が、実際にイライラしている日は少なく、むしろ穏やかな気質が強い人柄でした。

「いてっ！」

「む？」

町を観察しながら歩いてきたところ、ガデイに小さな影がぶつかりました。鈍い衝撃と共に聞こえたのは子どもの声です。

ガデイが視線を下げると、しりもちをついた十歳前後の男の子がお尻を撫でながら唸っていました。男の子の隣には同じ年らしい少女が心配そうに屈んでいます。

「いつてえな！ なにすんだよ！」

立ち上がって声を荒げたのはガデイとぶつかった男の子でした。

かなりいかつい顔つきのガデイに直接文句を言えるくらいには元気なようです。勇敢なのか蛮勇なのか判別がつきにくいですが、おそらくは後者でしょう。

「お兄ちゃん、だいじょうぶ？ 痛いところない？」

隣にいた少女はどうやら男の子の妹らしく、ガデイを無視してオロオロしていました。兄想いで心配性な女の子は、衝突して赤くなつた兄のおでこお尻にせわしく視線を向けています。

よくよく観察してみますと、性別の違いはあれ、男の子と女の子の容姿は瓜二つだったので、双子だろうとガデイは推測しました。

「大丈夫じゃない！ 見てみる、ぼくたちが折角手に入れた戦利品が台無しだ！」

憤慨して男の子が指さすのは地面に落ちてグチャグチャになった何個かの果物でした。ぶつかつたときに落として踏みつぶしてしまつたたらしく、辺りに甘い匂いが漂います。

「おい！ 何とか言えよ、オッサン！」

冷静に事態を観察していたガデイは男の子の叫び声に我を取り戻し、自身の胸にも届かぬ位置で喚く少年を一瞥しました。

「……お、お兄ちゃん、もうやめなよ」

「う、うるさい！ 今さら引けないだろ」

ガデイはただ彼らをちらつと見ただけですが、客観的に見れば迫力のある睨みと言えました。

さすがにひるんだ双子は一瞬及び腰になりました。兄の方は引くに引けなくなったらしく、果敢にもガデイに立ち向かう姿勢は崩しません。

子ども二人にかなり警戒され、ガデイは無表情で困惑しつつ、誤解を解こうと口を開こうとしました。

「見つけたぞ！　そこ動くなよクソガキども！」

しかし、前方からもの凄い形相で駆け寄る男性の声に遮られてしまいました。

一見冷静そうにしているガデイですが、自分を置いてめまぐるしく変わっていく状況に、どうしたものかと途方に暮れつつありました。

「やばっ！　逃げるぞ、マヤ！」

「う、うん……」

ガデイのはるか前方から走り寄ってくる男性は商人のようでした。男の子が果物を戦利品と言っていたのは、おそらく男性のお店からちよるまかしたのでしょうか。

「ちよっ、オツサンどけよ！」

「ん？　むう……」

逃走を図ろうとした双子でしたが、ガデイのでかい身体に阻まれて進めません。

ガデイが双子の邪魔をして、というわけではなく、実際は避けようとして移動した先に双子が突っ込んできたので、妨害しているように見えるだけです。

「ちよっ、マジでどけよ！　追いつかれるだろ！」

「む……」

その後、恐ろしく息の合ったガデイと双子はお互いを避けようとして同じ方向に移動してしまいました。初対面の相手でよくある、双方がワタワタするアレです。

結局商人の男性が双子を捕まえるまで、三人は立ち往生するハメになりました。

苛立たしげに睨んでくる男の子に、ガディは何も言えませんでした。

「おら！ 捕まえたぞ、ガキどもが！ さあ！ 商品返して金を出せ！」

「はあ？ なんで金まで出さなきゃいけないんだよ！」

「人様に迷惑かけといて、ただで済むと思ってんのか！ てめえらが盗ったカコの実は一個150セノで、それが六個だから迷惑料込みで2リーウ（2000セノ）だ！」

「バカ言つな！ ぼくたちだって金があったら盗ったりしねえよ！ それに、カコの実だってこのオッサンのせいで潰れちまつたんだ！」

「……む？」

言い争いを始めた男性と少年のやりとりを黙って見守っていたガディは、いきなり話を振られてちよつと戸惑っていました。

「俺のせいかな？」

「そうだ！ オッサンが商品をダメにしたんだから、オッサンが払え！」

「俺は金さえ払ってくれば誰でもいいが、そういえばあんたは誰だ？」

「通りすがりだ。さっきその少年にぶつかってしまつてな。その時カコの実を全部落としたようだ。商品をダメにした責任の一端は俺にもあるだろう」

ガディはそう言って、懐から財布を取り出し、2リーウを商人の男性に渡しました。

「俺としては構わないが、こんな見ず知らずのガキをかばってるよっじゃ、アンタこの先苦労するぞ？」

「……自覚はある」

まだ少し怒った感じでしたが、商人はお金を受け取ると、男の子

を解放して大股で帰っていきました。

「あの、ありがとう……」

「けっ、こんなオッサンに礼なんて言うなよ、マヤ。元はといえばこのオッサンが全部悪いんじゃないか」

マヤと呼ばれた大人しい少女は頭を下げ、口の悪い兄の方は相変わらずです。

「すまなかった。謝罪する。」

俺はガデイ。旅をしている。君たちは何故盗みを？」

表情をまったく動かさないままでしたが、子どもに頭を下げてきたガデイには双子も驚いていました。

どの国でもそうですが、窃盗をするような人間の屁理屈に謝罪するようなバカは普通いません。しかも相手は子どもです。通常なら双子たちは一方的に怒鳴られて、暴力すら受けるはずのところですが、「ぼ、ぼくはニルで、こっちは妹のマヤ。親が病気になって仕事ができなくなつたから、金がなかつたんだ」

肩透かしを食らった双子の兄、ニルはごまかすことも忘れて素直に事情を説明していました。

「なるほど。だから盗みか」

「……なんだよ、悪いかよ！」

居たたまれなくなつたらしいニルはキレ気味に声を荒げました。

「いや、自分たちで何とかしようとした、その姿勢は立派だ。流石に手段は悪かつたがな」

「……怒らないの？」

今度はマヤが口を開きました。ニルはというと目を丸くしたまま固まっただけで、しばらく帰ってきそうにありません。

「俺の幼少期も、今のニルやマヤと似たようなものだったからな。色々ギリギリだった。気持ちはある程度理解できる」

神妙な顔で腕組みをし、うんうん頷くガデイを四つの瞳がぼかんとして見上げていました。

「そうだ。ニルたちの親だが、病気と言っていたな？ 大丈夫なの

か？」

「え？ ……いや、ぼくたちはもともと金持ちじゃなかったから、医者に診せてないんだ。だから、どれだけヤバいのか分からないだ」

「そうか。では、行こうか」

「どこへ？」

「ニルたちの家だ。俺は魔法は使えんが、その分医学の知識と薬草は充分ため込んである。俺の手持ちで何とかできるかもしれないからな」

当事者を置いてけぼりにして話をどんどん進めていくガデイ。

基本的にいい人なのですが、あまり人の話を聞かないまま突っ走る行動が多かつたりします。そのため、カイルから『タチの悪い頑固者』と揶揄されることもあります。

「どうした？ 行かないのか？」

「……わたしたちが嘔吐いた、って思わないの？」

「嘘だったのか？」

「うっん、本当だけど……」

「なら問題ない。案内してくれ」

質問したマヤはもちろん、ニルも混乱の極みにありました。

初対面の自称旅人が彼らの言い分を信じたばかりか、見ず知らずの他人のために貴重な薬草をさらっと分けようとしているのです。

ニルはガデイを警戒しながらも、自宅に案内することにしました。放っておいたら勝手に尾行してきそうなくらい本気の目をしていため、知らない内に乗り込まれるよりはマシと判断したようです。

猜疑心でいっぱいの子とは対照的に、ガデイは傍目からは分かりづらい思い詰めた表情をしていました。

（これだけ活気のある町でも、光と影はあるということか。本当の平和が訪れる日はくるのか？）

資金稼ぎという本来の目的も忘れて、何だか壮大なことを考えているようでした。

ガディも、カイルとは違う意味でおバカなのです。

十七話 商業都市アルエ その三（後書き）

私の知り合いにこの作品を見せたところ、地の文が敬語で気持ち悪い、と一蹴されてしまいました。

しかし、私は文体を変える気はありません。あくまでこの作品はこんななんです。それを考慮して下さいと助かります。

感想やら批評やらがありましたら、書いていただけると嬉しいです。誤字脱字もありましたら教えて下さると助かります。

更新スピードはなるべくあげますが、遅延は避けられないかもです。

十八話 商業都市アルエ その四（前書き）

更新遅れました。
短めです。

十八話 商業都市アルエ その四

ニルとマヤに案内されて、ガデイはとある一軒家に到着しました。移動中、三人は終始無言だったため、流れる空気は重いものです。

「ここだ。気が済んだらさっさと帰れよ」

「承知している」

警戒心むき出しのニルを気にすることなく、ガデイは玄関をくぐりました。

屋内はどこも殺風景でした。必要最低限の家具しか残されておらず、野盗に荒らされたような有様です。

「家の物を売って生活していたのか？」

「うん。お父さんがそうしなさい、って」

「病気なのは父親か。母親は？」

「わたしたちが小さいときに、病気で死んじゃったから、いないよ」
「そうか」

マヤがガデイの端的な質問に答え、父親の寝室まで案内しました。物はなくともそこまで広くない部屋に、一人の男性が横たわっていました。呼吸は荒く、衰弱しているのは誰の目にも明らかです。

商人にしては体つきがガツシリしていて、傍らには使い込まれた戦斧が置かれています。どうやら、ニルたちの父親は傭兵のようでした。

「お父さん、お医者さん、だと思っ人が具合をみたいって」

マヤが床に伏せる父親に話しかけると、緩慢な動作で三人を仰ぎました。

「はあ、はあ、帰ってもらえ。うちに、医者に診てもらっ余裕はない。はあ、はあ、そうだ、ニル、もう売る物がないだろう？ この斧を売れ。少しは、足しになるだろう」

口から出たのは診察の拒絶と、あくまでも双子の生活を心配したものでした。

しかし、父親の言葉にニルは劇的な反応を示しました。

「なに言ってるんだよオヤジ！ そいつは俺の相棒だって、ずっとぼくに自慢してたじゃねえか！ そんな大事なものに手を出すわけにはいかねえよ！」

店の商品に手を出しておいて言えたセリフとは思えません。それだけ父親を大切に想っていることなのでしょうが。

「確かに、コイツは、何度も俺を助けてくれた、大事な相棒だが、ニルとマヤのためなら、コイツも、そこまで怒らないだろうよ。ニルには、重すぎるだろうから、俺の懇意にしている、武器屋のオヤジを呼べば、そこそこの値で、売れるはずだ。いいな？」

「オヤジ……」

「お父さん……」

父親の言葉に、ニルもマヤも何も言えなくなりました。彼にとつてこの武器は己の命を預けてきた、言わば大事な半身のような存在でした。それを手放すと決心できるくらい、ニルとマヤは彼のかけがえのない存在なのでしょう。

「貴方とこの子たちの事情は承知している。しかし、これは俺の信念のようなものだ。金を請求する気はない。診させてくれ」

素晴らしい家族愛が展開されましたが、空気を読まずにガディは強引に男性の近くに腰を下ろしました。

我が道を行くガディに、遠慮なんて言葉はありません。

「なっ、おい、アンタ！」

「じつとしている」

ガディはまず男性の額に手を当て、手首に指を添えて脈を計りました。

そのあと、男性の上着を脱がして触診を始めました。上半身を一通り確認し、まぶたを広げたり、口を開けさせて喉を見たり、割としっかりした診察をしていきました。

最初は不安そうだったニルとマヤも、ガディの手慣れた様子から少しは安心したのでしょう。特に茶々を入れるでもなく、大人しく

していました。

「いくつか質問がある。正直に答えてくれ」

「……わかった」

途中から成すがままだった男性は、どこか諦めたようにガデイの問診に答えていきました。

「症状はいつからだ？」

「一カ月前だ。依頼を終えたあと、すぐに倒れた」

「依頼内容と訪れた場所は？」

「ウルフの変種討伐だ。ランクはC。場所は、ここから人の足で歩いて、四半日（約六時間）のところにある森で、道中魔物の襲撃はなかった」

「変種のウルフについて、思い出せる範囲で話してくれ」

「数は一頭。どうやら、虫の魔物か何かに先祖帰りしたらしい。身体に至る所から、昆虫のような足が生えていた。強さは、普通のウルフと変わらなかった。すぐに倒せたんだが、返り血を浴びて、少しめまいを覚えたな。そのあとは、血を拭って、日が暮れた頃に帰った」

「それだな」

ガデイはマジックバッグからすり鉢とすりこぎを取り出し、迷いなく数種類の薬草を取り出しました。

「それだって、なんだよ、原因が分かったのか？」

あまりに説明のないガデイに、しびれを切らしたニルが詰め寄ってきました。

「おそらく、原因はパラサイトの毒だ」

「パラサイト？　なんだ、それ？　オヤジ、知ってるか？」

「……いや、初めて聞く名だ」

戸惑いの表情を浮かべる一家に、ガデイは作業の手を休めずにあくまで淡々と説明しました。

「パラサイトは魔物の名前だ。この国ではまだ見たことはないが、ここより南方の国では比較的多く遭遇する。」

森に生息していて本体は小さな虫だが、他の生物に寄生して襲いかかってくる。寄生された生物の体内で成長し、本体の一部が表皮を突き破ってくれば、どのような生物であれ、パラサイトと指定される。

戦闘力は完全に寄生した生物に依存するから、脅威度はピンからキリまである」

「そいつが毒を持つてるのか？」

「いや、パラサイト自体に毒はない。実際は寄生した生物に毒が回る。

パラサイトは栄養を得るため、手当たり次第に動植物を寄生体に取り込ませる。毒があろうとお構いなしにな。そうすることで寄生体の体内で毒素が充満し、存在が毒袋になる例が多い。

血液を浴びただけでも皮膚から毒素が侵入し、体をむしばむ。今回はそれだな。毒が全身に回るまでに時間がかかったのは血液の付着、間接接触が感染手段だったからだろう」

「じゃあ、パラサイトの毒ってなにか分からないんじゃないの？」

「生息地と症状である程度毒の予測はできる。

今回は森。ミユトスは気候が安定して暖かい。そしてマヤたちの父親殿は高熱に発疹、軽度のけいれんに神経の麻痺、心拍の荒さが見られた。

これらの症状を引き出す毒を持つのは、環境から考えてシダラマというキノコか、ミュニユルという毒草の二つ。

あと数日放置していたら、おそらく死んでいた。今はどちらの毒にも効くように調合をしている」

ゴリゴリと薬草をすりつぶしながら、ガディはニルとマヤの疑問に答えました。

「あんだ、一体なにもんだ？」

ふと、そんな疑問を漏らしたのは父親でした。

「どこから見ても、医者には見えない。俺と同じ、前衛の戦士だろ？　しかも、荷物が少なすぎるから、パーティーに所属しているは

ずだ。普通、医療の知識は、後衛の魔法使い職が覚える。なのに、何故、そんなことがわかる？」

「必要に迫られる時が多かった。それと、何もしないのが嫌だった。だから学んだ。それだけだ」

あまり答えになつてない答えを返し、ガデイは煎じた薬草を紙の上に移し、マジックバッグから新たに紫色の液体を取り出しました。「オッサン、なんだ、それ？」

「毒の中和をする薬草とは別の、免疫力や自然回復力を上げる薬だ。完治速度が異様に高まる。強烈な苦みと刺激臭がたまにきずだが、副作用もなく効果は絶大だ」

ガデイの言葉通り、紫色の液体を取り出した途端に部屋中に形容しがたい臭いが充満しました。色んな動物の死体を腐らせてグチャグチャに混ぜたような、およそ口から摂取するものの臭いではありません。

ニルとマヤはしかめ面で鼻を押さえ、父親の表情も毒とは違う苦しみに歪んでいました。平気そうなのはガデイだけです。

「ま、待て。それを、飲ませる気か？」

「本来はさつき煎じた薬草を数ヶ月に渡って処方、長期的な薬物治療をするが、俺はこの町に長くは居ない。手っ取り早く治すにはこの激マズポーションを飲んでもらうしかない」

「激マズとか言うな！ 決心が揺らぐ！」

「事実だ。それにあまり大きな声を出すな。無駄に体力を消費するだけだぞ」

「誰が叫ばせてると思ってるんだ！」

「さあな。それより、身体を起こすぞ。力を抜け」

「い、いや、ちょっと待ってくれ。せめて覚悟を決めさせてくれ」

「毒は待ってられない。行くぞ」

「おい、ヤメ、くさっ！ ～～～～！」

押し問答の末、ガデイが力づくでポーションを父親の口の中にぶち込むことで決着しました。父親は声にならない叫びを上げ、手足

を大きくけいれんさせながら激マズポーションを嚥下していきま
した。

「次はコレを飲め。苦みは強いが、さっきのポーションよりは何倍
もマシなはずだ」

「おい、オッサン！ オヤジの意識ないんじゃないか？」

気の毒な父親の姿を見守っていたニルが指す先。白目をむいて口
を半開きにした哀れな父の姿がありました。

これだけ見ればガディがとどめを刺したようにも見えます。

「あのポーションを初めて飲めば誰でもあなる。不覚にも、俺も
一度こうなつた。脈はしっかりしてるし、呼吸も止まっていない。

死にはしないから安心しろ」

「いや、見た感じ明らかにダメだろ！」

「良薬は口に苦し、とも言う。それが顕著だっただけだ」

「苦いっつっても限度があるわ！」

「お父さん！ しっかりしてえ〜！ 死んじやだよ〜！」

ニルが正当な理由で突っ込みを入れている間に、ガディは律儀に
返しながらも傭兵に薬草を無理やり飲ませていました。

見た目毒に当たったような、惨めな姿になってしまった父親に焦
るニルと、すがりついて泣き出してしまったマヤ。

「今日中には目を覚ますはずだ。それまで看病する。ニルとマヤも
手伝ってくれ」

「オッサン！ 本当に大丈夫なんだろうな！」

「心配しすぎだ。俺を信じろ」

「今日会ったばかりのヤツをどう信じればいいんだよ！」

「……………それは盲点だった」

自分の判断は、いや、この旅人に会ったことすら間違いだつた
かもしれない。

ニルは頭を抱えながら、どこか間抜けな男に白い目を向けていま
した。

十八話 商業都市アルエ その四（後書き）

課題は何とか一段落ついたのですが、久しぶりに小説を書いたら文体が違ってたかもしれませぬ。

ややスランプ気味ですし、遅筆は勘弁して下さい。

スランプとは言っても、私に執筆の才能はあまりないんですけど。

十九話 商業都市アルエ その五（前書き）

早めに投稿できました。
グダグダ回です。

十九話 商業都市アルエ その五

傭兵の意識がなくなつてから、ほぼ半日が経過しました。

すでに日は落ち、騒がしさは相変わらずですが町はほとんどが闇に包まれています。

道ばたには店じまいをしていない数軒の出店の先に、ぼんやりと灯るランプの光が揺れるのみで、徐々に町が眠りに落ちていつている様子がうかがえます。

ガデイはその間付きつきりで傭兵の容態を見ていました。

最後のとどめを刺したようにしか見えなかったため、ニルとマヤから突き刺さる視線を受けつつ、熱くなつた布を傭兵の額から除いて水で濡らした布を乗せました。

（む、熱は大分下がってきたか。だとしたら、そろそろ目が覚めるはずだ）

布を交換したあと、手の感覚で大まかな体温を測つたガデイは少しだけ安堵の息を漏らしました。

この時間まで終始無表情でいたガデイでしたが、双子からの咎めるような視線を気にしていないわけではありませんでした。

あれから一言も話をしておらず、交わされる会話は必要最小限のものだけです。

食事はガデイが持っていた保存食で済ませましたが、ニルとマヤは受け取って礼は言うものの、気安く話しかけられる雰囲気ではありませんでした。

完全に警戒されてしまったようです。

（何故だ？ ちゃんと薬の効果もはっきり明示しておいたし、効果もあらかじめ説明したはず。なのに何故、以前と同じ状態になつているんだ？）

ガデイのお節介は今に始まつたことではありません。

カイルたちと旅を始めてからというものの、ガデイは行く先々で

その土地の住人にちよつかいをかけ続けてきました。

今回のように病人を勝手に治療するのも十や二十じゃ足りない数をこなしてきています。

最終的に感謝はされるのですが、ガデイの口下手が災いして、患者が見た目瀕死寸前の状態に陥ることもザラにあります。

そうなたら患者の家族からは怒鳴られたり、ののしられたりはもちろんのこと、攻撃されることもしばしばありました。

ガデイはそれを自身の説明不足のせいだと思いました。

実際はガデイが患者や家族の意見に聞く耳を持たず、あまりにも強引に治療を進めようとする自重のなさが主な原因なのでした。

ガデイがその事実気づく日は来るのでしょうか？

いや、きっと来ないでしょうね。

「……う、うう？」

ガデイが内心で首を傾げていると、傭兵の口からうめくような声が漏れ出てきました。どうやら意識を取り戻したようです。

「オヤジ？」

「お父さん？」

心配そうに父親の顔をのぞき込むニルとマヤ。

傭兵は我が子の顔をぼんやりと眺め、すぐに体の違和感に気づきました。

「……ニル、マヤ、心配かけたな。俺はもう大丈夫みたいだ」

まるで鉛のように重く、鈍かった傭兵の肉体は本人が驚くくらいとても軽く感じられ、毒の症状もほとんど消えていました。

飲食店から出た残飯のようなものを摂取したかいたったようです。

「オヤジ！ 本当にもう大丈夫なのか？ どこかきついとか、調子がおかしいとか、そんなのはないか？」

「今のところ、特に体に不調はない。あの紫色の液体を飲んだときはさすがに死を覚悟したが、どうやらそれが功を奏したらしい。この調子なら、明日からでもギルドに顔を出せそうだ」

「……お父さん！」

「オヤジい！」

やせ我慢した様子はなく、父親の体調が万全になったのを納得できた双子は感極まって傭兵に抱きつきました。

少し涙混じりの声だったのはご愛敬です。

「具合は良さそうだな。毒を浴びる前と比べて、何か変わったところはあるか？」

しばらく親子が抱き合うシーンを見守っていたガデイは、ひと段落ついたと思われたときに傭兵に確認をとりました。

いくらガデイが空気を読まないといっても、余りに無粋なまねはしません。

……多分ですけど。

「おかげさまで、完全に治ったようだ。特に違和感も感じない。あえていうなら、随分長い間寝たきりだったせいで、体がなまりきっているのが気になるくらいだな。早く体を動かしたくてウズウズしている」

「それは重畳^{じゅうじょう}。しかし、今は薬が症状を抑えているだけで、本当に完治したわけじゃない。最低でも七日、長くて十日は大人しくしておけ。軽い鍛錬くらいなら二日後からなら始めても構わない。明日は念のため経過を見る。暇だろうが、寝ていてもらおう」

「そうなのか？ 仕方ない、またあんな不味いものを飲まされてもかなわないからな。あんたの指示に従うよ」

「とても言いづらいが、明日もあの薬を飲んでもらう。流石に一度で回復するほど、あのポーションも万能じゃないからな」

「……そうか。また、アレを飲むのか」

傭兵は遠い目をして呟くように漏らしました。とりあえず、想像以上の味だったのは確実です。

「安心しろ。その一回で終わる。服薬期間を大幅に短縮できるんだ。我慢してもらおう他ない。貴方もこの子たちに貧しい思いをさせたくないだろう？」

「そうだな。わかってるよ。早く復帰して、心配させたお詫びにいい物食わせてやらないとな」

傭兵はゴツゴツとした顔つきにそぐわない微笑みを浮かべ、ニルとマヤの頭を不器用になでました。

「オッサン。一時は本当にどうなることかと思っただけど、オッサンのおかげでオヤジが元気になった。だから、ありがとう」

「ありがとう、おじさん！」

父親にしがみついたままで、ニルとマヤは交互にガディに礼を述べました。ニルはやや照れ気味に、マヤは嬉しさを隠すことなく感謝の言葉を向けました。

「気にするな。俺が勝手にやったことだ」

表情筋が動かないままガディの言葉に、ニルたちは苦笑いを浮かべるにとどまりました。否定する要素がどこにも見あたらなかったためでしょう。

人の話を聞かない強引さがなければ素直に喜べるのに、とガディを除いた誰もが心の内で思っていたのでした。

「さてガディ、言い訳は聞いてやろう。今まで何してた？」

「ぬ……」

ニルとマヤに見送られて宿屋へと帰還したガディを待ち受けていたのは、パーティー随一の金食い虫で自由人のカイルでした。

有無を言わず正座をさせられ、威圧的に詰問してくるカイル。

ガディはあまりの迫力に、すぐに二の句が継げられないでいました。

年齢的にはガディが年上なのですが、カイルパーティーでは実力至上主義のため、一番偉いのはリーダーでもあるカイルになります。意欲的な労働者がまともに働かない人間に説教をくらっています。世の中は理不尽なことで溢れていますね。

彼らの姿がいい例でしょう。

「何だ、そんなに難しかったか？ なら質問を変えようか。俺はガ

「デイに何を頼んでいたか、覚えてるか？」

カイルの表情はとて面白い笑顔です。

邪気なんてひと欠片も見えない様子ですが、ガデイはカイルの笑顔を表面的に捉えることなどできませんでした。

何せ、カイルの背後には確かな修羅が覗いていたのですから。

「資金調達に、ギルドへ向かえ、と頼まれた」

「うん、そうだったな。」

「じゃあ質問を戻そうか。で？　今までどこで何してた？」

「……………」

無言でいると、カイルの苛立ち具合が上昇したのを感じました。

「ここに住む男の治療をしていた」

意を決して真実を打ち明けたガデイ。

無表情はそのままに、声音は普段より若干小さくなっていました。

カイルの額に青筋が一本浮かびました。

「ほう？　僕たちのパーティーが金欠だって言うのに、また、高価な薬品を無償でやってきたと？　そういうつもりか？」

カイルが言うように、薬草は基本的に高価な代物です。

魔物が徘徊する森の奥地や、洞窟の限られた場所と言った特殊な地形に生えていることが多いため、自然と価値が跳ね上がるのです。

さらに困ったことに、薬草を採集する条件の難易度が高いほど効果も高くなるので、より効き目のある薬を得ようと思ったたらかなり難所を越えなければならなかったりします。

一級品の薬草を調達しようと思えば、勇者に匹敵するほど上位の傭兵を雇うこともしばしばあるくらいです。

今回ガデイが使った薬草はすべて自前で採ってきたり、自腹で購入した物です。

毒の治療に使った薬草は品質的に言えば中の上くらいで、驚くほど高いということはありません。

ただ、問題はあの激マズポーションでした。

「単なる毒消しの薬草だけならまだいい。あんなもんはいつでも採

れるしな。

だが、ガデイのことだから僕らの都合も加味して超回復ポーションも使ったんだろ？ アレに使った材料は十数種類の薬草に、数種類の魔物の体液なのは知ってるな？ そして、片手間で採ったとはいえ、それらの材料の一つ一つがおそろしく高価なものも知ってるよな？」

超回復ポーションとは察しの通り、ガデイが無理やり飲ませていた激マズポーションのことです。

腐臭といってもいい刺激臭と舌を抉り取るような苦みと不味さが特徴の超回復ポーションは、フタを開ければ超高級素材の目白押しだったりします。

耐性が弱ければ即死するおそれもある、絶叫で有名な魔物のマンドラゴラの足やら、魔物だけでなく複数の精霊が守護する精霊樹の雫やら、あらゆる毒に耐性を持つポイズドラゴンの血液やらが調合に使われています。どれもAクラス以上の素材ですので、一つ売れば半年は遊んで暮らせる額を稼げる物ばかりです。

ガデイとカイルの共同研究で生まれ、市場に出回っていないことに加え、どこの国からも認可を受けていないので法律上では違法薬品に指定されています。

しかし、効果はどの市販された薬品よりも高いのです。薬草類の効き目を増幅させるだけでなく、それ単体でも外傷の自然治癒速度が上昇し、疲労や血行の改善に筋肉の凝りと、さらには便通までよくしてくれる優れ物です。

聞くだけでは微妙な効果ばかりに思われますが、一つの薬品で複数の効用があるものは非常に珍しく、何度でも言いますが高価です。とてもじゃありませんが、無償でポンと出していい代物ではありません。

「俺は俺の信念に基づいて行動しただけだ。悔いはない」

「ガデイがなくても僕がいつつ後悔するんだよ！ 確かにガデイの個人財産だから僕が口出しするのは筋違いだ！」

「が！ しかしだ！ もつたいなさすぎるだろ！ せめて少しでも金にしるよ！」

カイルたちは勇者用依頼や道中で狩った魔物を換金したとき、個人配当とパーティー資金に分配します。パーティー資金に半分、残り半分を四等分するのが普通です。

基本的に各々の所持品は個人財産に当たり、カイルたちは極力相互干渉を避けています。使い道を言及したり、パーティー資金が尽きたからと言って接收したりはしません。例外として、主にカイルへの、お金の貸し借りはありますが。

よって、超回復ポーションはガデイの所有物ということになります。どう使おうが本人の勝手と決めたのはカイルですが、ガデイの使い道にはまだ納得がいつていないようです。

「いや、この議論はすでに僕が引くことで決着は着いている。それはいい。」

「ただどな、それでギルドへ行かなかつた理由にはなんねえだろ！パーティー用の資金がねえって何回言わせる気だ！」

「しかし、カイルがちよくちよく賭博用の軍資金だとして持ち出すのが資金の枯渇した原因であつて、俺たちはむしろ被害者なのだが？」

「あー！ あー！ 聞こえない！ 僕はなぐんにも聞こえない！」
両耳を押さえながらガデイから顔を逸らすカイル。散々説教をしていたカイルがそもそもその原因だったのですが、ずっとガデイに責任転嫁をしていたことから、カイルのわがままさや身勝手さがよく分かります。

「いつの間にか形勢が逆転していますが、いつものことなので誰も気にしません。被害を受けていたガデイも軽く肩を竦めるだけです。」
「とにかく！ 明日は絶対に依頼をして来いよ！ 金がないのは変わらない事実なんだからな！」

「分かっている。心配するな」

「昨晚も聞いたわ、そのセリフ！」

無自覚でボケるガディに力強く突っ込むカイル。
今日も彼らは平和でした。

「そういえば、リーウエの姿が見えないが、どうかしたのか？」

「リーウエか？ 僕が作った作品の手伝いをして、途中で不機嫌になつてふて寝してるぞ？」

「何かしたのか？」

「いや、僕が作ってるのがシエラ用の棺桶だつて言ったら、急にぶすつとなつちまっただ。それまで興味津々にしてたつてのに、毎度のことながらリーウエの考えることはよく分かん。一応完成したぞ？」

「……………そうか」

思い当たることがないわけではないガディでしたが、結局カイルには言わないことにしたようです。

リーウエに同情の念を送ったガディは疑問符を浮かべたままのカイルを一瞥し、軽いため息をついたのでした。

十九話 商業都市アルエ その五（後書き）

薬草やらの個体名が出ていませんが、単純に決めていないだけだ
ったりします。

そろそろ細かい設定を決めておいたほうがいいかもしれません。

二十話 商業都市アルエ その六（前書き）

遅れてすみません。課題やテストに追われていたらかなり時間がかかっちゃいました。

ただ、学校の前期テストはまだなので、更新は遅いままだと思います。

二十話 商業都市アルエ その六

次の日、ガデイは朝早くに目を覚まし、さつさと朝食をとってから昨日の傭兵の家へ向かいました。治療の経過を見るためです。

簡単に診察を済ませ、超回復ポーション抜きで薬草を渡し、今度こそギルドの方へ向かいました。あれだけ釘を刺されたのですから、行かないわけにはいきません。

シエラに一度呼び出された経験もあって、ギルドへは迷わず、寄り道もせずに到着できました。

ギルドへ足を踏み入れた瞬間、いくつもの視線がガデイに集まりました。そして、皆一様に怪訝そうな表情を浮かべました。

戦いを生業とする者達の集うギルドで、全身鎧姿はさして珍しくないのですが、ガデイが注目を集めるのはやはり腰にさげた貧相な木剣です。

ガデイのような実力者は装備をおろそかにはしません。なるべく高品質で頑丈な物を求め、自分の手になじむ物を試行錯誤し、命を預ける相棒を決めています。

ですが、いくらなんでも金属すら使用されていない木剣を吊すような者はいません。木剣はあくまで鍛錬用の模造剣であり、そもそも戦闘に耐えうる代物ではありません。

ゆえに、主要武装を木剣にしているガデイは違和感の塊であり、実力者うんぬん以前の問題で周囲から浮いていたのでした。

ギルド内にいたほぼすべての人間から向けられる、疑念と奇異とわずかな嘲りの視線をもとせず、ガデイは勇者パーティーの依頼受注窓口に足を運びました。

「依頼を受けたい。リストを見せてくれ」

「かしこまりました。こちらをどうぞ」

額に浮かぶ紫色をしたカイルの紋章を提示して、ガデイは受付嬢から紙の束を受け取りました。

「高すぎず安すぎず、難易度も比較的低い近場の依頼、だったな」
椅子に腰掛け、勇者用依頼のリストに目を通しながら、しばらくガディはページをめくる動作を繰り返しました。

魔物討伐関係での依頼は尽きることはありませんが、条件を絞ってしまつと選択できる依頼は激減します。

証拠に、ガディが隅々までリストを調べたところ、受注しても問題がなさそうな依頼は数件しか残りませんでした。

「む、背に腹は代えられない」

眉間にしわを作つてつぶやき、ガディはアル工から南東に約四十キロ（キロメートルと同義）離れたところの村と隣接するウルフの森で出没するという、フォレウルフの殲滅を選びました。

フォレウルフとは活動範囲を森かその周辺に限定された、全長一メートル二メートルの狼の魔物です。攻撃手段は単純で噛みつきや体当たり、爪でのひつかき程度で毒も持ちませんし、魔法を使うほどの知能もありません。

単独での討伐推奨ランクはあまり高くないのですが、群れで行動する魔物のため、集団の規模によってランクが変動します。今回は勇者用に設定された依頼のためか、かなり大規模な群れらしくランクは高めです。

ギルドではパーティーでの受注を推奨していましたが、一般の勇者パーティーであれば単独でも討伐可能な依頼です。そのため、報酬の質が低くなるのは仕方ありません。決して低くはありませんが、今後のことを考えると決して満足のいく額ではありません。

「数をこなせば問題ない、か？　ひとまず、この仕事を終わらせるとうしよう」

受付でフォレウルフの依頼を受注し、討伐証明部位を保管するキューブを受け取って、ガディはギルドを後にしました。

町中で買い物なども特にせず、約一時間でガディは依頼場所に到着しました。

「やっと着いたか。さつさと済ませるとしよう」

休みもなく鎧姿で常に全力疾走で来たにも関わらず、ガデイの息に乱れはありませんし、汗すら一筋も流していませんでした。

道中で襲いかかってきた魔物もいたのですが、大した障害にはなっていないようです。

多数の戦闘をこなした割に、損傷の見られない木剣を腰にさげ、ガデイは休憩もとらずにウルフの森へと入っていきました。

まだ昼前の時間帯ですが、鬱蒼と茂る木々に日光が阻まれ、暗い影が森全体に落ちています。時折揺れる木々のざわめく音はガデイの侵入を知らせ、かつ拒むように全体へと広がっていきます。

それは森が持ちうる明確な意思か、森に住まう生き物たちの総意か、ガデイには判断できませんでした。

そして、ガデイの肌をピリピリと刺激する不可視の圧力はダンジョンに入った証拠です。ウルフの森はダンジョンに変質した土地のようです。

魔物とは関係のない虫や木の枝等を木剣で払いながら、ガデイは獣道をどんどん進んでいきます。まるでそちらに行けば討伐対象がいると確信しているような、淀みのない足取りでした。

「……いたな」

森に足を踏み入れてから半時間が経過した頃でしょうか。

木々のざわめきに紛れてしまうほど小さな声でつぶやき、ガデイは遠くに集まる獣の群れを確認しました。

茶色から黒色の体毛を持つ、犬よりも大きな体躯のフォレウルフたちはしきりに周囲を警戒しています。ガデイが風下側で距離があり、まだフォレウルフたちがガデイに気づいた様子はありません。数は十五体でした。

「斥候にしては数が多い。それに狩りをするにしても、自身が支配する森であそこまで密集する意味はないはずだが」

フォレウルフの群れの規模は平均的に三十〜四十程度です。それはほとんど戦闘に参加しない子供のフォレウルフも含まれた数にな

ります。そのうち、狩りや戦闘をする成体のフォレウルフは十体くらいで、何らかの異常を察知して、偵察役をするのは一体か二体が普通です。

森の名前からフォレウルフが支配する森らしいので、群れの規模にもよりますが、それでも十五体もの哨戒がいるのは異様でした。

「群れの数が多いことを利用して、偵察に多数配置していると考えるのが自然か。しかし、警戒度合いをほぼ最大にまで引き上げねばならない相手が縄張りに侵入したから、とも考えられる。とすると、森に入った俺の気配に気づいたのか？」

この森に住む魔物がフォレウルフのみであれば個体数が増え、偵察の過剰戦力にも領けます。が、そうであれば魔物であるフォレウルフがこの森の食物連鎖の頂点に位置するはずです。安全な狩り場を搜索するのに、貴重な戦力を一カ所にひと固まりにさせておくなど、知能が低く本能で動く魔物であっても滅多にしないことです。

フォレウルフたちが騒ぐ程の森の異常といえば、ガデイがいることくらいしかありません。

「だが、俺にとってはどうでもいい。どうせ、やることに変わりはない」

無表情で強面の顔が目元を引き絞ることさらに迫力を増し、ガデイは腰にさした木剣の柄に手を伸ばしました。心なしか周囲の空気までもが歪み、ガデイの体全体を包み込むようにたゆたっています。

ゆっくりと膝を曲げて力をためた瞬間、弓で射った矢と変わらぬ速度でガデイはフォレウルフたちの前へと姿を現しました。

「！ ヴォウ！」

鼻をひくつかせ、おそらくニオイでガデイの接近を知ったフォレウルフの一体が、仲間への警告のような吠え声をあげました。

ですが、ガデイは臨戦態勢になるフォレウルフを歯牙にもかけず、一番距離の近い相手に接敵し、右手に握られた木剣で一体の首を切断しました。

「ヴアウ！」

一瞬で仲間を殺されたことを悟り、怒りからか小隊長らしき一体が吠えると、四体同時にフォレウルフがガディに飛びかかりました。しかし、ガディはそれらを一瞥もせず、わずかな動作だけで避けていき、前方のフォレウルフに視線を向けました。

「残り十体」

ボソツ、とつぶやいたガディの言葉が漏れた刹那、奇襲で斬殺した一体と同じ切り口の首なし死体が四つ、ガディの背後で倒れました。

四体のフォレウルフたちを避け様にガディが振るったのは、右手の木剣と左手で作ったの手刀です。あり得ない二刀流を用い、一度に四体もの魔物をほふったガディに感情の揺らぎは見られませんでした。

「ヴウヴウ！」

さすがに実力差に気づいたフォレウルフたちは喉を鳴らしてガディを威嚇するも、無謀な特攻はしてきません。

「時間をかける気はない。早々に終わらせるぞ」

ガディは言葉を解さない魔物たちに静かに告げると、今度はほとんど予備動作もなく大地を駆けました。そして、進行方向にいた三体のフォレウルフを同様に殺害し、残りのフォレウルフたちに撤退の思考を与える間もなく、すべての狼の首をはねました。

刃の存在しないただの木剣でフォレウルフを斬殺したガディですが、自身のりよ力と速度で切断したわけではありません。

ガディは魔力とは異なる力で、「気」という技術を使っています。

気は生物の持つ生命力とも、物質に干渉できる概念的エネルギーともいわれ、魔力を用いた「身体強化」のルーツになった技術で、修得の厳しさから現在使い手はほとんどいません。

魔力とはまた別の回路を開くことが必要で、鋭い感性と才能がなければ気を感じることもすらできません。

しかし、自発的に気を感じることはできなくても、あらゆる生物は気配という形で気を発しています。ガデイが森に入ってから真っ直ぐ標的まで進んでくれたのは、フォレウルフたちの気配を感じ取っていたからこそでした。

気は体にまとうことで「身体強化」の数倍の能力上昇に加え、武器にも気をまとわせて物質の強度を上げたり、気を鋭くまとわせて刃にしたりできます。

ガデイはこの気を使って移動と攻撃をしたのでした。

さつさと戦闘を終わらせたガデイは討伐証明部位の犬歯を抜き取り、血抜きをしてから毛皮をはぎ取りました。毛皮は安価ではありますが換金部位なので、汚れを残さないよう丁寧にはぎました。

フォレウルフ達の骸をそのままに、残りの群れへと足を進めようとしたガデイでしたが、不意にこちらへと迫る数十の気配に気づき、踏みとどまりました。

「こちらの位置を気取られたか。しかし、この数は……」

おそらく先ほどのフォレウルフの仲間なのでしょうが、近づいてくる気配の数は不自然なまでに多く、群れ全体で移動しているようでした。ガデイもわずかに困惑しています。

身の危険はさほど感じないのですが、先ほどから感じる魔物の違和感にガデイは内心首を傾げました。

「地域ごとに特徴はあっても、魔物の習性は世界的に変わらないはずだが、この森特有の傾向なのか？ 何にせよ、こちらから向かう手間が省けたな」

本人にとつては愉快げに、他人から見ればぞつとするような凶悪な笑みを浮かべ、ガデイは再び木剣を構えました。

仲間の死を察知したフォレウルフの群れがその場に駆けつけ、ヒトの形をした化け物を相手にしてしまったと知るのは、それから間もなくのことでした。

二十話 商業都市アルエ その六（後書き）

書き方が変わったかもしれません。

だいぶ間がありましたし、仕方ないと言えば仕方ないのですが。

はい、言い訳ですね、すみません。

また更新は遅れそうですが、なんとか頑張ります。

二十一話 商業都市アルエ その七（前書き）

今回はのほん回で、ちょっと短めです。

投稿もストーリー内進行も亀の歩みですが、何とかご容赦ください。

二十一話 商業都市アルエ その七

流れ作業のように大量のフォレウルフを解体し、ガデイが一息ついた頃には木々の切れ間から強い日差しを受けました。

比較的朝早くにアルエを出たガデイの真上で太陽が燦々と輝いています。

ガデイは天上にのぞく自然の時計に目を細め、静かにため息をつきました。

「思った以上に時間をかけたな」

疲労感をにじませる声でつぶやくガデイでしたが、表情は完全に無に戻り、フォレウルフの本陣が襲ってくる前に見せた苛烈で背筋の凍るような表情はナリを潜めています。

静寂に包まれた森の中、木々の切れ間から降り注ぐ陽光と、剣を手にして天空を仰ぎ見る騎士のような青年。

見方によれば、まるで英雄が出てくる絵本の一枚のような、とても神秘的な光景がそこにはありました。

足下に散乱した大量の狼の死体と、むせかえるような血の臭いさえ無視すれば、ですけれど。

いつまでもぼーっとしているわけにもいかず、ガデイは少し肩を落としてから牙と毛皮を集めていきました。

はぎ取りの最中、「手間取りすぎた」とか「修行が足りん」とかいった独り言を漏らしながら、迅速に素材の回収にいそしんだガデイでした。

優に三桁に上る獣の死骸を料理し終え、数体分のフォレウルフの肉をあぶって腹に収めたあと、ガデイは残りの死肉を放置することにしました。

魔物の肉は一部を除いて市場に出回らないので買い取りもしてもらえず、味も微妙で持ち帰るほどのものでもなかったからでした。

フォレウルフの処理を森に住む動物たちに丸投げしたガデイは、

食休みを終えるとすぐにウルフの森を後にしました。

生き残りがいたのか、数体ほどのフォレウルフらしい遠吠えが聞こえてきましたが、ガディはあまり気にとめずに立ち去っていきました。

行きと同様に体に気をまとわせて肉体を活性化させ、常に疾走状態で帰路についたガディはすぐにギルドへ向かい、依頼の完了を報告しました。

一日もかからずにパーティー推奨の依頼を達成してしまったことで目立ってしまい、少々騒ぎになったりもしましたが、ガディは何を訊かれても黙秘を貫くことでやり過ごしていました。

ついでに毛皮の換金もすませてギルドを出たガディは朝にも寄りついていた傭兵と双子の家へと顔を出しました。

「邪魔をする」

「あつ、オジサン！ お仕事おわたなの？」

「依頼を一つ済ませてきた。マヤ、父親の様子はどうか？」

無愛想な挨拶に心えてくれたのは双子の妹のマヤでした。今ではとつくに警戒心がなくなっており、屈託のない笑顔でガディを迎え入れました。

「とつても元気だよ。早く体の調子を確かめたい、つて今にも布団から抜け出して動きたそうだったんだけど、メツ！ つて言っておいたからおとなしくしてるの」

「そうか。助かる」

「えへへ」

ただ乗せるだけの軽い調子でマヤの頭を数度たたき、照れた声を上げるマヤとともにガディは傭兵の寝室を訪ねました。

「邪魔をしている」

「オッサン？ 今朝来たばっかなんだろ？ 忘れ物でもしたのか？」

「今朝は慌ただしかつたからな。軽い診察と薬草を置いていっただけだったが、もう一度詳しく経過を聞きに来た。どうだ？」

「おっ！ アンタか！ 見ての通り、快調そのものだ。だから基本の型まではいかないが、コイツの素振りだけでもやらせてくれ！」
部屋にはいるとニルから疑問を投げかけられ、傭兵からはわりと切実な懇願がガデイに飛んできました。

「も〜！ お父さん！ まだお薬を飲んでから一日も経ってないでしょ！ ガマンしなさい！」

すかさずマヤから待ったの声が出てきます。

「でもな、マヤ。あまり腕がなまっちまうと、現場復帰したときつれえんだぞ？」

「傭兵の立場では貴方の意見も一理あるが、医者立場からすればマヤの言つとおりだ。無茶はするな。おそらく、まだ解毒は完全ではない。症状がある程度落ち着くまで、大人しくしておくことだ」「手厳しいな……」

名残惜しそうにしつつ、傭兵はガデイの言に従う様子でした。

「そう慌てるな。急いで事は仕損じる、というだろう？ 病気の治療もしっかりとした食事と休養が必要だ。せめてあと一日待て。素振りくらいなら許可を出せそうだからな」

「本当かつ！」

「ああ。服用後しばらくは病人食が至高の料理に思えるくらいマズイあのポーションを飲めば、の話だがな」

「……ある意味で毒よりも辛い現実を叩きつけないでくれ。アレに立ち向かうんだと思うと、心が、折れそうになる」

「心中、察する」

「……オヤジ、オッサン、それって、そんなにまずいのか？」

「それはもう」

ニルの純粹な疑問を即座に肯定する二人。同調率は首を回す仕草、声の重なり具合まで完璧でした。

あまり理解したくない共感を覚えている二人にニルは呆れた顔をして見せ、マヤはクスクスと控えめに笑っていました。

その後も傭兵や双子と少し雑談をしてから、ガディは一度宿屋へと帰還しました。

「やっと帰ってきたか。早速で悪いが、僕は出かける。ガディ、リーウエの事は頼んだ」

あてがわれた部屋に入った途端に、カイルは開口一番にガディにそう告げました。リーウエはスヤスヤお昼寝中でした。

「シエラか。何があつた？」

すぐさま事情を察したガディも、カイルへ端的に状況説明を求めます。

「ちよつと前に、わずかだがシエラの魔力の乱れを感知した。討伐目標は全部やつたみたいだから、おそらく依頼人の差し金だな。今は眠っているようで『念話』も通じない。シエラの意識がはっきりしていないと『転移』のための座標設定も曖昧になるから直接乗り込めない。

とりあえず、町の位置はシエラが放った魔法の残留魔力を大まかな座標として設定すれば『転移』で行ける距離だ。これから町に潜入し、世話のかかるツッコミ役を迎えに行ってくる。

報告は以上だ」

「どれほどかかる？」

「……一日、二日じゃ、たぶん無理だ。三日か、長くても四日程度だと考えていてくれ。シエラを連れて帰り次第、この町も出る。ガディとリーウエにはその間、保存食や備品の整理とか旅支度を進めておいてくれ」

「了解した」

ガディの返事を聞いてカイルはすぐさま立ち上がり、部屋から出ようと扉に手をかけました。

「カイル」

「……何だよ？」

しかし、ガディは今にも飛び出していきそうな様子のカイルを引き留めました。そして、振り返るカイルの表情に嘆息し、口を開き

ました。

「分かっているとは思うが、相手は殺すな」

「生かしてやる義理があるのか？」

即座に返したカイルの表情はガデイとはまた違った無表情でした。感情の色を一切見せないガデイの鉄面皮とは異なり、今のカイルは憤怒で他の表情を作れない状態です。

瞳の奥は静かでありながらも、確かな激情の一端を揺らめかせています。証拠に、この部屋の中にはカイルの押さえる気のない殺気に満ちていました。

並の人間では一瞬で気絶するほどの、鋭く苛烈な空気は空気をふるわせ、室内の調度品がわずかに悲鳴を上げています。

「無論、ない。だが、シエラに依頼したのは身なりから貴族だと推測できただろう。奴らの影響力は計り知れない。下手に手を出してしまえば面倒事に巻き込まれるのは必然だ。」

流石に俺とて国から追われるのは慣れていて。しかし手を出した場合、他国に渡るまでの間、窮屈な思いをするのは避けられない。避けうる障害はなるべく取り除くべきだ」

「僕たちの仲間に手を出したんだ。それ相応の報復をむこうも覚悟はしているはずだろ？」

「落ち着け、カイル。冷静になれ」

「どうして冷静でいられるっつうんだよ！」

諭すような口調で淡々と話すガデイに、カイルはついに声を荒げました。

「ガデイも僕の沸点の低さと優先順位は知ってたんだろうが！ 僕が一番大事だと思っているのはシエラとリーウエ、それにガデイ、お前らだ！ 仲間を害されたと思うと、その町ごとぶっ壊したくなる！ 人の逆鱗に触れたことを後悔させてやらなきゃ気がすまねえんだよ！」

「それでも、だ」

無意識的に放出されているカイルの魔力が室内をかき乱し、それ

だけで部屋ごと吹き飛ばしそうな力があります。まさにカイルの怒りを体現しているようでした。

ですが、荒れ狂う力の波の中でも平然としているガディ。頭に血が上ってしまっているカイルの前に、薄く笑みさえ浮かべています。「確かに、俺たちの保身という意味も含んではいる。だが、よく考えてみる。ただ殺したのでは簡単すぎる。そうは思わないか？」

真っ向から否定されると思っていたカイルでしたから、まさかガディから後押しするような発言があるとは思わず、一瞬だけ呆気にとられて言葉をなくしました。

「どういうことだ？」

「思い出せ。俺たちにとって、絶望とは何だった？ 希望とは？」

「いきなりだな。まあいいけど。」

聞かれるまでもないだろ。

絶望は生。希望は死。

生き続けることがどれだけ苦しいか、忘れたわけじゃねえよ」

「なら、答えは一つだろう？」

「生かして苦しめる、ってことか？」

「十分遊んできたらしい。お前はそれが可能だ、カイル。他者を貶め、なぶるだけの力がお前にはある。この世は弱肉強食の世界だ。

所詮、善悪は力の強弱でしかない。お前に対抗できない相手が悪いだけだ」

「相変わらずの持論だな。強者至上主義、ってやつか。でも、人間至上主義でもなかったか？」

「俺たちの敵に回った輩を人間として扱う必要はない」

「もつともだ」

ここにきてようやくカイルにいつもの調子が戻ってきました。軽く苦笑を浮かべている彼に、ガディも表情をいつものように堅いものへと戻しました。

「落ち着いたか？」

「ああ。世話をかけたな。ガディの言うとおりだ。殺した方が今後

を考えると面倒だし、何より楽にさせてやるなんてもったいなさすぎる」

「報復も結構だが、何より俺たちの保身を考える。無自覚に厄介事を持ち込むらしい俺が言えた事ではないかもしれないが、未然に防げるものは防いだ方がいい。お前は干涉系の魔法が得意だろう。記憶操作はこういうときのためにある」

「分かったよ。きつちりトラウマ作ってきてやる」

いたずら小僧のような声音で笑い、かなりの余裕を取り戻したカイルは扉を開けました。

「行ってくる」

「行ってこい」

短く挨拶を交わして、カイルはのんびりとした歩調で部屋をあとにしました。

「全く、世話のかかる困ったリーダーだ」

まるでやんちゃ盛りの息子を見守る父親のようなつぶやきをこぼし、ガディはカイルの気配を追っていました。

「……んむ……」

残されたガディは今の今まで眠りこけていたリーウエに視線をやり、二人が帰ってくるまでの間をどのように過ごすか考えながら、肩をすくめて再び嘆息するのでした。

二十一話 商業都市アルエ その七（後書き）

ガデイ兄さんをパーティー内のお兄さんの存在、という感じを出したかったんですが、伝わりましたかね？

大まかなネタは考えているのですが、形にするのが難しくなってます。更新はまだまだ遅延しそうです。テストもまだ終わってませんしね。

それと、短編出してみました。

この作品には全く関係のない恋愛ものの作品ですが、よければ目を通してみてください。暇つぶしにはなると思います。

では、また次回に。できるだけ更新早めますので、よければまた読んでやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8085s/>

それゆけ！ 僕らの勇者様！

2011年9月27日03時16分発行